UFO・超能力・宇宙哲学

UFO contactee

SINCE 1961
GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFO・ESP・Cosmic Philosophy

コンタクティー

アダムスキー・永遠の真実と栄光

わが母の驚異のUFO目撃

UFOを頻繁に見る私のカルマ(3)

那須高原で巨大母船出現!

あなたにもオーラが見える

予知能力をもつ土星人女性の援助

SPRING
1995

128

UFO contactee No. 128 Hachiro Kubota, Editor / Publisher, GAP-Japan

CONTENTS 〈*Dedicated to Space Brothers and Cosmic Consciousness*〉

〈巻頭言〉科学と人間 ―― 1

アダムスキー・永遠の真実と栄光 ―― ダニエル・ロス 2

わが母の驚異のUFO目撃 ―― ミシェル・ジルガー 11

総会の日にUFO出現 ―― 15

UFOを頻繁に見る私のカルマ(3) ―― 溜池みゆき 17

GAP短信 ―― 21

科学――SCIENCE ―― 22

那須高原で巨大母船出現！ ―― 堀江 健一 24

ダニエル・ロス氏宅訪問記 ―― 久保田八郎 26

あなたにもオーラが見える ―― 遠藤 昭則 30

予知能力をもつ土星人女性の援助 ―― ジョージ・アダムスキー 35

久保田会長と語ろう会／久保田八郎広島講演会 ―― 43

大盛況！1994年度日本GAP総会 ―― 田中 淳 44

〈投稿欄〉ユーコン広場 ―― 46

UFO contactee バックナンバー主要記事 ―― 48

〈予告〉東京月例セミナー300回達成記念祝賀行事 ―― 49

〈広告〉新アダムスキー全集 ―― 50

編集後記 ―― 51

日本GAP全国月例セミナー案内 ―― 52

金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米・他の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

▲阿部清徳氏

〈表紙写真〉

1993年5月15日、日本GAP会員、阿部清徳氏（埼玉県）がマレーシアからの帰途、東京上空で旅客機の窓から撮影したUFO(左上)。秋山真人氏は本物であると鑑定している。

データ ニコンF401/28-70ズーム/コダック400

〈巻頭言〉

科学と人間

一昨年九月にアメリカが打ち上げた火星探査機マーズ・オブザーヴァーは、火星の実態を探るための最新鋭機として期待されていたが、昨年八月二四日、タイムリミットとされる五時四〇分を過ぎても通信が回復しなかったために絶望視されて、この壮大なプロジェクトは水泡に帰した揚句、約一〇億ドルが宇宙に消えたと報じられた。通信装置に故障が発生したのだという。

一九七六年のヴァイキング火星探査機以来一六年ぶりの大プロジェクトで、成功すれば六八〇日間にわたり、火星表面の写真を地球に送り続ける予定だった。しかしカリフォルニア州パサデナのNASA（米航空宇宙局）ジェット推進研究所との通信は途絶えた。本体がどこを彷徨しているのか見当もつかないという。

だがこの発表がNASAの情報工作であることは編者に早くからわかっていた。したがってGAPの東京月例セミナーでこれに関する質問が出たときも、実際は探査機が正常に作動しているにもかかわらず、故障ということにして米側が隠蔽工作を行なったのだと説明した記憶がある。

昨年一〇月九日に開催された日本GAP年次総会において、アメリカGAP主宰者ダニエル・ロス氏は、はたせるかなこれを裏づける講演を行なった。つまり火星探査機マーズ・オブザーヴァーは実は故障したのではなく、正常に動いて火星を周回していることをNASAの職員が科学者に洩らしたというのである。

だが昨年夏にワイオミング州で開催された宇宙科学シンポジウムで、この発表がさほどの反響を起こさなかったのは、NASAの発表なるものが如何に欺瞞に満ちているかを科学者連が知りぬいているからだろう。

なぜNASAは火星探査機の行方不明説を打ち出したのか。いわずと知れた火星の超絶的な大文明の存在を突き止めたからである。そこで故障ということにして隠蔽し、これに世界の五四億の人間が見事にひっかかったのだ。

なぜ騙されたのか。

それは「科学」という言葉をあまりにも神聖視し、「科学」の名のもとに発表される事柄を文句なしに真実と思い込むように大衆が馴らされてしまったからである。この頃氾濫する健康食に関する書物も、「これは科学的な研究にもとづいている」と書いてあれば一も二もなくその内容を信用し、野菜類を買い込んでスープを作ったりする。外国語の独習書までが「科学的な学習法」と銘打って、如何にも速効性があるかのように見せかけたりする。外国語を覚えるのに科学などは関係ないのに。

ここではNASAの隠蔽策を誹謗するものではない。ましてや「科学」自体を軽視するものではない。科学は重要であり、人類の究極の進歩が科学によってなされることは編者の持論である。なんとなれば地球以外の惑星の大文明の存在を探知し、比較の法則によって一大覚醒を促す機運を生じさせるものは、宇宙船の開発による別な惑星への到達にかかっているからだ。訪問した惑星での大文明に接して驚愕し、矮小な地球の井蛙の管見に心底から恥じいって、宇宙的な思想と大文明建設への槌音を高らかに響かせるものは、アダムスキーの言う重力場機関を搭載した宇宙船の開発にかかっているのであって、これ以外の何物でもない。

だがNASAは大芝居を打った。これはそれなりの理由があるのであって、いちがいに責められない。今、別な惑星の文明存在を公表して大衆を瞠目驚嘆させ、腰を抜かさせるには時期尚早なのだ。だから隠すのがよいというわけでもないが、もっと人類が追い詰められて真剣に打開策を講じるようになるまでは、現状維持がむしろ賢明と思われるのである。

問題は大衆の側にある。「科学」の名のもとに言及される事物をすべて盲信してしまうという悪い癖にある。そこでこれを逆手にとってUFO問題や超能力現象を「科学」の名のもとに葬り去ろうとするエセ研究者が横行する。たとえばテレパシー現象を一つとってもこれを真っ向から否定し、物理学の法則に合わないという理由だけで嘲笑するのである。

どっこいアメリカは一九五七年頃からテレパシーの研究を初めていた。プリンストン大学のアインシュタイン実験室の協力者であったホフマンやバーグソンらの俊秀がテレパシー現象の実在を認めて声明を発したのが嚆矢となって、翌五八年には政府の委託により、メリーランド州のフレンドシップ市と二〇〇〇キロ離れた原子力潜水艦ノーティラス号との間に、壮大なテレパシー実験が実施されたのである。その結果、テレパシーは人間の想念波による通信であるという結論が出された。

この想念波なるものはまだ科学的に検出されていないようだが、現代物理学の法則で実証不可能という理由で否定するのは間違っている。現象が存在するものならば、物理学で未開発の分野があるのではないかと推測するのが学問というものだろう。

サイコメトリーという、物品から出る波動を手でキャッチしてその物の特質を言い当てる能力がある。これの抜群の能力を持つGAP会員H氏の体験記を次号に掲載の予定である。これも波動による現象なのだ。

（久）

Adamski's Cosmic Reality is Timeless
by Daniel Ross / Translated by Koichi Sakamoto

アダムスキー・永遠の真実と栄光

●ダニエル・ロス／坂本貢一訳

昨年一〇月九日、日本GAP総会が東京都芝公園の機械振興会館で開催されて、招待により来日したアメリカGAP主宰者ダニエルロス氏が講演を行ない、満員の参会者に多大の感銘を与えた。以下はその講演の内容。通訳は会員の坂本貢一氏が担当。

月と火星に人工建造物

皆様こんにちは。ふたたびお会いできて、とても嬉しいです。

（以上は日本語で挨拶。盛大な拍手）

三週間ほど前にとても興味深い『宇宙科学シンポジウム』に行ってまいりました。ワイオミング州のある古い町で開催されたものですが、国内外の宇宙科学者や研究家たちが、さまざまな研究結果を発表していました。

ある科学者グループは、「NASA（米航空宇宙局）の宇宙写真を数年がかりで分析した結果、月と火星に人工的な建造物が多数存在する証拠を発見した」という発表を行なっていました。

実際、最新の画像処理テクニックを用いた、完璧な証拠が提示されていました。その他にも、近隣の惑星に文明が存在する可能性を示唆する発表がいくつかなされていました。

そのシンポジウムには一流の専門科学者たちがたくさん参加していました。しかもその開催を告げるチラシには、「この種の催しの最高行事」、さらには「最新の宇宙科学情報をあますことなく大衆に洩らす前例のない催し」といった宣伝文句が浮き上がっていました。それにも刺激されまして、彼らがどんな情報を持っているのかを知るべく、はるばるワイオミングまで出かけて行ったというわけです。

さて、先程お話しました科学者グループは、月と火星に人工的な建造物が存在することを示す素晴らしい証拠を発見してはいたんですが、残念なことに、その二つの天体の自然環境、つまり大気密度や表面温度といったものですが、そういったものに関する新しい事実は何一つ発見していませんでした。

もっとも、彼らが研究対象としたものは、月と火星の表面を写した、ほとんどが白黒の写真のみでしたから、それも致し方のないことです。しかも、彼らが入手できた写真は、どれもが、しかるべき筋の厳重な検閲をパスしたものばかりでした。

さらに、月の写真に関して言いますと、すべてが二〇年も前の写真ばかりでした。アメリカは、今年の初めに無人探査機を送るまでは、一九七二年以降、月に探査機を一度も送っていないんです。ちなみに、クレメンタインと名づけられたその無人探査機は、月面の詳細な写真を二カ月もかけてたっぷりと撮影しています。

しかしNASAがこれまでに公表した写真は、そのうちの一枚か二枚で、それがまたひどく不鮮明な写真なんです。残りの写真は今年（一九九四年）の一二月一六日までは一切公表されないということです。

UFOの存在は認めるのだが――

さて先の科学者グループは月と火星

◀講演中のロス氏　撮影／松村芳之

に存在する建造物は、巨大な石を用いて作られた、いわゆる巨岩建造物のようだと述べていました。ただ彼らは、NASAが発表した月や火星の環境データ、つまり大気密度、表面温度、水、酸素といったものに関するデータを、反論不可能なものとして受け入れていました。そしてそのために、「それらの建造物は、かって存在した文明の遺跡であろう」と結論づけていました。つまり、「その昔、そこには宇宙人の文明があった」と結論づけたわけです。

そのシンポジウムでは、UFOに関する直接の議論は行なわれませんでした。ただし科学者たちは、聴衆からの疑問に答える形でUFOの存在は認めていました。「UFOが地球にやって来ている目的は不明だが、その存在だけは否定しようがない」というのが、彼らの見解でした。

私は夕食会の席や休憩時間中に（それから帰りの飛行機の中でも）そのシンポジウムに出席していた科学者たちとさまざまな会話を交わしました。彼らの多くは、私が提供した情報に大きな興味を示してきました。私の本を知っている科学者たちも何人かいましたし、そのうちの何人かはそれを読んでいました。

私は彼らとの会話の中で、「月と火星の本当の自然環境が明らかになれば、UFO問題の真相もたちどころに明らかになるだろう」という自分の見解を伝えました。

ただ彼らは、現在この社会に氾濫（はんらん）している、いわゆる『UFO物語』や『UFO理論』に対して、明らかな拒絶反応を示していました。しかし私は、それを責められませんでした。私自身も、その種のほとんどの情報に対して、彼らと全く同じような意見を持っているからです。この分野の情報には、実際、真実からかけ離れたものが、とても多いんです。

しかし、もし充分に多くの人々が、近隣の惑星にも文明が存在することを知ったとしたら、NASAの高官たちも、それらの惑星の自然環境に関する正しい情報を、いやでも公表するしかなくなるはずです。そうなれば、このUFO問題の真相も、世界中に速やかに知れ渡ることになります。この二つは、決して分離できない問題なんです。

火星探査機は故障していなかった！

さてワイオミングで行なわれた、そのシンポジウムでは、最後に、「民間レベルの独自の宇宙探査を計画しよう」という提案が採択されました。「NASAが正しい情報を公表しない以上、それが、他の惑星に関する正しい情報を手にするための、唯一の方法である」というのが彼らの一致した意見でした。それを可能にするには人材的にも資金的にも大きな困難が予想されますが、彼らは、とにもかくにも、その実現に向けて動き出したわけです。

そのシンポジウムでは、さらに、昨年（九三年）打ち上げられた火星探査機に関する真相も暴露されました。あの探査機は、途中で故障を起こして行方不明になったと報じられていますが、実際には今でも順調に飛び続けているというのが真相のようです。彼ら（科学者たち）はそのことをNASAの職員から聞き出しています。

NASAの火星探査計画の一部は、そもそも最高機密プロジェクトとして発足したもののようです。そして、その部分の施設は軍の管理下にあって、部外者が絶対に入れないシステムが設けられているということです。

しかしながら、ジョージ・アダムスキーが主張した金星や火星に関する真実は、決して消滅してしまったわけではありません。それは、政府の秘密機関によって、しかるべきところに、しっかりと隠されているだけです。そして、その背後には、『サイレンス・グループ』として知られる、真実に敵対する、極めてネガティブ（否定的）な勢力の存在があります。

アダムスキーによると、その敵対グループは、「この文明が（太陽系の）真実を知る瞬間が近づけば近づくほど、より激しい妨害工作に出てくるだろう」ということです。それは、彼らにとってまさに生存をかけた戦いなんです。

アダムスキーが伝えた「人間に関する真実」

今日の講演で私は、ジョージ・アダムスキーが教えてくれた「人間に関する真実」の話をしたいと思います。その真実は永遠の真実です。皆さんがどこに行っても、それは変わりません。この太陽系内のどの惑星に行こうと、あるいは、別の太陽系内のどの惑星に行こうと、それは常に真実です。なぜならば、それは「宇宙の法則」だからです。

ここにいらっしゃる皆さんのほとんどは、ジョージ・アダムスキーの書物を、すでにたくさんお持ちのことと思います。久保田八郎会長は大変な努力の末に、アダムスキーのすべての書物

を日本語に翻訳し、しっかりとした本の形で出版なさっています。いわゆる「新アダムスキー全集」ですが、すでに皆さんは、そのほとんどを読まれたのではないかと思います。

そこで私は、皆さんに何か目新しい情報をお伝えしたいと思いまして、アダムスキーが比較的小さなグループに対して行なった「講話」や、彼の個人的な会話などが録音されたテープを、片っ端から聴き返してみました。

アダムスキーが語る宇宙哲学を、短期間のうちに次から次へと聴くという体験は、正直なところ、自分の未熟さを思い知る体験でもありました。実際、彼が語る深遠な哲学に真剣に耳を傾けたとき、ほとんどの人間は、大きな感動を手にするとともに、自分の心の未熟さをも思い知らされることになります。

人は宇宙とUFOの研究を続ければ続けるほど、本人は「宇宙に関する知識」という莫大な遺産を残してくれたジョージ・アダムスキーに、ますます敬意を払うようになります。そして、私たちが学んでいる物事を正しく理解しているかぎり、学びには終わりというものがありません。アダムスキーが何度も語っていますように原理は決して変わりませんが、結果は、常に前進を続ける生命とともに、絶えず変化しているのです。

人が宇宙的な物事について語るとき、個人の業績は、本人が行なった物事によって測られるのではなくて、宇宙的な目的を帯びた物事をなそうとしている他人に対して、本人がいかに多くの影響を与えたかにかかっています。これは全くのところ、本人が分かち与える知識が、かわって他人を発奮させるからです。

そしてその活動を続けるには、常に新しい事を学び続けなければなりません。知識を受け取る側の関心事がさまざまであるために、新しい人々と接触するたびに、全く新しい質問や議論が持ち上がることになるためです。

アダムスキーは素晴らしい人物だった

アダムスキーは、話をする相手が変わるたびに、常にその人物、あるいは人々に最も適した話し方をするように心がけていました。そのため彼の「遺産」は実にさまざまな種類の情報を含むことになったわけです。

彼はあらゆる種類の人々に会い続けました。人々は、進歩した真のスペース・ピープル（異星人）たちの「正体」を知りたがっていました。彼らの科学を学びたがっていましたし、彼らが生活で生かしている哲学を学びたがっていました。アダムスキーは、物事が進歩するにつれて、常に新しい情報を伝えました。宗教家、政治家、その他のさまざまの組織の指導者たちが、意欲的に彼との会見を求めてきました。

彼はまた、宇宙船や宇宙飛行に関する技術的なデータを望んでいた、宇宙開発にたずさわっていたハイレベルの科学者たちと頻繁に接触しました。そして翌日または翌週には軍人、政府関係者、一般人、マスコミ関係者などに話していたかもしれません。

さらに彼は、さまざまのグループとの交流も頻繁に行なっています。専門家のグループ、教育関係者たち、若者たちなどが、特別な物事を知りたがっていたのです。多くの人は宇宙と惑星からの宇宙船の到来に関する本物の情報を求めていました。

したがって、いかにあらゆるものが雪崩を打って殺到したかがわかるでしょう。それで彼の莫大な情報という遺産が、あらゆる分野の人々との私的なまたは長い話し合いを通じて。もたらされたのです。ここで我々はアダムスキーが語った物事の信憑性を理解できるでしょう。

多くの人には、この宇宙的な分野は夢想家のためのくだらない空想的なドラマではなくて、社会の進歩のための宇宙空間の知識に関する、最も啓蒙的なプログラムであったのです。

アダムスキーは自分の話や講演などを自分で録音したことはないのですが、たぶん数百回も録音されたと思われます。人々は当然のことながら彼の話を録音したがっていたのですが、彼はそうすることを許していたのです。

またアダムスキーは、スピーチや講演の前に原稿を準備したことはありません。彼はどんな話をするときにも、話す内容については、自分自身の意識を敏感に保って、自然の印象に従ったのです。アダムスキーは生来、意識的にひたむきになる人だったのです。

彼はまた「充分に受け取り、充分に与えよ」という宇宙の法則をしっかりと守っていました。スペース・ピープルはアダムスキーに、宇宙に関する知識や、自分たちの惑星群の文明に関する知識を与えた上、彼らの宇宙船に乗せて宇宙旅行に連れ出しています。

一方、アダムスキーは自分の知識や体験を公開し、仲間にたっぷりと伝えています。

もし皆さんがテープに録音されているアダムスキーの話を聴いて、彼の英語を理解できたとしたら、彼の知性レベルがどんなに高いものであったかを容易に感じ取れるはずです。それは地球へ来る本物のスペース・ピープルとのコンタクトという確固たる体験を通じて語る一人の男です。

宇宙的フィーリングとは

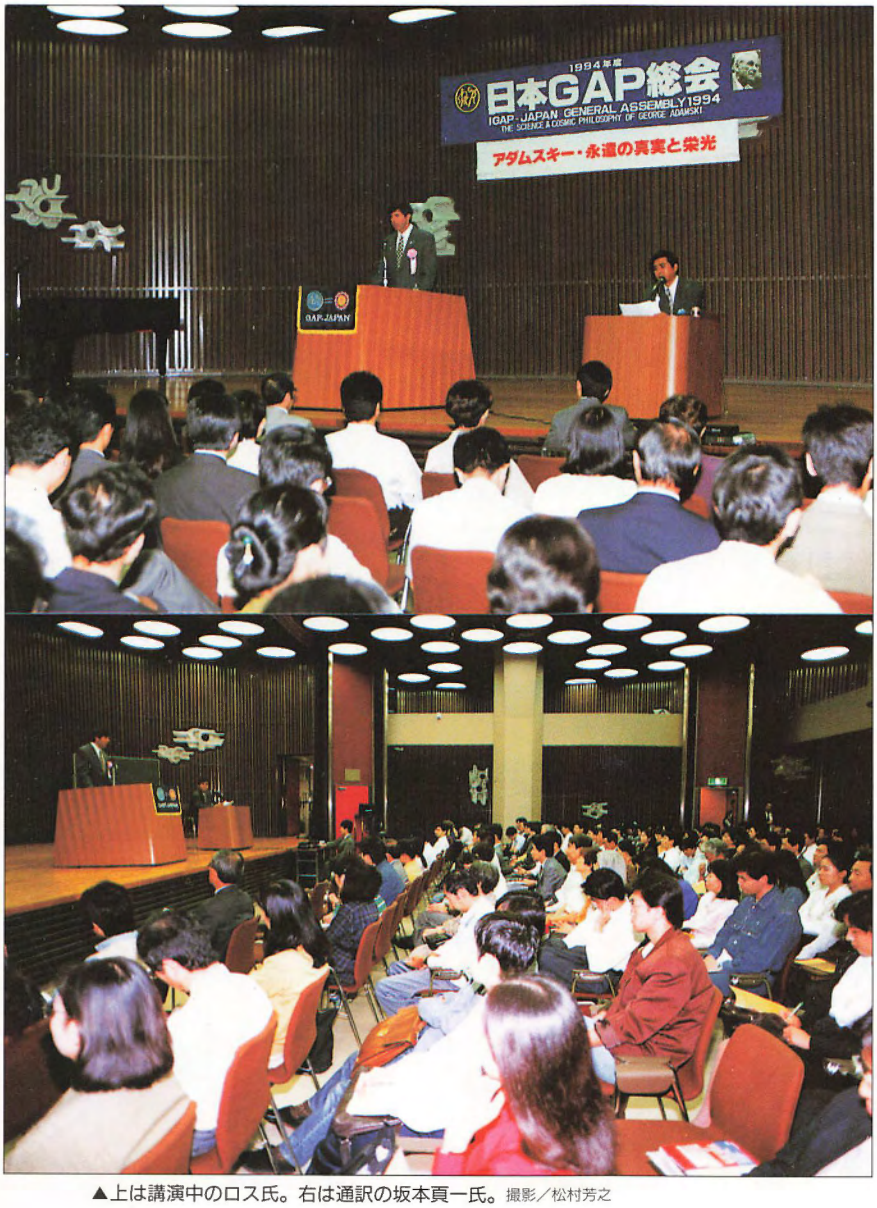
彼の「宇宙哲学」は、地球人にとってはなじみの薄いものでしたが、アダムスキーはそれを、私たちの身のまわりで発生しているさまざまな現象を引

き合いに出すなどして、とてもわかりやすく語りました。宇宙的な生き方とはどんな生き方かということを、そのようにして誰もが理解できるように示してくれたのです。

彼の言葉や啓発的な話を聴くと非常な高揚感がわきおこるので、他の人たちが彼の面前で感じた高揚感にあなたがたもひたることができるでしょう。

宇宙的なフィーリングとは、たとえば「今日は何かよいことが起こりそうだ」という期待感や、映画の大スターやロック歌手のスターなどに出会ったりしたときの感情的興奮などとは、全く別な種類のフィーリングです。

宇宙的フィーリングとは宇宙と一体化したフィーリングです。それは心ではなく、魂で感じるフィーリングです。穏やかでありながら、胸が高鳴るような、内奥からわきおこる調和のフィーリングです。それはマインドや、視覚・聴覚その他の肉体的感覚器官を通じて起こす感情的な反応とは別な種類のフィーリングです。



▲上は講演中のロス氏。右は通訳の坂本貢一氏。撮影／松村芳之

恐怖心は人間や国家の敵

また、アダムスキーの深遠雄大な教えと宇宙に関する情報は、我々を押さえていた昔からの誤った観念や間違った考え方のすべてを一挙に解決しました。誤った教えや古い伝統的な習慣によって、人類はこれまでに多くの恐怖に人生を支配されてきたのです。

アダムスキーは述べています。

「恐怖は理解力の欠乏ばかりではなく、信念の欠乏にもよるのである。それはこんにち我々が直面している多くの不愉快な問題の原因となっている。恐怖は社会に見られる不幸の原因となっている敵であると言えよう。それは無数のハイウェーを持ち、それを通じて国家ばかりか個人にも力を及ぼすのである」

恐怖にはなぜそんなパワーがあるのでしょうか。答えはこうです。

恐怖とは人間の心の中に存在しているのです。そして恐怖は「宇宙の叡知」を信じない状態なのです。

しかし地球にやってきている本物のスペース・ピープルは、いかなる恐怖をもいだいてはいません。なぜなら彼らは、あらゆる生命との宇宙的一体感を認めているからです。アダムスキーが語るときにはいつも明確に述べていたのですが、異星人は私たち地球人と全く同じ人間です。

しかも彼らは私たちを混乱させるようなことを何一つ教えてはいません。スペース・ピープルが地球へ来たのは、地球人に、人間の本当の潜在能力と、宇宙との一体性を教えようとしたのです。彼らは、地球人が自分の理解力を高め、自分の真の自我を知り始めるのを援助するために来るのです。

そしてそこにアダムスキーが生前にさまざまな攻撃を受けるとともに、彼の主張が今なお中傷され続けている大きな理由があります。アダムスキーは、素晴らしい進歩をとげた他の惑星の人々も私たちと全く同じ人間だと語りました。ところが、この世界の経済を操っている連中は、大衆にそれを知られると困るのです。

サイレンス・グループの暗躍

アダムスキーが「サイレンス・グループ」と呼んだその連中は、混乱と神秘主義の氾濫が続くことを望んでいます。「大衆がUFOに関する何かを知ったり信じたりするとしたら、それは真実とは違うものでなければならない」というのが彼らのモットーです。

そのため、彼らはUFOに関するあらゆる種類の恐怖に満ちた情報を流してきました。たとえば、「UFOを操縦しているのは、人間とは全く違う恐ろしい生き物で、地球人を誘拐して気味の悪い実験をしたり、マインド・コントロールをするために来ているんだ」というような情報です。

とんでもない話です！　マインド・コントロールをしているのは、この地球に住む人間なのです。それは、UFOを怖がらせたり、関心を失わせたりして、大衆から真相を隠そうとするためです。それで彼らは巧妙な情報工作をやり、UFO問題に関するデマを流して、大衆に真実を知らせないように暗躍しているのです。

加えて彼らは、自分たちのために率先して働いてくれる人々を大量にかかえています。ユーフォロジー（UFO学）研究をやっている文筆家です。というのは、その人々はサイレンス・グループが流している意図的なニセ情報の一部または全てを信じきっているからです。それにさらに彼らの空想を加えて混乱の度合いを高めているのです。

これまでそんなふうに広められてきたUFO問題は、あまりにもゆがめられたために、大衆の多くはUFOについてはもう聞きたくないと考えています。これはUFOに関して価値のある話が全く聞かれないからです。

愚かなUFO文筆家たち

あまり楽しい話ではありませんが、UFO文筆家たちがどんな事を言っているかを少しお話ししましょう。

彼らは「これも恐ろしい、あれも恐ろしい」と大衆に言い続けています。「深く落ちくぼんだ目と、灰色の肌を持つ恐ろしい小さな生き物が地球へ来ている。そのようないわゆる地球外生命体が、さまざまな精神的、肉体的誘拐を地球人に行なっている」というような事を伝えているのです。

さらに、その他の全く意味をなさない否定的な考え方が加えられています。そしてUFO問題のあらゆる事が不可解なミステリーとして残されます。人々は彼らの話を聞けば聞くほど、何が何だかわからなくなります。大衆がUFOを恐れ、宇宙空間をさえも恐れるようになったのは、UFO文筆家たちによるこの種の話を絶えずくり返して聞かされたためです。

真実のスペース・ピープルは高度な発達をとげた人々

以上は、地球の空を飛ぶ平和な宇宙船の背後にひそむ本当の目的から完全にかけ離れた逆な話です。高度に発達した宇宙からの来訪者たちは、非常に崇高な目的をもって地球へ来ているのです。「UFOは人間とは違う生物によって操縦されているんだ」という主張がなされた場合、アダムスキーは次のように言ったものです。

「そんことを問題にするな！　こんな言いぐさは人間の心によって作られたものだ。ただ他人の心を閉じさせて、本来の理解力を鈍らせるだけだ」

スペースピープルが地球へ来る第一の大きな目的は、純粋に科学的なものです。彼らはこの太陽系内で発生しているさまざまな変化を観測し、研究しています。特に各惑星の地軸の傾きと、宇宙空間や惑星周囲の電磁場の状況に大きな関心を払っています。

これらのすべては、地球で核兵器が大量に使用されたりすると、大変な悪影響を受けることになります。地球人は多年、自然の法則に反することばかりやってきました。そして太陽系の自然のバランスを破壊する潜在力をもっています。だからこそ異星人は厳重な警戒を続けながら地球に来ているわけです。

この世界の主要な国々の政府は異星人の活動を間違いなく知っています。そして彼らが何らかの変化を見つけたならば、各国政府はそれに関する情報を受け取っています。しかし大衆は何も知らされていません。他のいろいろな事も知らされてはいないのです。

政府の隠蔽工作

しかもそのことは、政府高官たちが別な惑星群から来る宇宙船に関して、大衆を闇の中に閉じ込めてきたという事実と密接に関連して行なわれているのです。そのために金星と火星の真実の環境に関して大衆をごまかしてきたわけです。彼等は、金星と火星につい

て一般に公表してきた事柄とは別な事を確実に知っているので、いわば大衆の信頼を裏切ってきたのです。

彼らは一体いつになったら真実を公表するのでしょう？　数年後かもしれません。しかし我々の太陽系に関する真相は、我々の社会が宇宙空間へ本当の前進をする前に、明確にされる必要があります。

私たちは今でもまだロケット技術を応用しており、『スペースシャトル』という一〇億ドルもする『飛行機』を打ち上げています！　この場合、我々の宇宙開発計画を正しい軌道から逸脱させている『何か』が存在しているに違いありません。たとえば、燃料産業のような『何か』です！

宇宙開発が最重要

なぜならば、地球の宇宙開発科学者たちは、すでに一九六〇年代にフリーエネルギーを利用した推進機関を順調に開発しつつあったからで、このことはアダムスキーがはっきりと語っていることです。

そして彼は一九七〇年代までに、惑星間を往復できる地球製の本物の宇宙船が間違いなく作られるとも言っていました。

さらにアダムスキーは言っています。

「その種の本物の宇宙船が作れるようになれば、我々はそれに乗って太陽系を探検し、多くの事を学ぶことができるようになる。そうなれば我々は異星人の科学と知性のレベルに、数百年もあれば到達できるようになるだろう」

私たちの宇宙開発計画が正しい軌道に乗りさえすれば、我々の文明にたいして素晴らしい未来が展開するでしょう。隣の惑星に気軽に休暇を楽しみに行くことも可能になるでしょう。

我々の文明の未来には、以上の可能性が広がっています。この実現を早めるのも遅らせるのも、すべて私たちにかかっています。

どうすれば地球社会が進歩するか

アダムスキーが宇宙時代の幕開けにUFOに関する情報をもたらして以来、全く変わっていない事が一つあります。それは地球の上空で目撃されるUFOの大多数は、金星から来る宇宙船であるという事実です。

それと、もう一つ。「もし一般大衆がスペース・ピープルの活動内容や生き方に関する真相を知ったならば、この社会の理解度と進歩は、うんと高まることになる」ということです。というのは、スペース・ピープルは地球人とほとんど同じように生きて、同じように物事を行なっているからです。

アダムスキーは彼の著書に次のように書いています。

「異星人は各惑星間の進歩のレベルを比較したりしない。かれらはこのような区別をしないのである。それぞれの惑星が他の惑星よりもすぐれた固有のレッスンを学ぶことのできる宇宙の教室なのだ。しかもあらゆるレッスンは完全な生活をするのに重要である。

もし地球の我々が正しいバランスをとって努力し、異星人のような行き方に少しでも近い行き方をするならば、非常にうまく行動していることになるだろう」

以上の事柄は、いつかは全ての人々に認められる真実です。

スペース・ピープルのような生き方をするには

私たちは個人的に、そして一つの社会として、どうすればスペース・ピープルのように生きられるでしょうか？本日の私の講演のこれからの部分で、テープに録音されたアダムスキーの話から直接に話題をあれこれと拾いだしてみましょう。これが右の質問にたいする回答になります。

スペース・ピープルのように生きるための第一のステップは、自分自身の真の姿を正しく知ることです。

私が録音テープでアダムスキーの声を初めて聴いたのは、今からちょうど二〇年前でした。終わりまで続いたその話は、高度に啓発的な内容で、その中でも特に素晴らしかった一つの話題を覚えています。私が大感動した初めて聴いた話です。それは単純な内容ですが、人間の本質を説明する素晴らしい譬え話でした。

彼は次のように語っていました。

「一滴の水滴があるとしましょう。水がどんなものであるかは皆さんご存じですね。水道の蛇口からも出てきますし、空からも雨となって降ってきますし、海にもあります。どれもが全く同じ元素で出来ています。

さて、その水滴ですが、小さいのもあれば大きいものもあります。それが何かの平らな面に落ちると、底が平らになり、上側はドーム側になります。そのとき、それは個性を持つことになるのです。つまり、それ自身の独特な形になるわけです。

そこで、その水滴がもし言葉をしゃべれるとしたら、おそらくこう言うでしょう。

『僕が見えるかい。僕は平らな底と丸い天井を持っているんだ。僕は水という透き通った綺麗な液体で出来ているんだよ。僕を通して反対側が見えるだろう。それほどのものなんだ』

さて、その水滴は、長くそこに座り続けると、やがて蒸発し、最後には見えなくなってしまうでしょう。というのは、それはもともと見えない世界からやってきて、液体の形になったからです。でも、それは現在の水滴という形を体験しているにすぎません。

しかしその同じ水滴は、こんなこと

も出来ます。つまり小さな丘を転がり落ちて、道に迷い、悪戦苦闘します。チリや埃や悪臭を身につけてゆき、その他、通り道にあるあらゆる物を体にくっつけて、最後には水滴としての外見を失って、泥のかたまりになってしまいます。そうでしょう？　泥のボールになってしまうんです。

　そうなると、もう水は見えません。その泥のボールは個性的になって、こう言うでしょう。

『さあ、見てくれ。僕は泥のボールなんだ』

　そこで皆さんは言うかもしれません。

『違うよ。君は水だよ。水が君を作ったんだよ』

　しかし、泥は言い返します。

『違うのはあんたらだよ。水なんてどこにも見えないじゃないか。僕は水なんかじゃないよ。泥のボールなんだ！』

　泥のボールは言い張ります。

『僕が見えないのかい。僕はこんなチリとかその他あらゆる物から出来ているんだ。わかるだろう』

　それからこのボールは転がるのをやめて、一カ所にしばらくとどまります。最後に、最初にそのボールを作りあげた水分である水は、カラカラに渇いて、初めのチリにもどってしまいます。

　その水が持った唯一の体験は、水滴のみによって泥のボールに作られて転がり続け、途中でチリなどを次々に身に着けてきたこと。ただそれだけなのです。そのボールはもと水であったということを認識していません。水こそが自分の両親であったことを忘れてしまっているんです。つまりそれは、自分が泥のボールになったときから自分を分離してしまったのです。そして我々地球人は今、それと全く同じことをやっているんです。

　さて、別な水滴があります。それは転がり続けて真理を知ろうとしています。そのときそれはこんなことを言うでしょう。

『みんなが言うように僕は水なのだろうか。どう見ても水なんかには見えない。ただの泥のボールだし、でも僕が本当に水から作られているんだとしたら、どこから来たのか知りたいもんだ。どこかの源泉から来て水滴になったに違いない』

　そしてそれは転がり続けます。

　以上が我々が真理を知るための方法です。我々の真の自己を知るには、それを創った創造主のもとに帰らなくてはならないんです。

　さてその泥のボールは転がり続けて、やがて海岸に辿り着きます。そして最初の波をかぶった瞬間、海の中に完全に吸収されます。そして海に入った泥のボールは、どんな悪臭やチリを身に着けていたにしても、どんなに形が歪んでいたにしても、ひとたび海の中に飲み込まれたならば、ほとんど一瞬にして泥を除いて浄化されることになります。ほとんど一瞬です。

　そしてもと自身を作りあげていた水滴も、最初に持った小さなドームという理念を失うことになります。『僕が見えるかい。僕は水滴なんだ』と言っていた、あの小さなエゴをです。それもまた海の中で完全に消え去ることになるわけです。

　そして海の中に入った瞬間から、その水滴は海と同等のパワーを身に着けることになりますので、海が生き続ける限り、延々と生き続けることになります。と同時に、それは海の中で発生するいかなる事をも、その元水滴は認識できるようになります。

人間も水滴と同じ無限の可能性を持つ

　我々も『宇宙的人間として、真自我は宇宙と一体ですから、あの水滴と同じように、あらゆる所に存在しているのです。ですから我々もあらゆる所に同時に存在しているんです。もし自分の心を宇宙的な状態に保てたならば、いかなる場所で発生する、いかなる物事をも認識することができるんです。

　以上が我々に理解し得る最も妥当な説明です。あの水滴は泥のボールになるとともにその姿を完全に消しました。泥のボールは『僕は水ではない。泥のボールなんだ』と言い張りました。しかし泥のボールの存在を可能にしたのは水滴でした。

　水滴は我々人間の内部の純粋な実体、そして泥は純粋な物質性と言ってよいでしょう。ひとたびこの両者が一体化すれば、あらゆる点で同等です。ただ我々はその両方を分離させており、そのため、分離によって自分を失っているのです。

　当然のことながら、両者は一緒になりたがっています。そこで分離すると混乱が生じます。自分が離れてしまったと感じることによって、たぶん多くの不幸なことが自分に起こるでしょう。

　そこで我々には自己覚醒が必要になります。我々は自分の心の内部の『真実なるもの』にたいして自分を目覚めさせる必要があります。

　我々の内部にクサビを打ち込んで分離を発生させているのは、心なのです。それはエゴです。

　我々が泥のボールとしての心を持つ場合、それはもっと高度なものによって作られていくこと、その背後には両親がいること、その両親がいなかったならば、泥のボールは存在し得ないこと、それから宇宙の海に向かって転がり続けて、そこに到達することもできないこと、などを認識する必要があります。ひとたび海の端に達すると、人間はすぐにその一部になります。

　水滴によってあらわされる英知は、海の英知全部と一体化します。そうなると、海中のどこで何が起ころうとも、どんなに深くても、浅い所でも、どん

なに広い範囲であろうと、その元水滴は心と同じようにすべてを知覚することができるのです」

スペース・ピープルの生き方

さて、いかがでしたか。アダムスキーが語ったこの素晴らしい譬え話から我々は、それが意味するのは一つの目的を持った人間になることを意味することがわかります。過去の偉大な指導者たちは、ふた心のある人間は、いかなる物事も成就できないと教えています。

人間は自分のエゴが自分の真自我と離れて活動しているとき、ふた心を持つことになるのです。真の自我をアダムスキーは水滴にたとえていました。

真自我から分離して好き勝手に行動する心を持つ人は、習慣に支配されながら、あらゆる種類の失敗をおかします。好きなものと嫌いなものとを分離しながら生き続けます。自分に喜びを与えてくれるもののみに奉仕しているのです。

一方、一つの目的を持つ人間の心は、常に宇宙的な自我とともにあります。この両者は常に一体となって現われているのです。そこには分離はありません。そして分離のない所にはいかなる物に対しても批判や好き嫌いは存在しません。

これがスペース・ピープルの生き方です。彼らは形ある物を見ているとき、形だけを見ているのではなく、それを支えて生命を与えている『原因』を認識しているのです。木でも人間でも、その他生命あるものはなんでも、全く同じです。

それが彼らと私たちの間に存在する大きな相違です。彼らはたんに結果、すなわち現象だけを見ているのではなく、その現象を作り出している、目に見えない『原因』を認識しているのです。

彼らは常に万物を尊敬しています。というのは、彼らはすべての生命は互いにつながっているということを知っているからです。さらに、この世に存在するすべてのものが、たとえどんなに小さな昆虫であっても、明確な目的を持って存在しているということも知っています。

異星人は常に自然界を研究することによって、学んでいます。人間は自然界の中で機能しているものを見れば、それが真実であることがわかります。なぜならば、人間が起こす考え方が正しいかどうかを確かめるには、自然界を研究することによって可能になるからです。というのは、あらゆる宇宙の法則は大自然を通じてあらわれているからです。そして自然界が行使しているほとんどの法則は、地球人が正しい考え方を学びとるまでは、地球人の生き方に大きく矛盾しています。

▲ありし日のジョージ・アダムスキー。

愚かな農作業で大損

かつてアダムスキーはカリフォルニアで次のような話をしています。

私たち地球人は一般に自然界よりも自分の方がよく知っていると考えています。しかし最終的には常に自然が私たちに教えることになります。そしてその教え方は、私たちの学ぼうとする姿勢いかんで、きびしくもなれば優しくもなります。

農民たちが、テントウムシの害から作物を守るんだといって、農場に毒入りスプレーをまき散らしたことがあります。その結果はオレンジが採れなくなりました。果物が出来なくなりました。何も採れなくなりました。

農民たちはその小さな昆虫が蜜蜂と同じように花粉を運ぶ役割を果たしていたことを知らなかったのです。それで政府はどこかからテントウムシを集めてきて、彼らの農場に放すという大変な作業を強行しました。そして今では生きたテントウムシが五〇〇グラム単位で売られています。

スペース・ピープルは決して自然を破壊しません。彼らは殺虫剤はおろか人工肥料さえ使っていません。彼らは自然と戦ったりしないのです。

スペース・ピープルはどのようにして長足の進歩をとげたか

スペース・ピープルが私たちに与えてくれたものは、永遠にその価値を失いません。彼らは、私たちが今後、地球上でも、また宇宙のどこに行っても利用可能な価値ある知識を与えてくれました。そしてアダムスキーによれば、スペース・ピープルにくらべて、私たちはそれほど遅れているというわけでもないようです。

地球人のなかにも知的発達度が五パーセントに達している人がかなりいます。人間にそなわった知的能力を（一〇〇パーセントとすれば）五パーセント活用できている人々です。

ただし地球人の大多数のそれは一パーセントほどです。地球人のなかで最高レベルの知的進歩をとげている人々、つまり直感的、創造的に物事を遂行しながら生きている人々ですが、そのような人々は、自分の知的能力の五パーセントを活用できているというわけです。もう少しハイレベルの人が若干はいるかもしれません。

そしてスペース・ピープルですが、彼らの場合は、地球を訪れている人たち、あるいは地球に住んでいる人たちで、おおむね一〇パーセントということのようです。ただ金星人たちのなかには、一五ないし二〇パーセントに達している人も少なくないようです。

習慣細胞を除去すること

しかし物事はみな相対的です。ですから、あまり数字にこだわる必要はありません。知的発達度には個人差がありますし、同じ個人でもさまざまな試練や環境の影響で、それが上昇したり下降したりもします。

それが下降すれば進歩に逆行するわけですから、それはぜひ避けたいものです。しかし現実にはそのような例は少ないようです。

初期の人生においては、直感的、創造的な、いわゆる自由思考家であった人間が、その後、悪い習慣的想念を身に着けてしまったために、知的能力の活用度を減退させてしまうというケースです。

私たちが育ってきた環境や今の社会状況を考えますと、よほど強い決意がないかぎり、抵抗が最も少ない楽な道を選んで、習慣の奴隷になってしまう危険性を、私たちは常にかかえていると言えるでしょう。

知的に向上するには本物の学習が必要です。そしてアダムスキーが指摘しているように、私たちが頑固な習慣細胞を除去して脳細胞を活性化するには、多くの時間と努力を必要とします。習慣細胞を放っておきますと、それは支配権をとろうとして抵抗し続けるでしょう。

スペース・ピープルの研究法

スペース・ピープルはどのようにして知的能力を進歩させたのでしょうか。我々はどうすれば同じことがやれるでしょうか。

彼らはまず自分自身を研究したのです。細胞たちはどのようにして活動しているのか、肉体の中の細胞同士は、どのようにして連絡しあっているのか、肉体を構成する無数のパーツが、一つの単位として完璧に機能できるのはなぜか、といったことを学んでいます。こうして彼らは『真自我』を知るに至ったのです。

この真理は長い時代を通じて地球でも伝えられてきました。「自分自身を知れ。そうすれば、あなたはすべてを知るだろう」という言葉がそれです。あらゆる知識が人間の内部に存在しているのです。そしてスペース・ピープルは自分たちの心を、肉体の中の『すべてを知る者』すなわち『真自我』の導きに従うように訓練したのです。

人間は活動する想念です。このことを知ったとき、人間はどんな想念を自分の日常生活の一部として受け入れるでしょうか。もしそれが高揚しないで、調和のフィーリングを含まないものならば、その想念波動または印象を拒絶するとよいでしょう。そうすれば、本人はそれにパワーを与えなくてすみますし、それを表面化する必要もなくなります。

私たちは日常生活で高貴な想念をいだくことを習慣化する必要があります。宇宙的な印象に従うのです。これがスペース・ピープルの生き方です。だからこそ彼らは宇宙空間を自由に飛び回ることができるのです。私たちもそのレベルに到達できます。それは個人の努力にかかっています。

撮影／松村芳之

My Mother's Amazing UFO Sighting
by Michel Zirger
Translated by Koichi Sakamoto

わが母の驚異のUFO目撃

ミシェル・ジルガー
坂本貢一訳

ジルガー氏はフランスのアダムスキー派UFO研究家で、日本GAPの久保田会長と連絡仲間であったが、この団体の国際的な活動ぶりに感動し、日本に永住してこれを支援すべく昨年四月に来日した。以下は昨年一〇月九日の日本GAP総会において英語で行なわれた講演の全容。通訳は坂本貢一氏。

本日ここでこうしてお話をさせて頂くことは、私にとって身にあまる光栄であります。

私はフランスから六カ月前にやってまいりました。日本GAPの方々にお会いして、その活動、すなわち宇宙的使命の遂行を少しでも援助できればと考えたからです。

この場をお借りして、私を歓迎して下さった日本GAPの方々全員に深い感謝の意を表させて頂きたいと思います。なかでも佐塚崇子さんは来日以来、私の大きな力になり続けてくれました。佐塚さん、有難う。（注＝佐塚崇子は東京本部役員）

アダムスキーの強烈な影響

私がUFO問題に興味をもつきっかけとなったのは、母のUFO体験でした。母は（後ほど詳しくお話しますが）一九六四年の七月に、正真正銘の『未確認飛行物体』を、とても近い所から見ているんです。

この一〇年間、私は生き方の面でもUFO問題を理解する上でも、ジョージ・アダムスキーの影響をとても強く受け続けてきました。もちろん彼が書いたすべての書物を読んでいます。ですから私は今回日本へ来たときにも、ジョージ・アダムスキーの英語版の書物すべてと、彼の講演やプライベートな話を録音した沢山のテープをスーツケースにしっかりと詰め込んでやってきました。

私が久保田先生（ここのみ日本語で発音）にお目にかかれたのは、先ほど講演を行なったダニエル・ロス氏の紹介があったからです。ロス氏は久保田先生と同様、ジョージ・アダムスキーの教えを最も良く理解している人物の一人です。

この二年間、ダニエル・ロス氏とのあいだで頻繁に文通を続けてこられたことは、私にとってこの上なく幸運なことでした。ちなみに私は彼が書いた『UFO－宇宙からの完全な証拠』をフランス語に訳しています。

突如、光体が出現

さて、それでは私の母のUFO体験をお話ししたいと思います。

一九六四年七月一五日の夜の一〇時頃のことでした。母はフランスのパリに近いル・ペックという町にあった自宅の居間にいて、そこの窓から外を眺めていました。当時、私たちはアパートの五階に住んでいました。

その居間の窓からは外の景色を広く見渡すことができました。視界をさえぎるものは全くありませんでした。そしてその晩の空は完璧に真っ暗というわけではありませんでした。あのあたりの夏の夜空はそれが普通なんです。遠くでまたたく星以外には何も見えない静かな夜空が広がっていました。

母はその美しい夜空を窓際に立って、一人で静かに眺めていました。

そのときです。母の目が自分から見て右側の空に突然現われた一つの光体をとらえたのです。それは物凄いスピードで母の方に近づいてきました。そして、アッという間に母のいた場所から五〇メートルほど先の所まで来ると、そこにピタリと停止したんです。

下方へ伸びる不思議な光のパイプ

その物体は、アパートの五階にいた母と同じ高さの真正面の空間に浮かんでいました。とても大きな物体です。母はそれを「家の二軒分」ほどの大きさだったと表現しています。

それを見て母はとにかく驚きました。そんな大きな物が、母の言葉をかりるなら、「まるで空気のクッションの上にでも乗っているかのようにして」空中に浮かんでいたんです。音は全く聞こ

えませんでした。

そのとき母に最も強烈な印象を与えたのは、その物体の底から出ていた『光のパイプ』でした。全部で一〇本ほどの不思議な『光のパイプ』、つまり光線なのですが、それが物体の底の部分から下に向かって伸びていたのです。

しかもその光線の一つ一つがゆっくりと伸びたり縮んだりをくり返していました。とてもゆっくりと——。その光は私たちがふだん親しんでいる電灯の光やたいまつの光などとは全く異なった性質のものです。まずその光は、母の目には『固くて長いパイプ』のように見えたんです。さきほど私が『光のパイプ』と言ったのは、そんな理由があったわけです。

その『光のパイプ』は下の端がキチンとカットされていました。つまり、その光は地面まで届いていなかったんです。途中の空間でストップしていたんです。それは最近よく目にするレーザー光線とも全く異なった光でした。

レーザー光線の場合も確かに『光のパイプ』を作りますが、それは地面に向ければいやでも地面に届きます。もっとも当時の母はレーザー光線のことを全く知りませんでした。なんせそれは一九六四年のことです。

その光線群は基本的にはオレンジ色だったんですが、それにさらに赤と黄色が微妙に加わった独特の色をしていました。その色彩の点からも、先に紹介した二つの特徴からも、私たちがふだん親しんでいる光とは全く違うものでした。つまり地球製の光ではなかったのです。

美しいオーラに包まれた船体

また、その物体の周囲には四角な窓がいくつも並んでいました。すべてが同じ大きさで完璧な正方形です。そしてそれらの窓は内側から明るい光で照らされていました。

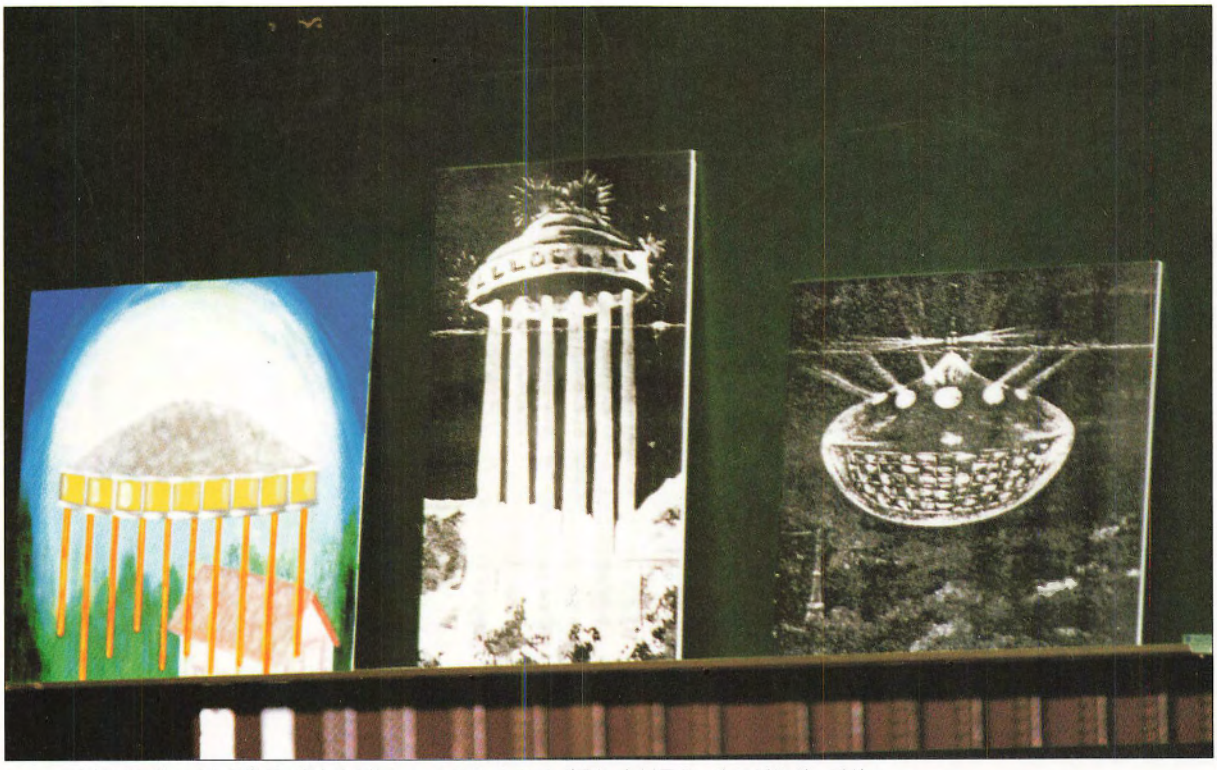
その飛行物体の外壁は、黒っぽい金属性の光を発していました。そしてそれは上にドームが乗ったような形をしていました。

以上が母の見たUFOです。下の美しいイラストは、私のスケッチとアドバイスにしたがって佐塚さんが描いてくれたものです。お気づきのように、まさにスカウト・シップの一種でした。

機体全体が白みに近い微妙な色をした、この世のものとは思えないほどに美しい後光、つまりオーラのようなもので覆われていました。

この後光のせいで、船体の輪郭はやわかすんで見えていました。ちょうど薄い霧がかかっているような状態だったのです。

母はこの物体を真正面に見たとき、最初は自分の目が変になったのかと思ったそうです。夢を見ているのかとも考えたそうです。でも母はすぐにそれ



▲左はジルガー氏の母堂が目撃したUFO。中はスペインに出現したUFO。右はジルガー氏が1973年に目撃したUFO。

が本物の『空飛ぶ円盤』であることに気づきました。当時はご存じのようにUFOをそのように呼ぶのが一般的だったんです。

瞬時にして消滅した

その物体が母の真正面に浮かんでいたのは一分ほどの間でした。その後、その物体は母から見て左側の方向にゆっくりと動き始めました。そして、そうやってゆっくりと一〇〇メートルほど進んだあたりで、ほとんど一瞬にして『消滅』してしまったということです。母の言葉をかりるなら、「今そこにいたと思ったら、次の瞬間にはもういなかった」というわけです。

それは、あっというまに消えてしまいました。テレビの画面がスイッチを切ったとたんにパッと消えるのと同じようにして、母の前から一瞬にして姿を消してしまったんです。急激にスピードをあげて飛び去ったのか、あるいは別の時間的次元か何かの中に移動したのかは私にはよくわかりませんが、いずれにしても、それはまさに瞬間的に見えなくなったんです。

スペインに出現した類似の物体

（右頁のまん中のイラストを指さしながら）これはフランスのあるUFO雑誌の一九七一年九月号の表紙を拡大したものです。このUFOは一九七一年にスペインのガブリエル・イ・ガラン湖の近くで目撃されたものです。

お気づきのように、このUFOと私の母が見たUFOが同じタイプの宇宙船であることは明らかです。四角な窓が並んでいますし、光線も出ています。それから上にはドームもついています。

私はこのイラストを母に何度も見せました。ほんの少しの違い、つまりこのUFOの場合には、下から出ている光線が地面に届いているわけですが、その点を除けば、これと、一九六四年七月に母がフランスのル・ペックで見たUFOは、まさに瓜二つだと言っていいと思います。

窓に人間は見えなかったか

さて、皆さんは今ある大きな疑問をいだいているかもしれません。「私の母はそのUFOの窓を通じて中にいる人間を見なかったのか」と。

当然のごとく私はそのことを何度も母にたずねました。でも母は、いつも「何も見えなかった」と言うばかりでした。

その宇宙船の窓は内側からの黄色っぽい明るい光で照らされていました。でも先ほどのイラストの説明で申し上げたとおり、その宇宙船は、ある種の『霧』のようなもので覆われていたんです。ダニエル・ロス氏の説明によると、それは宇宙船を取り囲んでいるエネルギー場によって、周囲の空気が急速にイオン化されるために発生する現象だということです。

思うに、その『霧』のようなものに邪魔されて、母は宇宙船の内側から母を見ていたと思われる乗組員の姿を、見ることができなかったのではないでしょうか。

一つだけはっきりと言えることがあります。その宇宙船は母の真正面に飛んできて、そこにピタッと停まりました。それは決して偶然の出来事などではなかったはずです。だとすれば、その宇宙船の中にいた誰かが窓越しに母を見ていたと考えるのは、決して的はずれな推理ではないと思うんですが、いかがでしょうか。

母が私にその経験のことを初めて語ったのは一九七一年のことでした。それ以来私は母にそのことを何度も何度もくり返して話してくれるようにせがみ続けました。一九七一年から九四年までの二三年間にわたってです。そのため母のUFO体験はいまではすでに私自身の体験だといってもいいほどのものになっています。私は今、母が何度となく語ってくれた宇宙船の姿を、心の中に、いつでも生き生きと描きあげることができます。

◀ジルガー氏の母堂ジェヌヴィエヴ・ジルガー夫人

UFOに関心のなかった母親

ここで一つ重要な事を話させて下さい。私の母はUFOに特別な興味を持っている人間では決してありません。事実、これまでの人生で母はこの分野の本や記事を読んだことは一度もないんです。ですから母が宇宙船の特徴を想像で語ったりすることは到底不可能なことなんです。

それにもかかわらず母はそのさまざまな特徴を極めて詳細に語りました。あの不思議な動き方をする『光のパイプ』に関する描写などは、その最たるものです。

実際、母はその宇宙船を見てひどく動揺しました。とんでもないものを見てしまった、恐ろしいものを見てしまった、という気分だったのです。そしてそのことを心の奥の暗い部屋の中に閉じ込めて、永久に忘れてしまおうと決めました。

ただ私にそのことを話したのを、と

きどき後悔しています。というのは、母のUFO体験が私の人生を根本的に変えてしまったからです。でも母はそれを私に話す必要があったんです。

ただし母は一九六四年にその体験を家族に話しています。母の三人の姉妹と、当然のことながら父にも話しました。「当然のことながら」と言いましたのは、父もあの晩、消滅する寸前のUFOを見たからです。

しかし母は実際にはその体験を完全に忘れようとしていました。自分にとっては大変恐ろしいことだったのです。

母の目撃が重大なきっかけになった

しかし私は母の目撃体験によってUFOに関心を持つようになったのです。そうこうするうちに、一九七二年、私は最初のUFO関係の本を読んだのです。その本はジョージ・アダムスキーとデスモンド・レスリー共著の『空飛ぶ円盤は着陸した』のフランス語版でした。

(編注=このフランス語版訳者は、アダムスキーの世界GAP網のフランス人協力者であったシュザンヌ・ソニエ女史。日本語訳は新アダムスキー全集第一巻『第二惑星からの地球訪問者』の第一部に収録)

その後私はアメリカとフランスのUFO関係文献を手当り次第に読みあさりました。そのなかにはもちろんアダムスキーの著書のすべてが含まれています。そして一九七三年に私は自分の目で初めてUFOを見ました。ここにあるのがそのUFOのイラストです。これはフランスのあるUFO雑誌に掲載されたものです。(12頁の右端の絵)。

女性異星人の援助?

この二〇年間、私はジョージ・アダムスキーの主張を、あらゆる観点から念入りに検証してきました。そして今、彼が私たちに語った事はすべて事実であるということを強く確信するに至っています。

私は今断言します。アダムスキーは一九五二年一一月二〇日に、デザートセンターで、彼がオーソンと呼んだ金星人と間違いなく会いました。そして彼がカリフォルニア州のパロマー・ガーデンズから望遠鏡で撮影したスカウトシップや母船の有名な素晴らしい写真は、どれもすべて間違いなく本物です。

日本に来る直前に私はもう一つのUFOを見ました。そのときは私の他に四名の目撃者がいましたが、そのUFOは私のあとをずっとついて来たような気がします。

そして今から一カ月前、私はこの東京で二人の親しい友人とともに、女性の異星人に会ったと確信しています。それはとても不思議な体験でした。というよりも、これまでの私の人生で最も不思議な体験でした。

そのとき私は二人の友人と一緒にあるレストランで食事をしながら語りあっていました。その問題の女性は私たちの隣のテーブルにいたんですが、ふと気がつくと私たちの会話にジーッと耳を傾けているんです。彼女は何事かに思いをめぐらせていたようです。その視線は彼女の手元にあったグラスに向けられていました。

突然私は気づきました。私たちは別の惑星から来た女性の面前にいるのだと! でも私は話しかけるようなことはしませんでした。ただ相手の非常に不思議な、うっとりとさせるような目付きを数度見ただけです。彼女は私を見抜いているというテレパシックな印象を私は確実に受けたのです。

彼女が私に送ったこの明確なテレパシーによるメッセージは、その晩、私の人生で決断を迫られていた重要な問題に関するアドバイスだったのです。

実は、久保田先生から「スペース・ピープルは君を常に援助しているんだ」と言われ続けていたんです。そしてその日、その女性異星人は私を援助してくれて、いわば私を正しい軌道にもどしてくれたのです。

すべての事は決められていた?

これまで私は、「一九六四年の七月にあの宇宙船が母の真正面にやってきた空中に停止したのは、何の理由だったのだろうか」と考え続けてきました。なぜ来たのか?

私はその解答を発見するために日本へやってきました。そして今私はその解答の一部を、そのパズルの一部を発見したと思っています。たとえば、私の母があのUFOを見ていなかったならば、私は、今、聴衆の中にいる、ある女性とめぐり会えなかったでしょう。

たぶん私が日本へ来ることは、一九六四年の時点ですでに決められていたような気がします。それはすでに、どこかで書き記されていたのでしょう。日本へ来て久保田先生、ダニエル・ロス氏、日本GAPのすべての友人たちにお会いするということが、すでに決められていたと思うんです。

私は今日ここにいることをとても嬉しく思います。いずれにしましても、私たちすべてが素晴らしいスペース・プログラムのための役割を担っているのであります。有難うございました。

▲左からロス氏、久保田会長、ジルガー氏。
撮影/松村芳之

UFOs Seen on the Day of the General Assembly

総会の日にUFO出現

★東京タワー付近に出た円盤型物体

(1) 篠　芳史

一九九四年度日本GAP総会は大成功で閉会し、大夕食会もなごやかにすごしました。

午後八時すぎに二次会会場へ向かって機械振興会館を出て、すぐ目の前のライトアップされた雄大な東京タワーを見ながらタクシー乗り場の方へ歩いて行ったとき、左から右へオレンジ色の円形の物体が移動しているのが見えました。星よりはるかに大きく、明るいきれいなオレンジ色です。見続けていると、その光体は東京タワーの左側からタワーの裏へ入り、しばらくしてタワーの右側からまた出てきて、まっすぐにゆっくりと遠ざかり、見えなくなりました。目撃時間は二分前後で、消えたときの時刻は午後八時一五分でした。それは飛行機、風船、鳥などではなく、間違いなく円盤です。目撃者は私のほかにミシェル・ジルガー、佐々木八郎、佐藤晶、川村隆男、佐塚崇子、熊谷美千代、藤沢紀子の各氏で、計八名です。

(2) 藤沢紀子

素晴らしかった総会と大夕食会が終わったあと、機械振興会館を出て、東京タワーをすぐ目の前に正面から眺められる位置でUFOを目撃しました。午後八時一五分頃に「現われたよ！」という声で一同が指さす方向を見つめていたら、光体が左から右へ飛んで行きました。ふだん熱心にUFO観測を行なっている方たちと一緒だったので、私にもオマケで見せていただいたのかしらと思ったしだいです。

(3) 熊谷美千代

私が東京タワーの前で気づいて目撃したかぎりでは、すでに小さくなった暗い星ぐらいの大きさの光体が、東京タワーの半分ぐらいの高さのところに出現していて、図のようにタワーの右側を移動していきました。他の目撃者の方のなかには、光体がタワーの左側に現われたときから目撃された方もいて、そのときには光体がもっと大きく見えたようです。

★新橋の二次会後に出現したUFO

(4) 林　寛子

一〇月九日、総会と大夕食会が終わり、二次会の「天狗」（新橋の店）を出て、少し新橋駅寄りに歩いた所のことです。すでにGAP会員の方二名が上空を見つめていて、一人はビデオカメラで撮影していました。

足をとめて空を眺めると、ビルかホテルのような建物のすぐ上空に、黒い影のようなスジが見えました。私にはそれが何であるかはわかりませんでしたが、佐々木八郎さんはそのとき（八人で見ていました）「あれは母船が作りだしたものだ」とおっしゃっていました。

その後、楕円形の黒っぽい雲がそのホテルの横にポッカリと浮かんだので、佐々木さんはその雲を指さして「あの中にもUFOがいるんだ」とおっしゃったので、じっと見つめていると、確かに雲の中を黒っぽい丸い物体がぐるぐると回っていました。私が見ていたのは、午後一一時二〇分から四五分までです。その後も数名の方々は一二時一五分まで見ていたようです。

話は変わりますが、一〇月一八日、午後六時二〇分のことです。その日は仕事から家に帰ってくると、書店に卸す分のユーコン誌一二七号が届いていました。とても嬉しくなって、そのユーコン誌を手に持って二階の自分の部屋へ上がると、向かいの家の上空に黄色く丸く輝く光体が停止しているのが窓から見えました。

UFOだと思ったので、「ユーコン誌が届きました」と心の中で報告すると、その光体はいきなり二倍以上の大きさになって輝いてから、ゆっくり向かいの家の裏側に移動して行きました。それを見て私はさらに嬉しくなり、スペース・ピープルの方々は、いつでも、どこでも日本GAPを見守って下さっていると感じました。

最近、スペース・ピープルやUFOが、とても身近なところにいると感じます。きっと、この地球の文明が良い方向へ向かうための大事な時期なのではないかと思います。私はこれからも微力ながら少しでもGAPのお役に立つことができるように頑張ってゆくつもりです。

(5) 佐々木八郎

総会の大成功おめでとうございます。ダニエル・ロス氏の大講演はとてもわかりやすく、落ちついた風格のあるお話だったと思います。永遠の真実というものは、常にシンプルですね。とても感銘を受けました。

ところで、今回の日本GAP総会をめぐって、スペース・ピープルの活動も例年になく活発であると思います。

総会の最中には極超小型の半透明の円盤が会場内を飛び回ったり、二機の円盤や数機の母船が会場付近や上空に来ていました。

大夕食会では、会場の南側の空を何回も円盤が飛んだり、何回も発光した

母船が飛んでいました。ストロボ光も何回もありました。

総会の日の二次会は新橋の「天狗」で行なわれました。この店を出てからこのことを少し詳しく書くことにします。

楽しい二次会が終わったのは一一時二〇分頃でした。私は一番最後に「天狗」を出たと思います。

「天狗」の西出口から出て、すぐ左へ曲がり、道路をはさんで向かい側のホテルの方を見ますと、その建物の少し上から天頂にかけて、灰色っぽい一定の幅の目立たないまっすぐな光が伸びています。これはサーチライトではなく、スペース・ピープルのわざにちがいありません。

その光の右側には明らかに母船が入っている母船の形をした巨大な雲が二本縦に並んで浮かんでいます。まっすぐに伸びた右側のフチが何回かパッと光りました。

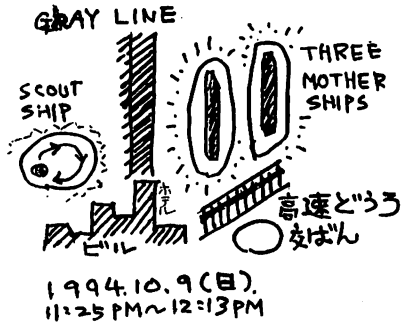
円盤の入った丸い雲の中を、発光した円盤がグルグル飛び回っているのが見えました。

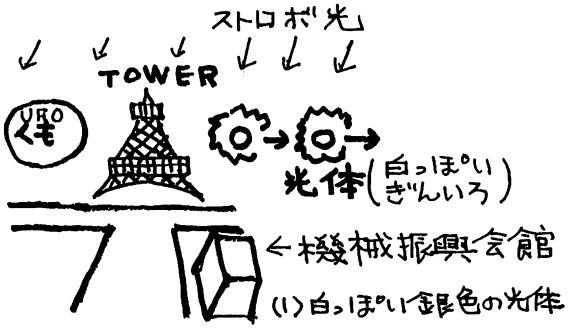
このような光景を一一時二五分から一二時一三分まで、約五〇分間見ていました。最初は八人で見ていましたが、三〇分ぐらいして四人が帰り、残りの四人で見ていました。最初から見ていた人は、林寛子さん、林慎子さん（この二人は双子姉妹）、佐藤晶さん、川村隆男さん、小西一紀さん、桑原さん、岸本さん、そして私の八人です。

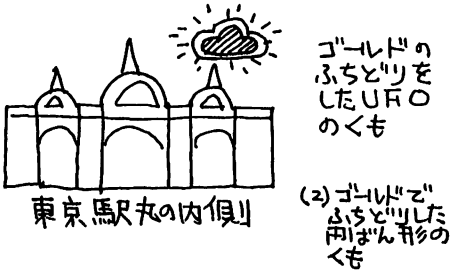
新橋からJR電車で秋葉原をまわって新小岩の方へ帰るときにも、異星人を何人か見ました。相手はテレパシーで何か言っているのですが、私にはよくわかりませんでした。

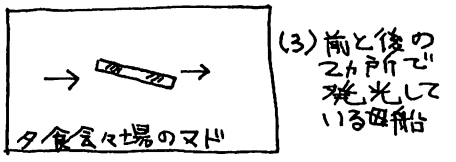
以上のことをよく考えてみますと、私たち日本GAP会員は、今まで以上に力を出して頑張る時期が来ているのだと感じました。異星人たちの努力が無にならないためにも、私たち地球人自身のためにも、今が正念場であるという気がします（注＝筆者は一種の超能力者）。

佐々木八郎氏のイラスト

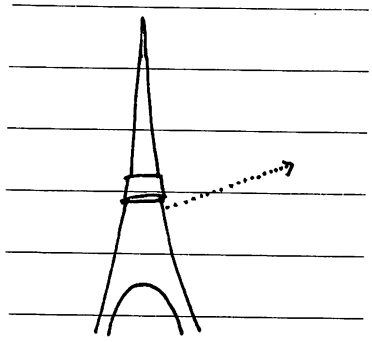








熊谷美千代さんのイラスト



UFOを頻繁に見る私のカルマ〈3〉

溜池みゆき
My UFO Sightings and Karma
by Miyuki Tameike

甘えや不安は絶対に不可

毎日忙しい日を過ごしていますが、今回やっとまたUFO目撃体験レポートを完成できました。昼間に出現するUFOが次第に多くなり、多くの人に見せることがたびたびありました。そして、ある日より宇宙の人達と話がしたいなあと思い、夜、寝る前にそれをとなえてから眠っていました。

すると今年（一九九四年）七月一七日、頭上の空がパアーッと光りだしたのです。そこで心の中で質問を始めると、それに応じて光ってくれます。相手の回答がYesのときは光り、Noの場合は光りません。質問の中で、「母船ですか」と聞くと光るので、母船であることが確信できました。現在までに一三回ほど母船が降りてきて、私に光を与えてくれて、自分の気持を伝えたり数々の質問をしてきました。

しかし少しでも自分に甘えがあったり、自分の意識に不安があるとUFOは絶対に光ってはくれません。意識が可能思考の状態であるならば、ほとんどの質問に応じて光を放ちます。「努力する」という言葉に特に強く反応を与えてくれます。強い光を発します。

自分自身を好きになること

UFO出現は私の生活の一部です。自分自身を見つめて、気づき学ぶことができます。まだまだ他人の言葉で傷ついてしまう私です。いろいろな出来事がありますが、一歩一歩確実に乗り越えて、楽しく建設的に成長してゆきたいと思います。

どんなときでもUFOは大空、いや宇宙から私達の成長と幸せを見守ってくれるのです。UFOを見れない心の状態のとき、雲や景色をカメラで写すと、必ず写真にUFOが存在しているので、とても嬉しくて、勇気と自信がわいてきます。

大切なのは建設的な行動、奉仕的な気持、そして一番大切なことは、自分自身を認めて好きになることです。そんなときUFOは、いつ、どんなときでも、どこでも私達の目の前に現われます。

以下は一九九四年七月からのUFO目撃報告です。

他人の幸せを祈ったらUFOが出現

●七月九日（土）午後六時三八分。

川内市限之城バイパスにて雲の中に白い丸っぽいUFOが一機出現。午後六時四〇分から四六分まで、私の車とともに左上空を一機のUFOが飛ぶ。午後六時四五分から一分間、UFOをカメラで撮影する。午後六時五八分から七時一〇分まで私の車とともにUFOが飛ぶ。

●七月一三日（水）

自宅近くのお客様宅を出たら、午後六時三二分頃UFOが出現。ほんの少し一緒に走る。自宅に帰り、七時二五分頃、窓から空を見上げると、一機のUFOが出現し、ゆっくりと飛行する。

●七月一四日（木）

川内市から帰る途中、串木野にて次々と三機のUFOが続出する（午後五時五〇分、五時五三分、五時五五分）。

串木野市のHさん宅へ向かおうとしていたので、UFOは三機とも私が行こうとする方向へ飛行する。途中、方向をわざと変えて逆方向へ車を走らせたが、UFOは必ず目的のHさん宅の方向へ飛ぶ。時間が早かったので、近くの海の見える長崎鼻公園に行き、車を停め、降りて一人で海を眺めてUFOを呼んでみたが、出現しない。

たまたま知人の女性が二人で私の立っている後ろを話しながら通り過ぎるとき、私はその知人の一人に「幸せになってね！」と心の底から祈った。その瞬間、私の左前方に白いUFOが出現し、ゆっくりと右へ飛行する。

持っていたカメラでUFOを撮影していると、今度は右前方から白いUFOが突然出現し、ゆっくりと左へ飛行する。二機は私の真正面ですれ違い、ゆっくりと飛行して行く。二機同時に出現するのは初めてのこと（昼間）。

UFOと質疑応答

●七月一七日（日）午前一時～一時二〇分。

自宅のベランダに出て久しぶりにUFOを呼んでみようと思う。早速「あなた方と会いたいです。降りてきて下さいませんか」と、心の中で伝えると、突然私の頭上がパッパッと連続して光り始めた。最初は稲妻かなと思ったけど、空は青空で、光ったとき、音は鳴らないので、雷でもなさそう。ひょっとしたらUFOかなと思い、私が今思っていることや聞いてみたいことなどを心の中で言ったら、そのたびごとに頭上がパッパッと光る。質問を約五分間行なったが、Yesのときは頭上が光り、Noのときは絶対に光らないことに気づく。

今までは送信ばかりで、何日か前から宇宙の人と会話をしたいという願望

があったので、きっとこれは宇宙の人達と会話ができているんじゃないかと思い、とても感動的な体験をする。

光はわずかな光ではなく、頭上の空が広い範囲で光っていて、きっとUFOの母船から発する光だろうと察した。約一五分間、光との交信をし、お礼とお別れの挨拶をし、部屋に入ると、もう空は光らなくなった。初めての光との交信を体験して、これらか先もっともっと成長して努力していくことで言葉や文字による交信や直接コンタクトができるのではないかと希望を持つことができた。

日常生活で多くの人と出会い、すべての人と調和し、みんなで幸せになっていこうと努力し、そして自分自身がより成長して、自分をどんどん変えてゆこうとする努力を続けていこうと思った。

奇妙な音が聞こえる

●七月一七日（日）

鹿児島支部の月例セミナーに一人で出席し、持ってきたUFOの写真を五名の会員の方に見て頂いたところ、一人の方が否定されたので私はがっかりし、傷ついた状態で久保田先生の解説講義テープを聞いていた。すると午後二時から二時二〇分まで、テープの音よりずっと大きい音がボワンボワンと連続して聞こえてくる。あまりに大きな音なので、うるさくてテープの音が聞こえないんじゃないかと思い、他の人に「ねえ、さっきからボワンボワンと大きな音が聞こえてくるけど、何の音だろう?」と聞いてみたら、そんな音はさっきから聞こえていないとのこと。聞こえているのは虫の音だけだそうだ。

私はやっと、この音はUFOの音だと気づいて驚いた。真実を否定され傷ついた私に、UFOが援助してくれたのだろう。前日の晩も今朝起きてからも、月例セミナーのために私で何か役立てたらと思い祈っていた私だった。それを一〇〇パーセント理解していたのは、UFOの人達だった。屈辱を受けたり、必死で目的に向かって無心になって行動しているとき、UFOはこの大きな音を私に与えてくれる。

車の錠がグニャリ

会が終了し、夕食会に行くかどうするかで迷っているとき、抜迫英子さんから「行こう」と言われた。そのとき上空に白いUFOがゆっくりと飛行した（午後四時四五分頃）。

そのあと、会員の皆さんといつものうどん屋さんに行き、食事や座談会を済ませ、店を出てポケットから車の錠を取り出し、車に差し込もうとしたら、錠がグニャッと丸く曲がってしまっているので、びっくり仰天して、抜迫さんに錠を見せて、自分でその錠を元にもどしてやっと車を走らせることができた。車の錠がひとりでひどく曲がってしまったのは、二度目。

夜、友達に会い、心の援助とヒーリングを行ない、その後、夜中に今日のお礼や自分の気持を伝えると、赤く点灯するUFOがわたしの家の方に向かって飛行する。

自分で実現させようという強い信念が重要

●七月二一日（水）

一八日、一九日の二日間、UFOと出会えなかったので、今日一日は自分の意識を見つめてすごす。いろいろな人間関係でのからみで心が少し不純になっているのではないかと思う。そしたら「許す」という印象が湧いてきた。

夜中（午前一時一〇分から五〇分まで）入浴中、プラスの想念を自分自身に与え、良い状態に切り替えて、湯上がり後、午前二時一〇分にベランダに出てみた。

「降りてきて下さい。わたしと会って下さい。あなた方と話がしたいのです」と心の中で三〜四回伝えると、左側の上空がパッと光り始める。「あ、UFOだ」と嬉しくなり、交信しようと思い、質問をし始めたが、以前のように強い光によるハギレのよい光の返答ではなかったので、私の今の心の状態が消極的で、少し不安をいだいて、UFO側に頼っているのではないかと思う。

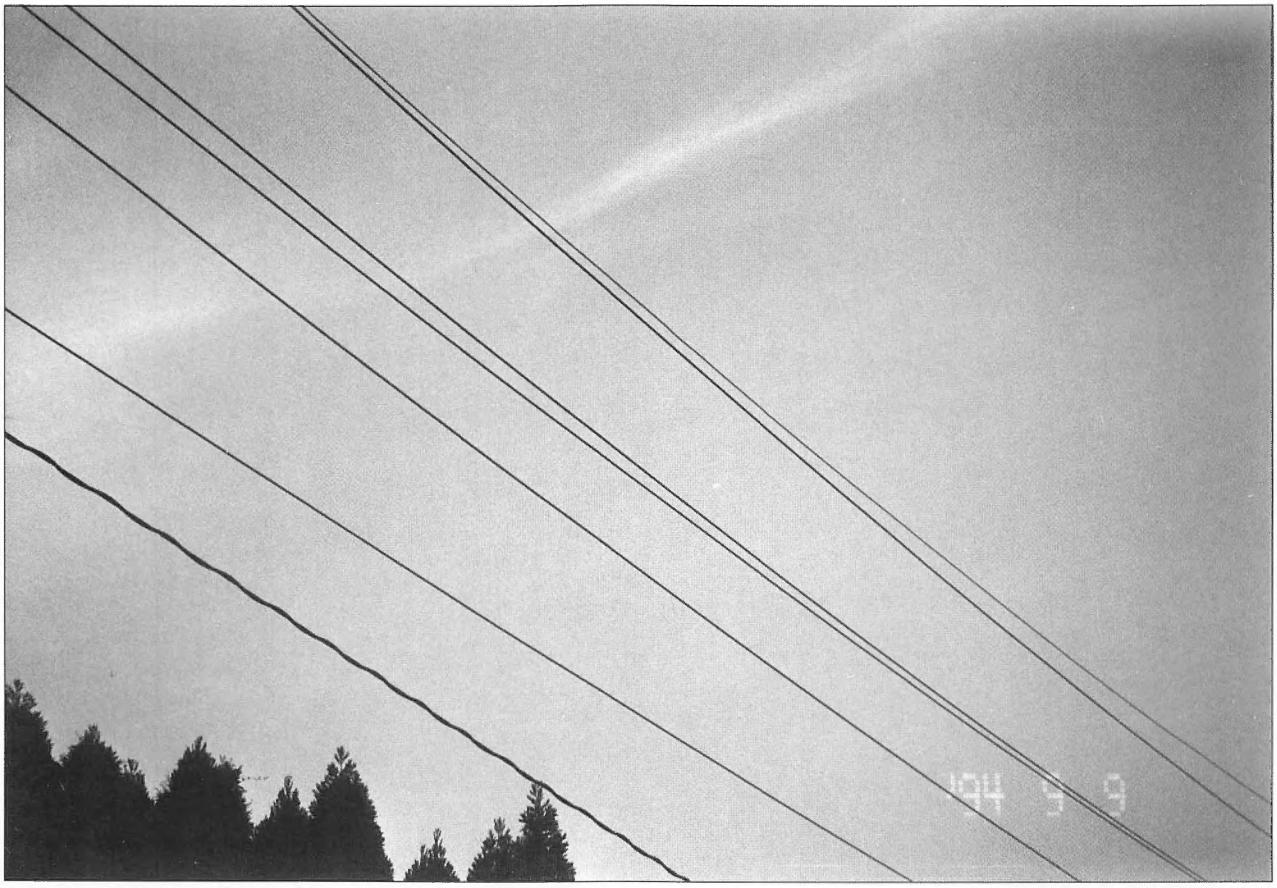
それでも沢山の質問をしたところ、UFOはYesのときは必ず光を発射してくれた。なかなか光による返答がないときは、「とにかく私自身が努力していけばよいのですね?」と、質問の最後につけ加えると、UFOは今までよりも強い光で天空を光らせてくれた。すべて努力のみ。決して甘えてはいけないのだと思った。

要するに、何かを実現させたいという強い信念を決して失うことなく、そのための努力を続けていくこと。自分自身の力を信じて自分の力で実現させること。そんな信念を持つことが人間にとって大切なのではないかと思う。

四〇分間近く光との交信を続けて、途中、こんなに長く交信してUFO側に迷惑をかけているのではないかと思ったが、UFOからの光はとぎれることなく、最後まで私とつきあってくれた。私の心の状態が反映しているのだと思っただけでも交信できて非常に嬉しくて、励まされた。異星人の愛は偉大で寛大だと思った。私もそんな大きな器（うつわ）の人間に一日も早くなりたい。

●七月二五日（月）

友人と一緒に遠方の友人宅に伺い、最後のTさん宅を訪れて、すぐ（午後一〇時二〇分頃）赤色で回転しているUFOが出現し、私の車とともに飛行する。二日間UFOと出会えない状態のとき、お客様宅へ向かって車で走行



▲1994年9月9日（木）市来町広域農道にて1機のUFOを写す。
午後6時15分から19分まで撮影者の車といっしょに等速度で飛ぶ。
写真を撮ろうとして方向を変えると、UFOも方向を変えて飛びはじめた。中央より右寄りの白い物体。
撮影は筆者。溜池みゆきさん。 ニコン700

中、午後三時一六分頃、突然、白色のでかいUFOが低空をゆっくりと飛行して行く。何も考えずにただ次の目的地へ楽しく向かっているときに出現した。行動している自分自身がOKなのだ。

●七月三〇日（土）

午前一時二〇分から三〇分まで、自宅西北側の窓より、前面海沿いの松林上空に出現した母船と光による交信を行なう。前面に現われる光は今回が初めて。この光による回答は、ものすごい光で夜空を照らしている。

また質問を行なうが、疲れていたので一〇分間だけ行なう。今日は西北側のサッシをあけると、すぐに前面が光り始めた。「あなた方は母船ですか?」と聞くと、Yesの光をパッパッと発した。

楽しく行動するときに出現

六年間とだえていた市来町の祇園祭りが鹿児島市内の祇園祭りに参加し復活した。私も山車の引き手として参加した。参加者全員の熱気でお祭りが盛り上がり、祇園祭りの復活は成功した。終了後の挨拶の途中、同じく参加していた三原さんとUFOのサイン雲を気にし始めると、午後六時三〇分頃、三原さんが前方の雲の上に白銀色に光るUFOを発見し、私にそっと教えてくれた。私はメガネをかけていなかったが、前方が白銀色に光るのでUFOの存在を確認できた。その後すぐにメガネをかけて「また出ないかな」と思っていたら、午後六時三五分頃、前方の雲のすれすれのところに白い丸っぽいUFOが出現し、ゆっくりと右へ飛行した。

解散後、私は車に参加者三名を乗せて走行中、鹿児島市内のど真ん中の七階建てぐらいのビルのすぐ上空を、右から左へとUFOがゆっくり横切る。午後六時五五分頃、走行中、UFOが右から左へとゆっくり横切る。午後七時三〇分頃、松元町を走行中、左上空をまっ黒で丸っぽい感じのUFOがゆっくりと北から南へ飛んで行くのに気づく。この形のUFOは初めて目撃する。結局、五機のUFOが次々と出現した。カメラを持っていなかったので一枚も撮れず残念。町のために楽しく行動している参加者全員のエネルギーは高く、私も参加できたことに心から感謝する。

●八月四日（木）

三日UFOを見れず、精神的にカラッと晴れていない状態。川内市へ夕方でかけて、お客様宅へ向かう途中、「こうして行動しているんだ!」と思ったとたん、前方上空に白いUFOが出現し、右から左へ飛行する（午後六時四四分頃）。

その後ストアーで弁当を買って車を動かした瞬間、UFOが前方上空を右から左へとゆっくり飛行する。行動するとき、何か問題点をプラスに変えてゆこうと努力しているときや、意識が変わった瞬間、UFOは呼ばなくても私の目の前に突然出現してくれる。

友人達にもUFOを見せる

●八月七日（日）

今日は市来町の伝統的な七夕踊りを夜八時頃、一人で見に行った。最後の踊りが終了し、今日一日中を頑張られた多くの参加者の人達への尊敬と感動の気持をいだきながら、ニコニコと笑顔で自宅へと歩いて帰る途中、午後八時三八分頃、左上空をUFOが赤と黄色っぽい光を発しながら飛び始めた。自宅に着いてしばらくしてベランダに出て、心地よい気持で感謝の気持を上空に伝えると、午後八時五五分から二分間、前方にUFOが出現し、こちらに向かって飛行する。

その直後、一二年前、兄の友達であり、私に言葉で勇気と励ましを与えて下さった藤田さんが、亡くなった兄のためにお線香をあげに来て下さり、私はやっとそのときのお礼を言うことができた。そしてユーコン誌一二五号と一二六号を一冊ずつお礼と記念にといってプレゼントした。

藤田さんはとてもびっくりされ、喜んで下さった。私にとって本当に嬉しい感動の日となった。

●八月八日（月）

夢の中でUFOが低空に降りてきて、それに乗っている三人の異星人が私に手を振る。

●八月九日（火）

朝、目が冷めた瞬間、「私は皆さんの手本にならないといけないんだ」と思ったら、急に心が落ち着き、勇気がわいてきた。今日は昼すぎから「出会いねっとわーく」第三弾企画のために加世田市へ友達と乗り合わせて行く。夕方、加世田市を出て、自宅へ走行中、助手席に座っている私は、四人の友達にぜひUFOを見せてあげたいと思っていたところ、UFOが出現したので、みなさんはとても感動した。（以下次号）

GAP短信 GAP NEWS

★「久保田会長と語ろう会」盛会

昨年一一月一九日、東京都世田谷区下北沢の北沢タウンホール一二階の会議室で、日本GAP関東圏の若手会員グループである「黎明会」主催の「久保田先生と語ろう会」が開催された。出席者は三〇数名。本誌に予告なしの会合にしては盛会であった。最初は会長が詳細な解説をしながらスライド五〇点を映写し、そのあと長時間質疑応答を続けて多大の成果をあげた。

なおスライド映写中に北方の低い空に突然大きな光体が出現するのを加藤純一氏がビルの窓から目撃。津田代表を呼んできて、再度出現した光体を二人で確認した。

★久保田八郎広島講演会、大盛況

一一月二三日には、かねてからの予告どおり、広島市のGAP会員の女性グループ「カチナ会」主催の会長講演会が、光町のホテルチューリッヒで開催された。連休でないにもかかわらず、中国地方一帯、九州、四国方面からの参会者があり、計約五五名に達する満員の盛況となった。ここでは真剣そのものの雰囲気の中を、会長が「大宇宙力によって絶対に幸せになる方法」と題する講演で熱弁をふるい、多大の感銘を与えた。休憩後、質疑応答に入り、高度な質問が続出して閉会した。

夜は同ホテルで楽しく夕食会が行なわれ、アトラクションで、地元会員でハープ奏者でもある三村真弓さんのハープ独奏と、声楽家の升田裕子さんのソプラノ独唱が行なわれて大喝采を博し、そのあとテレパシーによるクイズで賞品獲得レースが展開。非常に楽しい一日をすごした。

★黎明会のアメリカツアー

昨年の大晦日から正月の五日までの六日間、黎明会の若手グループ一一名は久保田会長の引率のもとに渡米し、ロサンジェルス市内見学、デザートセンターのコンタクト地点、パロマー山のパロマーガーデンズと天文台等、アダムスキー関係遺跡を視察後、最後はロサンジェルスのユニバーサル・スタジオで多数の撮影セットをトラムでまわるツアーに打ち興じた。この記事は四月発行予定の本誌一二九号に掲載する予定。

★日本GAP東京月例セミナー三〇〇回達成記念祝賀行事

東京本部の月例セミナーは、久保田会長が一九六九年に東京に移住して以来二五年間、毎月開催されており、昨年八月で連続三〇〇回という輝かしい記録を樹立した。これを記念して三月五日、午後一時より機械振興会館のセミナー会場で特別セミナーを開催し、日本GAPの歴史と成果をスライドで上映、会長の特別記念講演を行ない五時終了し、夜は銀座八丁目の資生堂パーラーで盛大な祝賀パーティーを開催することに決定した。主催は東京本部役員団。幹事は田中淳。パーティーの参加希望者は予約申込みが必要。詳細予告は本号四九頁に掲載されている。

なお、この日に限って特別セミナー会場は、いつもの地下三階第二研修室から六階六六号室に臨時変更されるので注意されたい。

★今年度の海外研修旅行は中止

一九七九年より毎年続いた日本GAPの海外研修旅行は、不景気のために今年度は中止する。景気が快復すれば再開するかもしれないが、時期は未定。

★博士号取得のおめでた

日本GAP会員の左記の方が昨年度に博士号を取得された。衷心よりお祝い申し上げたい。

文学博士　岩田光子氏（東京・昭和女子大学教授）

工学博士　高橋　徹氏（大分県・国立高専講師）

★南九州支部代表逝去

GAPの南九州支部代表であった鶴田清則氏が、去る一〇月一七日肺癌のため逝去された。謹んで哀悼の意を表します。

★南九州支部代表交替

鶴田氏の入院に伴い、南九州支部代表は鹿児島市の曽我部勇人氏が代理をつとめていたが、鶴田氏逝去のため正式に代表に就任した。連絡先は左記のとおり。

鹿児島市　曽我部整骨院

〇九九二－五三－二三一五

★五月と八月の東京月例セミナー開催日の会場の臨時変更

今年五月のみ東京月例セミナーは、第一日曜日の七日から、第二日曜日の一四日に臨時変更される。会場も従来の第二研修室から隣の第一研修室に臨時変更されるので注意されたい。

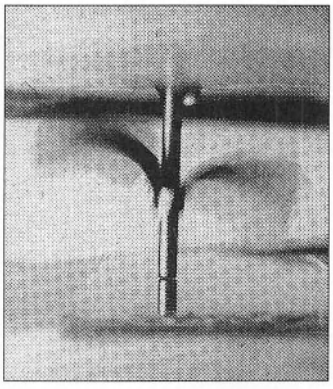
八月も第一日曜日の六日から、第二日曜日の一三日に臨時変更し、会場も隣の第一研修室に臨時変更される。

九月は連休初日の二三日に機械振興会館で秋山眞人氏の講演により盛大な総会を開催する。月例セミナーは中止。

★日本GAP特別維持会員制度

日本GAPは普通会員とは別個に特別維持会員制度を設けている。これは一種の寄付制度であり、普通会員がさらにGAPの運営と発展のために貢献するための援助ネットワークであって、絶大な役割を果たしている。

これに加入すれば久保田会長が個人で毎月発行している「意識の声」と題する小冊子のエッセイが贈られる。このエッセイにはユーコン誌に掲載されない秘話や行事の速報、会長独自の宇宙的能力の開発法その他が満載されている。参加希望者は「特別維持会員案内書」とハガキに書いて日本GAP宛に出せば案内書が送られる。ただし普通会員でない人が特別維持会員のみになることは出来ないので要注意。エッセイ「意識の声」は頁数がふえて内容が充実している。



▶羽根が上下運動して約二センチ浮き上がったアクチュエータ

空飛ぶアクチュエータ

東北大電気通信研究所の荒井教授のグループが、磁気を動力源にしたマイクロアクチュエータ（小型移動機械）の開発に成功した。本体に電源やリード線をつけずに飛行することが可能で、医療機器や産業用ロボットの小型軽量化にとって画期的な技術となる。

このマイクロアクチュエータは、強い磁性体に磁力をかけると長さが変化する現象を利用したものである。まず、磁界に強く反応するアモルファス（非結晶）合金を開発して、羽根（長さ一三ミリ、幅四ミリ）を作った。次にこの羽根を二枚取り付けたアクチュエータを固定軸に差し込み、垂直方向に磁力をかけると、羽根が上下運動して蝶のように約二センチ浮上した。また、羽根を折り曲げて固定軸から開放して磁力をかけると、竹トンボのように舞い上がった。空中を飛ぶマイクロアクチュエータの開発は世界で初めてである。（9・9読）

フロン分解一〇〇パーセントOK

オゾン層破壊の元凶として最終処理の技術開発が急がれているフロンを、セメント製造炉でほぼ一〇〇パーセント分解できることが、東京都と小野田セメントの共同実験で確認された。セメント製造炉を使ったフロンの破壊実験は国内初の試みであり、低コストのフロン破壊方式として実用化の見通しがついたという。

共同実験では小型のセメント焼成炉を用い、セメント製造過程にフロンを注入する方式で行なわれた。フロンを分解する際に発生する有毒ガスは、製造されるセメント中に封じ込まれることがわかり、このため既存のセメント製造工場の施設がそのまま利用できるのでコストが低いことも確認された。

都は実用化に向けて来年度から実際にセメント製造に使われている大型炉で実証実験を行なうことになった。実用化されると各地のセメント工場で、都内で一年間に廃棄される家庭用冷蔵庫三四万台分のフロンを処理できるという。

これまでフロンの破壊技術は、産業廃棄物炉による燃焼法、高温プラズマ中での分解法などが研究されているが実用化には至っていなかった。（9・9読）

ゴミ原子を透視

日立製作所中央研究所が、物質内部に埋もれた原子の立体的な分布やその種類まで透視する技術を世界で初めて開発した。不純物が含まれる位置を原子レベルで測定する必要のある半導体などの研究開発に役立つという。

高精度な加工が要求される記憶素子などの先端材料では不純物のチェックが欠かせないが、電子線を一方向から当てる従来の測定では二次元の情報しか得られなかった。

今回開発した技術は、電子顕微鏡を改良し、医療機器のCTスキャナーのように、試料に対して様々な角度から電子線を照射できるようにしたもので、不純物によって曲げられる電子線の散乱具合から、コンピュータで三次元立体画像を描き出すようにした。

この装置を使ってシリコン中の銅の不純物を観察したところ、銅が結晶の欠陥部分に集まり、面上に配列していることが確認できた。現在では数千個単位の原子塊まで観察できるが、装置を改良すれば原子一個でも測定できるという。（9・21読）

甜茶がアレルギーを抑える

中国南部で飲まれているお茶の一種、甜茶（てんちゃ）の抽出成分には、鼻アレルギーを著しく抑える動きのあることが、三重大医学部とサントリーの共同研究でわかった。

同大耳鼻咽喉科の鵜飼教授らは、動物実験により甜茶の抽出成分に抗アレルギー作用のあることを発見した。飴に一粒あたり四〇ミリグラムの抽出成分を混ぜて、くしゃみ、鼻水などで苦しむ鼻アレルギー患者二一人に投与した。一日三回四週間なめてもらったところ、二週間後から六五パーセントの患者の症状が改善し、四週間後では七五パーセントに達した。うち四八パーセントは著しく改善し、鼻アレルギー治療薬並みの効果が出た。

アレルギーは体内の肥満細胞から分泌されるヒスタミンなどが原因となって起こるが、甜茶の抽出成分がヒスタミンの分泌を抑えることも確認した。花粉症や喘息などにも利く可能性があるという。

甜茶は中国に自生するバラ科のお茶で、別名「開胃茶」と呼ばれ、通常は食欲増進、解熱などに効果があるとされている。（10・3読）

乱れた言葉も理解OK

乱れた話し言葉や、誤字、脱字を含む日本語も正しく理解するコンピュータによる解析手法をNTTが開発した。文法一点張りの従来の方法に、言葉の実態も反映させたもので、自動翻訳などに威力を発揮するという。

日本語をコンピュータで翻訳するには、入力した文書や音声を単語に分割し、その品詞を決める必要がある。これまでは文法と語法を元にした辞書データベースを作成して解析していたが、この方法では文法に外れた表現では正しく対応できなかった。たとえば「会議する」とか「私、仕事行くよ」などの助詞を抜いた会話や「えーっと」とか「あのう……」などの日常会話、その他、特殊な言い回しが多い科学や法律の論文などでは、専用の文法規則と辞書をその都度作る必要があった。

NTTは、実際の日常会話から大量の日本語文（文法無視の表現が含まれる）を単語に分類し、品詞をつけた正解データを作成した。これを、現実の日本語でお互いに結びつきやすい単語や品詞と、いろいろな単語や品詞が文章に出現する頻度とを、計算した確率データをコンピュータに学習させた。

これで分析した結果、正しい日本語の品詞分類で単語当たり九五パーセントの正確率を達成し、処理がむずかしかった文法無視の日本語にも対応できることを確認した。（10・5読）

インターフェロンの立体構造を解明

長岡技術科学大でC型肝炎に有効なインターフェロンの立体構造が世界で初めて解明された。

これまでインターフェロンは分子配列しかわかっていなかったが、同大の三井教授はハツカネズミのインターフェロンβ型の結晶化と、エックス線照射による電子密度の分布図作成に成功し、立体構造を明らかにした。（10・14読）

タキソールを合成

北米産のイチイの樹皮からとれる抗癌剤のタキソールを、葉の培養細胞から合成することに、岡山理科大の浜田教授と米国ニューヨーク州立大の尾島教授らのグループが世界で初めて成功した。

タキソールは欧米で最も有名な抗癌剤の一つで、イチイの樹皮から成分を抽出して作るが、今回開発された合成法により木の成長をまたずに大量生産できる。

同グループはイチイの葉から取り出した細胞を無菌状態で培養し、培養細胞からの抽出物とβ-ラクタムという物質を合成してタキソールを作った。樹皮から直接抽出する場合に比べて数百倍の量が得られるという。

さらに浜田教授は血液中に解けにくいタキソールをオリゴ糖と組み合わせて、その溶解度を一〇〇倍に上げることにも成功した。血液に溶けやすくなることで、投与量を減らして生体への影響を少なくし、コストを下げることにもつながる。（10・19読）

八―二月は地震に注意

東海地震の巣とされる、日本列島太平洋側南部のフィリピン海プレート北端部を震源域とする大地震は、気圧の変化が引き金となって、八月から二月までの七カ月間に集中して起きる、という説が発表された。

東北大理学部の大竹教授が、フィリピン海プレート北端部と太平洋プレートの境界区域で起きた過去一三回の大地震を調査したところ、六八四年から一九四六年までの大地震が、すべて八―二月に集中していることを確認した。次に、年間の気圧変動に着目し、フィリピン海プレート北端部に近い静岡県浜松市での過去三〇年間の観測データを調べたところ、月平均気圧が一〇一〇―一〇二〇ヘクトパスカルの範囲で変動しており、冬は高く、夏は低かった。冬は夏よりも一平方メートルあたり約一〇〇キロの重量がよけいに加わることになる。

同教授は、その大気質量の変化がプレート境界の浅い部分にかかる力を変えて、断層を滑りやすくするために、断層破壊直前の臨界状態では、気圧変動が引き金になり得る、と結論づけた。（10・20読）

天の川の裏側に新銀河

天の川銀河の裏側に、これまで知られていなかった銀河があることを、英国の天文学者が発見した。

イギリスケンブリッジ大学天文研究所のラヘイブ博士らが、銀河から放出される電波をキャッチして見つけたもので、カシオペア座の方向にあり、地球から約一〇〇〇万光年離れている。（11・4読）

白血病治療薬がHIVを抑制

三〇年以上も使われてきた白血病治療薬のハイドロキシウレアに、エイズウィルスの増殖抑制効果があることを、アメリカ国立癌研究所のグループが発見した。数種類の細胞を使った実験で、HIVの増殖抑制効果が確認されたもので、ハイドロキシウレアにはHIV増殖に必要な物質のレベルを下げる効果があるという。現在HIV治療薬として使われているAZTやddIなどとの併用で治療効果が期待できるという。（11・14読）

一一〇番目の新元素

ドイツ南部の重イオン研究センターが、地球上で最も重い一一〇番目の元素を作り出した。物理や化学の教科書の元素周期表にも原子番号一一〇の新元素が付け加えられる。

新元素は同センターの研究チームが、粒子加速器を使って鉛にニッケルを衝突させて作り出したもので、名前はまだないが、質量は鉄の五倍ある。非常に不安定なために二〇〇〇分の一秒しか存在できないという。地球上には一〇九種類の元素があることが確認されている。このうち自然界に存在しているのは九二種類で、それ以外の一七種類は人工的に作り出された元素である。（11・19読）

石油除去に微生物

微生物を使って石油汚染された土壌を浄化するバイオレメディエーション（生物による環境修復）の試験がクウェートで始まった。

クウェート化学研究所と日本の石油産業活性化センターの委託を受けた大林組が実施するもので、界面活性剤を使った化学的浄化はすでに行なわれているが、生物を利用した汚染浄化は初めてである。

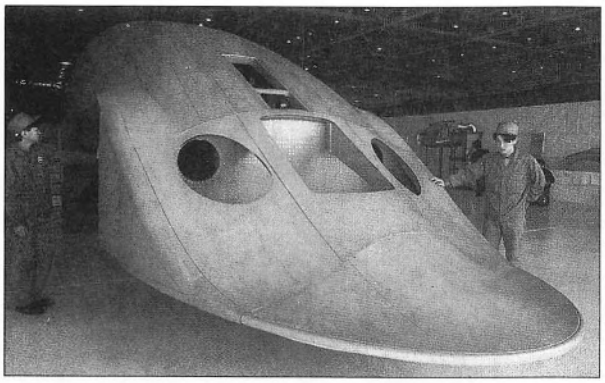
今回試験が始まったのは、湾岸戦争で被害を受けたブルガン油田で、土中の石油含有量が一〇パーセント以下の汚染地を対象としたもので、現地で石油分解能の高い微生物を探し、最適な通気、温度条件を決定していく。

バイオレメディエーションは、バクテリア、カビ、酵母などを利用するので、二次公害の心配がなく、費用も化学的浄化に比べて三分の一から五分の一で済むという。（11・19読）

時速五〇〇キロの水鳥

JR東海は、山梨リニア実験線での走行実験に使う試験車両を、三菱重工小牧南工場で公開した。

先端が水鳥のくちばしに似たダブルカスプタイプで、車体は全長二八メートル、高さ三・一メートル、幅二・九メートルあり、重量は「のぞみ」の約三分の二の三〇トンある。先端は、時速五〇〇キロの高速走行で空気抵抗や騒音を抑えるのに効果的な形状である。（11・25毎）



那須高原で巨大母船出現！

堀江健一

A Huge Mothership Appears over Nasu Highlands

by Kenichi Horie

一九九四年（平成六年）九月九日、那須高原（栃木県）へ有志六名でUFO観測に行ったところ、昼の一二時頃、快晴の空に大母船が間近に出現した。これを佐藤晶、清水正、川村隆男、藤沢紀子の四名が目撃するという大事件が発生した。

今年は日本GAP主催のUFO観測会が中止されたので、小人数だけの観測を計画した。都合により平日を選んだので小グループになった。右四名の他に私と熊谷美千代さんが加わっている。

当日朝、東北自動車道の終点近くの東川口駅で待ち合わせをし、二台の車に分乗して午前一〇時半に出発した。浦和インターから東北自動車道に入り、予約してあるオートキャンプ場のログハウスへ行くため、一路、西那須野塩原インターへ向けて走行中、全路程の半分ほど走行した佐野インターを少し過ぎたあたりで、大母船が頭上間近に出現し、北西の山に隠れて見えなくなるまで一同は観測したのである。

最初は後ろを走行していた川村氏の運転する車から、氏がフロントガラス越しに巨大な飛行物体を確認したのと同時に、後部座席にいた清水と佐藤両氏が横の窓越しに、飛行機や他の物とは絶対に違う大母船が低空に出現しているのを目撃。すぐに無線機でそのむねを先行していた私の運転する車に連絡してきた。

この時点では母船はすでに車の左真横（北西）に来ているということだったが、時速約一〇〇キロで走っているために私が真横を見るのは危険なので、助手席にいた藤沢さんに確認をうながしたところ、彼女も左の山に隠れる前の母船をはっきりと確認することができたという。

あとで目撃者の一人である佐藤氏に話を聞いた。

「私が目撃した時間は二分足らずだったと思う。昼の一二時頃だった。出発したときからUFOの話をしていた。見かけ上の大きさは右手をいっぱい伸ばした指先で三センチ程度だった。でも後に見た低空の飛行機よりも大きかった。それぐらいだから、普通の飛行機を見間違うことはないと思う。ビデオで撮ろうとしたが失敗した。

形は図5のように、円筒形で、色は銀色だったが、両端近くにオレンジ色の部分が鮮明に見えた。後日、清水さんに聞いたら、清水さんもはっきりとこのオレンジ色の部分を確認していた。

アダムスキーの『第二惑星からの地球訪問者』の中に、アダムスキーがアメリカのデザートセンターで初めて金星人とコンタクトしたとき、直前に現われた母船も銀色の葉巻型で、一部がオレンジ色をしているという記述があったことを思い出して、再度読み返すと確かに同じだなと思った。

とにかく、今回の旅行は始めから異星人に見守られているという感じがしていた。ぼくはいつも母船のイメージの想念を送っている。知らせる運動の一環として、あれがビデオに撮れればバッチリだったのだが――」

私の考えでは、母船側は私たちにビデオで撮らせないようにしていたのではないかと思う。あのタイミングでなかったとしたら、私ばかりか佐藤、川村の両氏も常にビデオカメラを携行していたから、素晴らしい映像が撮れたはずである。それが不可能だったということは、何らかの事情で母船側が撮らせないようにしたものだろう。

しかし複数者が明確に目撃しただけでも素晴らしい体験だったと思う。左ページの図は筆者の依頼に応じて、佐藤氏が作成したものである。

▲前列左より、堀江健一、佐藤晶（ビデオカメラを持っている）。
後列左より、川村隆男、熊谷美千代、藤沢紀子、清水正。

大母船の出現状況

イラスト／佐藤　晶

日時＝1994年９月９日、午後12時頃
場所＝東北自動車道・佐野インターと栃木インターの間
天候＝快晴

図 1　上から見た図

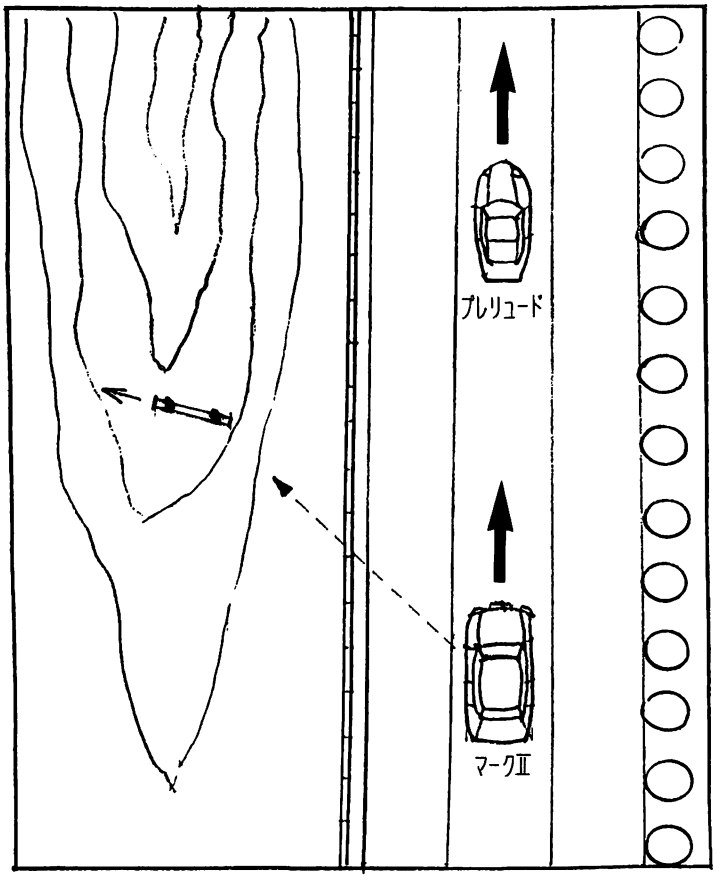


図 2　走行中、後続車から見た図

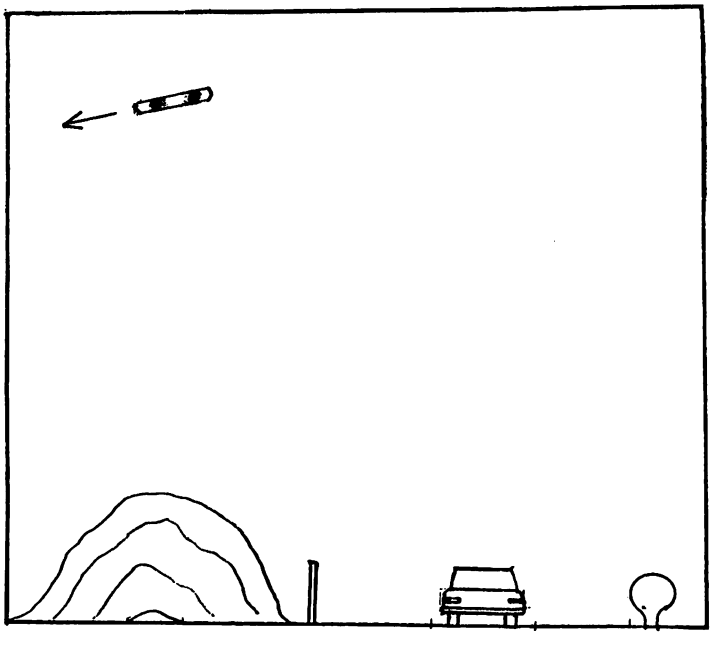


図 3　後続車の助手席左側から見た図

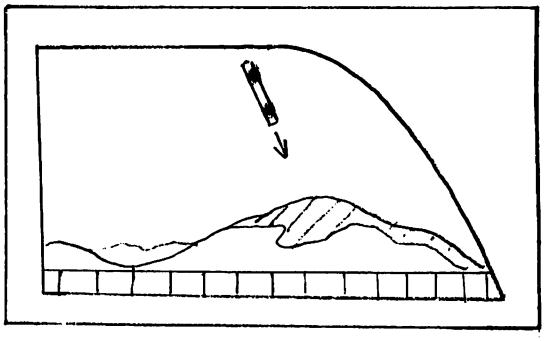


図 4

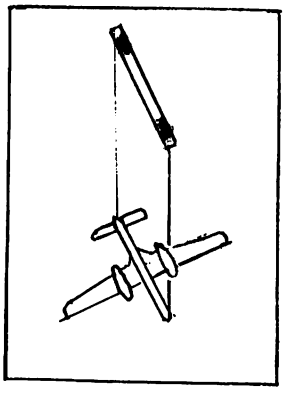
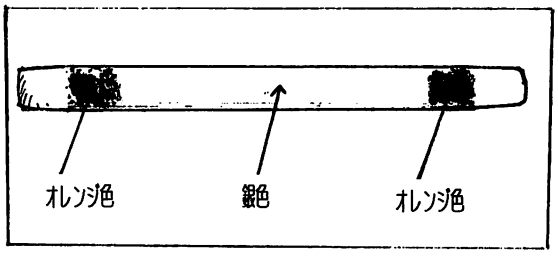


図３から見た場合、飛行機ならば図４のように見えるはず

図 5　大母船と思われる物体の拡大図



A Real Nice Visit with Dan and Pam
by Hachiro Kubata

ダニエル・ロス氏宅訪問記

久保田八郎

昨年七月一九日、私は単身で渡米してダニエル・ロス氏宅を訪れた。これは昨年一〇月九日の日本GAP総会で氏が来日して講演を行なうので、その事前の打合せをし、また氏が所有するアダムスキー関係の写真を複写したり、その他、筆者が所有しない資料等を分けてもらうのが目的であった。

どこにもレッスンがある

自宅から成田空港までは本部役員の田中淳幹事が車で送ってくれた。海外旅行は三〇回近くになり、アメリカへも二〇回近く行っているので旅慣れているつもりだが、機内の窓際へ座らされたために、サンフランシスコまでの九時間のあいだ、トイレへ行くたびに同列の二人の男性に立ち上がってもらわねばならず、ずいぶん気を使った。

しかし二人とも親切な人で、特に通路側にいた中国人は温かい人だった。このことから、自分が通路側にいた場合、奥の人が外へ出ようとするときには、喜んで「さあ、どうぞ」と言いながらサッと立ち上がるべきであることを教えられて、非常に良いレッスンになった。

英語の辞書を読む

七〇歳という年のせいで暗記力の衰えた私は、機内ではずっと『ニューアンカー英作文辞典（学研）』を読んでいた。これは中・高生向きに編纂されたものだが、私が所有する数百冊の英語関係参考書や辞書類のなかでは最も優秀な部類に属するもので、都内ではふだんでもカバンに入れて持ち歩き、電車内で小説を読むように目を通している。口語英語習得に絶好の武器になるので手放せない。オックスフォードやロングマンの英々辞典などは本棚の隅に追いやられている。それほどにこの辞書は日本人に役立つ辞書なのだ。これに収録されている英文の例文を全部丸暗記すれば、英米人が驚嘆するほどに正確な口語英語の達人になれるだろう。ただし丸暗記すればの話だが——。

大宇宙思念法

読み疲れると大宇宙思念法を行なった。無数の原子からなる飛行機の機体全体は私自身と同様に大宇宙力（宇宙の意識）によって生かされている生き物である。したがって機体は私と一体であり、私の想念は機体のあらゆる原子に浸透するので、絶対に故障などは起こらないと念じていれば、それに感応する。「飛行機さん、パイロットさん、あなたがたは安全に飛ぶ。有難う」と、しきりに想念を機体全体に送り続けた。

ロス氏宅に着く

サンフランシスコ着後、空港近くのバーリンゲーム市に住む息子夫婦の家に二日間滞在し、久しぶりに語りあって激励したり、少し英語をしゃべりだした三歳近い孫娘と遊んだりしたあと、二一日、嫁の運転する車でコンコード市のロス氏宅へ向かう。東京はひどく暑いが、こちらは朝夕の気温が摂氏二〇度前後なので大変涼しい。

車で約一時間、ロス氏宅に着いたのは午後一時半頃だった。玄関の呼び鈴が故障しているらしいので、三人でドアーをどんどん叩いていると、やがてロスさんが微笑を浮かべながら出てきた。嫁と娘は帰って行った。

ここはアメリカでよく『コート』と呼ばれる長方形の広大な敷地で、それが広い道路に対して直角に整地してある。各長辺には家が四軒と三軒相対して並び、奥の短辺には一軒ある。計八軒の一区画だ。ロス氏の家は三軒の真ん中にある。どの家もモダンな平屋で、各家の前側は芝生の庭になっており、車二台分入る車庫が横にある。当初はにぎやかな市街地なのかと思っていたが、この一帯は緑豊かな閑静な場所で、植えた樹木が多い。このコートの風景の美しさはため息が出るほどで、まるで公園の中に住宅を配置したという感じだ。ここは治安も良好だという。

風景の美は家のデザインで決まる

我々がある風景を眺めたとき、それを「美しい」と感じるのは、そこに点在する建物が美しいからである。樹木や草原等の自然の風景は日本も欧米も変わらない。そこに建物がなかった場合を想像すれば、そのことはすぐわかる。ところがすぐれたデザインの住宅があるのとないのとでは受ける感じがまるで違う。そうした住宅のデザインになると日本の家屋は太刀打ちできない。以前に数度訪れたエーゲ海沿岸のギリシャの白亜の建築物群が紺碧の海に映える光景を見て、ラフカディオ・ハーンの言う『知の西欧』を実感したのと同じ感覚は、アメリカの風景にもわきおこってくる。もっともハーンは東洋の神秘に憧れていたのだが——。

さらにアメリカへ来るたびに感心するのは、洗濯物を屋外に干している家が皆無である点だ。以前は法律で規制されているのかと思っていたが、ロス夫妻によると、法律は関係ないけれど

も洗濯物を外に干すと風景の美観を損ねるので自発的に出さないのだという。いったいに白人には肌着類を他人の目につく場所に出すものではないという感覚もあるらしい。

アメリカの平均的な家屋

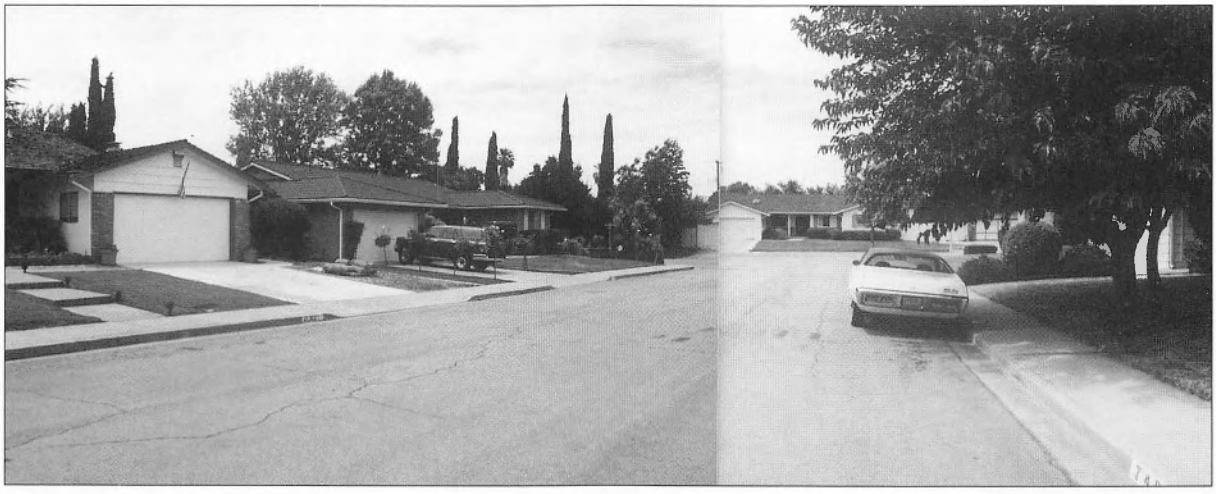
ロスさんの邸宅は典型的な白人社会の居住空間をなして、合理性、機能性につらぬかれている。

ここには部屋が七つある。主体をなすのは中央の二〇畳はあるリビングルーム。それに暖炉のついたもう一つの広いリビングルーム、一部屋で一二畳はある寝室が二つ、八畳程度の事務室が二つ、それにダイニングキチンとくる。どだい四畳半だの六畳だのという狭い部屋は作らないのがアメリカの家屋だ。裏には芝生のない庭があり、ここにはリンゴやアプリコットの木が植えてある。したがって全体の敷地は少なくみて四〇〇平米はあるだろう。これがアメリカでは普通なのだ。これを二階建てにして建坪を狭くしても日本の豪邸に入るだろう。これで家賃が一カ月一〇〇〇ドル（約一〇万円）だと言う！

しかしアメリカは広大な国土を持つ国で、一方、日本はカリフォルニア州程度の面積に全米の人口の半分に肉薄する人間が詰めこまれているのだから、日本と比較するのは無理な話だ。

▲自宅玄関前に立つダニエル・ロス氏

▼コートと呼ばれる場所。右端がロス氏の家。白い車はロス氏の愛車。



ロス氏は四七歳。昔、高校を卒業後、すぐに海軍に入り、原子力潜水艦に乗り組んで九年間勤めてから退役し、その後カリフォルニア州立大学のサンディエゴ校に入学して科学と哲学を学んだ。現在はアメリカのアダムスキー派UFO研究家として名高く、名著『UFO―宇宙からの完全な証拠』は世界のUFO研究界に大きな影響を与えた（日本語版は中央アート出版社刊）。私とは古くからの親友で、すでに二度来日している。寡黙なタイプだが非常に誠実な人だ。

見事な整頓ぶり

まず最初にロスさんが家屋の中全体を案内してくれたが、どの部屋も見事に整頓されているのに驚いた。私が来るというので二週間かかってペンキを塗り替え、家具を新調したという。大統領なみの扱いだ。

リビングルームに落ちついて、しばらく語りあった後、彼が所有しているアダムスキーのカラー写真類と私にとって未知のアダムスキー関係英文文献類の複写にとりかかった。これは窓際の自然光を利用するので、暗くなる前にすませる必要があるからだ。

日本から携行した複写用のコピースタンドを組み立てて本格的な撮影を手早く行なうのを夫妻が珍しそうに見ている。しかし文献はかなり沢山あるので、奥さんのパメラさんが「町へ持って行ってコピーをとってきてあげましょうか」というので、お願いすることにした。

終了後は夕方まで大いに語りあった。白人の家庭に入り込むことには慣れているので自宅にいるのと全く違和感はないのだが、例によって一つだけ困ることがあった。それはトイレが風呂場や洗面所と同じ部屋にあるので、誰かがそこに入っていると他人は入れないのだ。この点だけは日本式に分離してあるほうがよい。

ふだんは飲まない私

ダイニングルームで夕食をご馳走になる。夫妻は私が肉を食べないことを知っているので、鮭の切り身を焼いたのを出す。うまい。食事が始まったならば「Very delicious meal.（たいそう美味しい料理ですね）」というのが礼儀になっているので、それを言うと、パメラさんが「Thank you.（有難う）」と笑顔で応える。私はロスさんをアメリカ流にデアンと呼び、奥さんをパムと呼ぶ。夫妻は私をクボタと呼び捨てにする。

最初はビール、次いでフランスの赤ワインが出た。かなりの上物だ。ロスさんは日本酒もあると言ったが、私は日本酒を飲まないと言ったので出さなかった。

ふだん私は自宅でほとんどアルコール類を飲まない。飲むのは外での付き合いのときだけである。酒ビンを自宅に置くことを嫌う私は、アルコールに関するものはいっさい身辺に置かないようにしている。私自身は禁欲的な環境を好むので、飾り気のない修道士の部屋のような雰囲気をつくりだす傾向がある。

ただし付き合いの宴席で私が仏頂面をして飲まないでいると、若い人達が遠慮して飲まないので、そういう場合は率先して飲む。そのために私を酒飲みであると思う人が多いのだが、これは事実に反している。ただし人間（地球人）は如何に他人を理解しないかということをあらゆる面で体験して知っており、地球は誤解の惑星だと割り切っているから、べつだん気にもしない。ロスさんとは大いにワインを楽しんだ。

忘れたのは無知と同じ

パメラさんの手料理を賞味しながら、ここでは談論風発、ほろ酔いかげんで大いにベロが回転した。何をしゃべったか、あまり覚えていないが、当時、日英両文で読んだ大ベストセラー『マディソン郡の橋』のロバートとフランチェスカの感動的な晩餐と同じような晩餐会であったことは間違いない。ただし、この不倫物語をここで出すことは遠慮した。夫妻も読んでいないという。

酔いがまわると大部分の英語は母国語のように口から出てくるが、ときには頭の中で和文英訳をやってからしゃべることもある。今の私が英語を一〇〇パーセント母国語化するには、少なくともアメリカに二〇年は住む必要があるだろう。自分は英語圏に住んだことはないのだからと自己弁護しながら話す。

「昔、若い頃に英、独、仏、西、中、韓等の言語を独習したが、みーんな忘れてしまった。すべては風とともに去った。バトラーもスカーレットもみな去ってしまった」と下手なジョークをとばしたように思うが、よく覚えていない。しかし忘れたということは元から知らなかったというのと同じであるから、こんなことを言うべきではなかったと大いに後悔した。

強い家族間の絆

楽しかった夕食会を終えてからリビングルームに移動して、ここでも愉快に語り合った。

アメリカ人は利己主義の強い民族で家庭間の不和はひどいものだと日本では思われがちだが、これは勘違いも甚だしい。彼らは家族の絆を非常に大切にし、親兄弟や親類などの写真を壁に沢山飾るのが普通である。ロスさんの家も例外ではなく、夫妻の若き日の写

真や親戚一同の写真が壁面を埋めている。

夫人のパメラさんはむかし看護大学を出て現在は付近の大病院に勤めている。一一人兄弟姉妹の四番目で、他の人達もみな結婚して健在だという。それらの小さい子供さん達数十名が一同に会した写真は壮観だ。ときどき親戚全員で集まって盛大なパーティーを開催するという。

ロスさんはある運命を背負ってこの世に生を享けたけれども、お母さんは非常に立派な人。パメラ夫人のお母さんのお母さん、すなわちお祖母さんのキャサリンさんはいま一〇二歳で健在。アイダホ州の地元の名士になっており、二年前の一〇〇歳の誕生日には数百名の地元民が集まって盛大な祝賀会が開催されたという。当時これを聞いた私はお祖母さん宛の祝辞をロス氏に託したところ、遥かな極東から日本人がお祝いの言葉を送ってくれたといって、涙を流して喜んだという。

オドロキ・ギフト

夜がふけて寝室へ案内されたのは一二時をすぎた頃。一二畳はあるベッドルームの巨大なダブルベッドでひっくりかえって熟睡する。

翌朝は九時頃起きて洗顔とシャワーをすませてから、朝食をキチンのカウンターで頂く。ロスさんがパイナップルを切ってジューサーでジュースを作ってくれる。この台所には食器類は目につく所に出してはなく、すべて戸棚の中にしまいこんであるので、ガランとしている。

パメラさんが朝刊をとってきて、読めという。タブロイド版のおそろしく分厚な数十頁もある新聞に閉口する。あれこれとしゃべりあいが続く。さてここらでバクダンを出そうか。

実は昨夜、夕食のときに、「明日、あんたらにSurprise gift（驚かせるような贈り物）を出すからね」と宣言したのだ。奥さんは興奮気味に「何かしら？今夜は眠れないわ」と言う。

さあ、リビングルームへ移動しよう、と二人に呼びかけて隣室のソファに座ってから、低いテーブルに置いたままになっている私のカメラを取り上げて、「これがSurprise giftだ。これをあんたらにあげよう！」と言うと、二人はハトがマメ鉄砲をくったように目をパチクリさせている。「エーッ、ほんとうにくれるの？」とパメラさんが叫ぶ。いやもう二人が驚いたのなんの、呆然となっている。これこそまさにオドロキ・ギフトだと私はほくそ笑んだ。

このカメラは私が多年愛用したニコンFE2で、写真原稿作成に多大の役割を果たした白ボディーの名機である。かなり以前から製造中止されて現在は中古品でも高値となっている。これを私は二台所有しているので、世話になったロス氏に一台進呈しようとかねてから考えていた。そのために銀座のニコンサービスセンターへ出して、上部のカバー等を取り替えて新品同様にしておいたのだ。

レンズは二八～五〇ミリズームがついているが、前日使用した複写用のマイクロニッコールレンズも一緒に贈呈した。というのは、ロスさんはアメリカでUFOの講演を行なうときに、よくスライドを使用するが、そのスライドは友人に頼んで製作してもらうと言っていた。だが、この複写用レンズがあれば、彼が自分で撮影してスライドが作れるので費用を節約できるのである。感情をあまり顔に出さぬロスさんも、さすがに驚喜したようだ。携行したコピースタンドも小型三脚もここに置くことにした。

それから延々一時間、私は英文の使用説明書を参照しながら写真の原理とカメラの使い方を講義した。夫妻はそれまで三五ミリ一眼レフなどには触ったこともなく、日本製の小さなコンパクトカメラを使っていただけだから、理解できるかなと危惧したけれども、知性の高い二人はよくのみこんだ。

「いまはオートフォーカスの全盛時代だが、三五ミリ一眼レフに慣れるには、まずマニュアルで始めるほうがよい。このほうが写真術の基礎を学ぶのに有利なのだ」と力説した。

愉悦の二日間

「他人を喜ばすことをもって無常の楽しみとなす」というのが私の生き方の一つだが、この事を今回ほどに痛感したことはない。自分自身が歓喜に満ちてロスさん宅をあとにしたのは二二日の昼過ぎである。七一年型プリマスの古い大きな車を愛用する彼と奥さんの二人でバーリンゲーム市まで送ってくれたが、素晴らしい二日間だった。アメリカという国の一般社会の表裏はすべて省略して、ここではダニエル・ロス氏宅訪問の状況のみを簡単に伝えた。

先にも述べたようにロス氏はきわめて寡黙で、決して感情的になることはなく、冗談を全く言わないタイプの人だが、非常に誠実で、物事の処理は正確このうえなく、正直なること無比。アダムスキー問題の探求に全力を傾注している人である。

彼によれば、日本GAPがこれほどにアダムスキー啓蒙活動を展開していることは驚異的であり、日本という国自体が不思議な存在であるという。夫人のパメラさんも日本大好き人間で、今回の来日を心から喜んでいた。私が今後もたびたび彼らの自宅を訪ねることを期待して、カリフォルニア州の現住地から他州へ移住はしないという。

You Have a Power of Seeing Man's Aura
by Akinori Endo

あなたにもオーラが見える

■オーラ透視の第一人者が説く超能力開発法

●遠藤昭則

オーラとは何か

古代から人間や動物、そして植物の周囲には不思議なものがあるといわれてきました。それは肉眼の視覚では通常見えないのですが、あきらかにそこにあるもの、光のようではあるが、そうでもないような、まるで神の威光をあらわすようなものとか、いろいろと言われてきましたが、現代ではそれはオーラと言われています。

古代からというと漫然としてはいますが、古代オーストラリアの岸壁にある、動物の周囲を取り囲むように描かれたものや、仏像の後光、キリスト教絵画の聖者の後頭部にある透明な光など、どのような時代でもそれは取り上げられ、描かれてきました。

しかしそのようなものを残すには、オーラの見える人がいなくてはならなかったでしょう。それが言い伝えから描かれたものであるのなら、見えない人にも、それを納得して受け入れられる何かがあったからでしょう。

その納得するものとは何でしょうか。私たちが納得するためには何らかの証拠が必要です。しかしその証拠でさえも、人間の狭い心に限られたものでしかないとアダムスキー氏は、新アダムスキー全集第七巻「宇宙哲学」の中で述べています。久保田先生によれば、アダムスキーもテレパシー、遠隔透視、過去世透視、オーラ透視などが出来た大超能力者であったということを、一九七五年にカリフォルニア州ビスタでア氏の助手であったアリス・ウェルズ女史からお聞きになったということです。

オーラを見るには証拠というよりも体験が必要です。そしてその体験がなくても、私たちの内部にある英知は、オーラはあるのですよと言い続けてきているように思えてなりません。

では、そのオーラとはいったい何なのでしょうか。

子供の頃から今日までの体験と、学生時代から今日まで、本当にオーラの見える人に会って調べてきたことなどからわかってきたことは、オーラと一口に言っても、どうやら三種類のものがあるようだということなのです。

それは次のように分類できます。

一、身体の周囲一〇から二〇センチメートルの辺りまで出ているもの。白い霧状のもので、身体からの余分な力や不要となった力が排出されているものと思われる。身体が不調なときには出がわるくなる。

二、身体の周囲四〇センチメートルから六〇センチメートルの辺りまで出ているもの。本人の思いや身体の調子によって色が変化します。これを見るには肉眼とともに心の目も使うことになります。たぶん相手からの波動をテレパシックに感受してそれを色として見ているのでしょう。

三、身体の周囲六〇センチメートルから九〇センチメートルの辺にある、仏像の後光のような形をしているもの。ただし人によって形は異なります。このオーラは、

「私はここにいますよ」

という、自分の生命としての場を現わしているようです。

おおまかな形は図1にあげておきますが、オーラって複雑なものなのだな、と思われる方がいるかもしれませんので、簡単な例でさらに説明しておくことにしましょう。

私たちの住んでいる地球がそのよい例になります。

地球には空気があります。それは地面から成層圏の辺りまで広がっていますが、これは一番外側のオーラにあたります。

そしてその空気には色がついて見えます。つまり青空です。これは色のついたオーラにあてはまります。地球という惑星の個性をあらわすように、各人の個性をあらわしています。

また冬の朝などに、太陽の力によって足元の台地から暖かい水蒸気が立ち昇るのが見られますが、それは一番内側のオーラにあたります。

地球の大気層は光や赤外線探知装置、また温度計や湿度計などによって調べることができますが、オーラは微弱な光を増幅して測定する光電子倍増管で

図1 色のついたオーラ

外側のオーラ

も測定することはできないということです。

オーラを探そうと、さまざまな装置による測定がなされてきましたが、それは電波でもなく、静電場でもなく、ましてや赤外線でもないのです。オーラがいったい何であるのかということは、これからの科学の発達を待つよりしかたのないものなのでしょう。そしてそこから発見されることによって、私たちは誰もがオーラを見ることができるようになるのかも知れません。

オーラを見るには

では、そのオーラを見るにはどのようにしたらよいのでしょうか。精神世界と呼ばれるコーナーが書店にはあります。そこにはオーラを見る方法の出ている書物がいろいろとありますが、多くは神秘的な行法によっています。

オーラが地球の大気層に例えられるものならばそれはけっして神秘的なものではなく、科学的な、いえ、誰でもがゆったりと青空を見られるような方法で見られるものではないでしょうか。ましてや自分だけが見えるのだよと優越感を持つものではないでしょう。誰にでも青空は見えているのですから。

そこで、もっと安全に、しかしまじめにしっかりとした態度でオーラを見る方法を紹介していくことにしましょう。

身体の一番内側のオーラを見る方法

皮膚に一番近いオーラは、最もたやすく肉眼で見ることができるようになります。それは霧のようなものや、細かい針が密集して出ているように見えるものなどがあるのですが、イギリスの医者であるウォルター・J・キルナーという人が、重シアニンという青紫色の液体を二枚の板硝子の間に挟み、それによってこの内側のオーラが見えるようになるということを発表したことでも世に知られるようになりました。

彼の方法は後にいろいろな人によって改良され、ピナ・シアニンという液体の方がより見やすくなるというようになってきました。

これはキルナースクリーンと現代では言われています。しかしそのスクリーンを通して相手のオーラを見ようとするのではありません。このスクリーンを使って、オーラを見やすい目にしていくのです。

ところが、私も実際に試してみましたが、確かにほんの一部分のオーラは見やすくなるのですが、はてなという疑問が湧いてきました。人間の内部にある『宇宙の意識』を使って見なければ、何にもならないのではないのか。そういう疑問です。

それに、このスクリーンを使う方法では、指の周囲を取り巻くように、黄緑や青い色が見えるようになります。しかしこれはオーラではありません。指の周囲の色のついたオーラは後に図で示します。

また、他の方法でもそれらしいものを見ることができます。それがキルリアン写真装置です。

キルリアン写真装置は、旧ソ連のキルリアン夫妻によって考案された装置です。それは向かい合う極板に微弱な電流だが高電圧をかけ、その間にたとえば木の葉などを入れるものです。するとその葉の周囲にオーラのようなものが見えるのです。

ただしこれはオーラそのものではありません。気功師の発する気が遠赤外線ではないかと言われたが、実はそうではなく、似て非なるものであったというようなのと同じことです。

さて、オーラを見るということはそれだけでよいのでしょうか。私たちが外界を肉眼で見るとき、それは内部の意識で見ているとアダムスキー氏は新アダムスキー全集第三巻『生命の科学』の中で述べています。ということは、オーラを見るにも意識を使っていることになります。

それなら、キルナースクリーンその他の補助器具を使って見られる世界に限定されることはないでしょう。それよりもはるかにすばらしい働きが私たちの肉眼やそれを支える身体にはあると思われるからです。

補助器具を使うのではなく、実際に高精密な私たちの身体を使ってオーラを見ることによって、人や自然界のあらゆるものがつながっている同じ力の世界への認識は、さらに深まるのではないでしょうか。

ではそれにはどうしたらよいのでしょうか。その方法について紹介していくことにしましょう。

一、薄暗いところで、黒い紙、布や深緑色の黒板を背景にします（これからの方法はすべてそのような背景が良いでしょう）。

二、指先の空間五ミリメートルの辺りを見ます。そこに、筋状（すじじょう）の図2のようなオーラを探します。

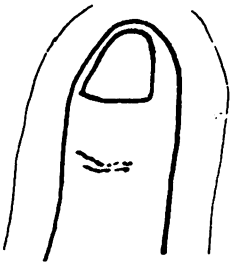
筋状のオーラ

図2

三、焦らないで下さい。焦ると、指の周囲に図3のような青い色が見えてきます。それがオーラだと書いてある書物がいろいろとありますが、それは違います。オーラではありません。

青い色に見えるニセのオーラ

図3



四、見えてきたものをスケッチしておきます。見えるものは一度に一カ所だけです。

その見えたものを丹念に部分ごとに描き上げていくと、指の全体的なオーラの図が出来上がります。これは、顔を見るときに鼻と目の細部を一度に見ることができないのと同じことです。

五、宝石の原石であるラピスラズリもそのような形のオーラを見ることができますし、その上直線上のオーラには、青白いきれいな色がついていることもあります。

六、これが見えるようになったら、観葉植物の葉の先や、樹木の芽などさまざまなものから出ているオーラを見て下さい。中には見にくくてよくわからないものもありますが、そのときには焦って見ようとしないことです。

身体の一番外側のオーラを見る方法

身体の一番外側のオーラを見るには、指の周囲を見る練習ではどうにもなりません。なぜなら、指の周囲のオーラとは異なるものだからです。そしてこの身体の一番外側のオーラが見えるようになると、今まで見えなかった指や手の周囲のオーラが見えるようになります。それは前述した指先の霧状のオーラの外側に見えるものです。それは

色のある指のオーラ

図4

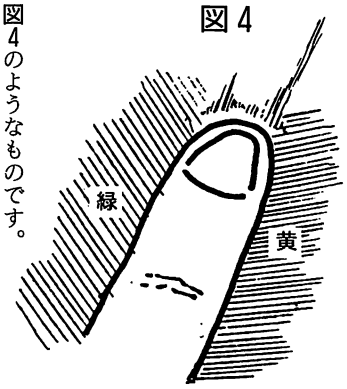


図4のようなものです。

そのオーラを見る方法は次のようなものです。

一、人の身体の周囲の空間、それもどこか一カ所を見ます。見るのに適した場所は、

ア。肩の斜め上
イ。頭の後ろ
ウ。頭のてっぺん
エ。腰の周囲

などです。

二、その辺りに、空気の層になっているようなところを探します。

三、もしもわからないようであれば、その人に近づき、だいたいこの辺りだろうなという位置を感じとります。

四、さらに、相手に、どの辺りに近づくと違和感があるかということを教えてもらいます。そこがその人の一番外側のオーラである可能性が高いのです。

五、始めは空想でもかまいませんから、多分こうだろうというオーラの図を紙に描きます。空想は大切です。それによってオーラを見る神経の経路が頭の中にできあがってくると思われるからです。

六、そうしてさまざまな人を見ます。街を歩いているときでも、人と話しをしているときでもそれはできます。

七、さまざまなデータが集まったら、人に見せびらかすのではなく、それを自分で見て正しいと思えるものなのかどうか改めて考えて下さい。そしてオーラを数人で見る練習をするのもよいでしょう。それによって自分の見ているオーラが正しいものなのかどうかがわかるようになるからです。

そのオーラの中の色のついたオーラを見る練習

この練習は、もっとも個人差があるかも知れません。オーラの色は、相手の感情や身体の働き具合など、それらから発せられている波動を感受して色として見ていると思われます。

しかしここで注意することがあります。光と色とは違うということについてです。

私たちが物を見たとき、その色がわかるのは、色を感受したからではありません。そのもとである光の波動を目が感受したからなのです。そして目がそれを色として認識するから、ああこれは赤い色だとかということがわかるのです。

オーラも、相手からの波動を身体のどこかが感受して、それを色として認識しているようです。感受しているのは目かもしれないし、身体の細胞であるかも知れません。ですから、オーラと光とを混同しないで下さい。色があるからオーラは光なのだとはいえないのです。

そこで、色のついたオーラを見ることは、目で見ることだなどとも言い切れません。心の目でも見ている可能性があるのです。実際、心の目で見るようにした方が詳しく色がわかります。

その方法は次のようにします。

一、まず、色というものに興味を持つ必要があります。そして赤い色、青い色などをすぐに思い描くことができるように、日常から練習しておきます。

二、白い壁または紙を前にします。そこに自分の内部にある光を投影するような気持ちになります。

これは色のついたオーラを見る上で大切なことです。相手の身体の周囲の色を見るのは、その周囲の空間というスクリーンに自分の感じている相手からの波動を色として投影しているということも考えられなくはないからです。

三、いろいろな人を見て、その人の身体の周囲の色を感じるようにします。外界を見ることが、光という波動を感じるように、相手から発せられている波動を敏感に感じとれるように練習をしていきます。これはテレパシーの練習にも通じるものですから、オーラの色を見ることは、テレパシー能力の向上にもなります。

始めは色がわかりませんが、焦らずに続けて下さい。そして目で見ているという気持ちを起こさずに、「相手の生命力の色を私の内部の生命力が見ている」

というように考えて下さい。

つまり結果の世界ではなくて、生命力の世界を見ているのです。

四、また、どのオーラを見るときもそうですが、見る側が健康であり、精力が必要であると巷(ちまた)で言われているようなことは全く関係ありません。誰の中にもそのオーラを見る力、生命の力はあるからです。

オーラの色や形とその意味

図5にいろいろなオーラをあげておきますが、オーラの色や形の原因には、

①身体的なもの

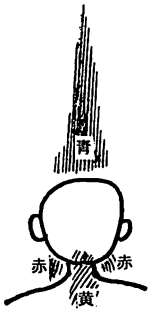
②感情などの想念によるもの

の二種類があることも明記しておきます。そしてそれらは厳然とした科学的なものであるようです。

（筋肉のストレッチにおける色）

少し血圧が高く、頭をよく使う人のオーラ

図5(1)



たとえば足のストレッチ体操をしているとしましょう。すると筋肉の伸びている側の周囲にはオレンジや黄色が見られます。また収縮して弛緩している側の周囲には緑色が見られます。

（かぜの症状での色）

かぜは万病のもとと言われますが、オーラでもそれは言えることです。かぜをひいて熱が出ると、普段とは異なった形や色が出るからです。それも図にあります。

（よくない症状の場所の色）

身体のどこかによくない症状があると、その周囲に濃く濁ったオーラが出ています。それは、その場所の中で炎症が起きているように、もやもやとしたものになって見えます。

また黒い色のときもあります。それは色が黒いというよりも、よくない場所に力が使われているために、空間へのオーラの輝きがほとんどないことを示しているのかもしれません。ですから、黒い色だからよくないということだけではいけないのです。身体の中でその分、力が使われていることに気づく必要があるでしょう。

（思いによる形の変化）

思いによってもオーラの形は変化します。怒りや喜びなどの大きな感情によって、一番外側のオーラまで形が変化するからです。それは大きな感情によって顔が変化するのと似ています。

（想念と色）

人のいだく想念によっても色は変化します。それは青空に色のついた雲が出現するようなものです。青空が地球の個性をあらわすように、まず自分がここに転生してきた目的をあらわす色が、一番外側のオーラまで薄く広くあります。そしてその中に想念による雲であるオーラが出現します。空の雲にはいろいろな形があるように、それは楕円形のモヤのようであったり、筋状のものであったりといろいろです。

その雲のように見える色には次のような意味があります。

赤…自分を表現するときの色。

橙…常に健康を目指している色。人を教育する力のある人の色。

黄…うまく頭を使う人。

緑…力強さのある人。押しも強い。

空色…いろいろな人と話のできる人の色。

青…人をうまく導くことのできる人の色。感受性が豊かであるので、幾分かの弱さもある。

紫…自分や他の人を高雅な雰囲気に持っていくことのできる人の色。

白…宗教や病気治療、マッサージ、喜びなどの快感のあるときに出る色。快感のホルモンであるエンドルフィンと関係があるのではないか。良い色だが、この色があるから高貴であるとはいえない。

銀…自分の中に強さ、それも超能力的な強さのある人の色。ただし、全身に見えるのではなくて、背骨の内部などを透視して見える色。

金…生命力、『宇宙の意識』などを自然に則して探究している人のオーラの中やその周囲に時々見られるもの。全身に見えるのではない。

（高い波動の人のオーラ）

このような人たちのオーラは、金や銀、また白ではありません。自分の持っている個性である色が最高に発揮されている色です。

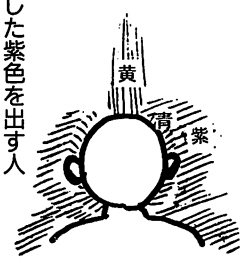
ですから、その高い波動の人が青い色の個性を持っている人ならば、その青が地球の一般の人よりも濃く、また

広く見えます。

図5の(2)

腎臓に障害のある人

(3)



安定した紫色を出す人

(4)

カゼで左の歯が痛い人

(5)

全体に青いオーラを放ち、ときどき金色の粉のようなオーラが見える人。

(6)

手のオーラ

(7)

ストレッチでのオーラ

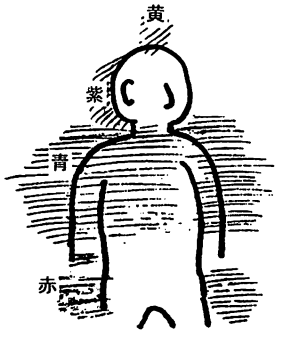
(8)

身体に異常のある人

(9)

安定した高い波動を放っている人

(10)



人に心地よさを与えながら人を導いていくことのできる人

(11)

会社で上の方で威張りながらしかも仕事もできる人

The Truth about Space People and UFOs
by George Adamski / Translated by Haehiro Kubota
© From Alice Pomeroy's "For an Example"

予知能力をもつ土星人女性の援助

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳〈アダムスキー講演集　連載9〉

ヘルマン・オーベルト博士の意外な打ち明け話、真相を知る米政府、アダムスキーを導いた土星人女性、アダムスキーの指導で宇宙船を開発した米海軍、人工衛星も成功、心霊的なコンタクトの横行、永遠に続く人間の転生。サンフランシスコ講演の質疑応答でアダムスキーが有益な秘話を公開。UFO研究者のこよなき指針となる内容。

科学者たちは異星人に気づいている

Q　異星人たちと一緒に働いている地球の科学者たちは、その事実に気づいているのですか？

A　その質問にはこう答えましょう。一九五四年にニューヨーク州のバッファローに行ったときのことです。ある人々の紹介で、ドイツ人科学者のオーベルト博士と知り合ったんですが、会話中に彼はこんなことを言ってきたのです。

「ジョージ、我々は援助を受けてきたんだ。我々科学者たちは、援助を受け続けてきたんだよ」

私はその意味をつぶさに理解しました。でも彼の口からもっと具体的に聞きたいと思って、「誰に？」とたずねてみました。

「異星人たちにだよ。本当なんだ！」

「ああ、わかっているとも」

そうなんです。科学者たちは異星人のことを知っています。そして政府もそのことを知っています。異星人たちが働いているあらゆる国の政府が、そのことを知っているんです。

（注＝ヘルマン・ユリウス・オーベルト教授はドイツの物理学者でロケット工学の大先駆者。ロケット開発の父と謳われた人）

実は昨日こんなことがありました。エグザミナー紙の記者とそこの社長が一緒に来たんです。二人とも今ここにはいませんがね。彼らに私は美しい異星人が写っている写真を見せました。彼女は私の世界講演旅行中に、未来予知によって私を援助してくれた女性でした。良く写った写真と、あまり良く写っていない写真の二枚がありました。

その記者は、そのうちの一枚の良く写っている方をくれないかと言ってきましたが、それは出来ない相談でした。そこで私は写りの悪い方の写真を彼にゆずりました。彼はその写真を受け取りましたが、結局それは、おそらく不鮮明であったためか、新聞には載りませんでした。

でも、もし私が今持っている写真を彼に渡して、彼がそれを新聞に掲載したとしても、異星人女性だとみなされることはまずないでしょう。

実は異星人たちは、彼らが働いているすべての場所で、関係者たちからその正体を知られているのです（注＝知らないのは一般人だけだ、という意味が含まれている）。

列車中で異星人に導かれる

それからこんなこともありました。ロンドン駅から鉄道に乗り、海辺のある町まで旅をしたときのことです。デスモンド・レスリーが駅まで送ってきてくれまして、私は彼と一緒に、私のために予約してあったコンパートメント（個人用客室）へ入って行きました。

すると、先客が一人いたんです。黒っぽいサングラスをかけた、とてもハンサムな男性でした。スペース・ピープルの多くが、よくそんな眼鏡をかけています。

デスモンドは怪訝そうな顔で私を見て「このコンパートメントはあなた専用のはずだが」と耳打ちしてきました。その男性は、我々が入って行くとサングラスをはずして微笑しました。そうこうしているうちに、列車が出発する時間になり、デスモンドは外に出て行きました。

さて、結論を言いますと、その男性

▲ジョージ・アダムスキー

が乗り合わせていなかったならば、私はおそらく目的地で列車から降りることはできなかったでしょう。というのは、その列車は車内アナウンスを全くしなかったんです。何の前ぶれもなく停車しては出発するということがくり返されていました。その列車は、「乗客は、自分がいまどこにいるのかを、自分で知っていなくてはならない」という立場を貫いていました。

私は結局、その男性の援助を仰ぎ、自分が降りるべき駅を教えてもらいました。彼は私よりも二つ前の駅で降りてゆきました。

彼は英国政府のために働いていた物理学者でした。そして同政府は彼の正体と、どこから来た人間であるかをよく知っているということでした。つまり異星人だったのです。

先刻私は、お金と関連した話をしました。それからパワーの確立と関連した話もしました。しかしこの問題には、もっといろんなことがからんでいます。今起こっている事、つまり皆さんが混乱した状況の中で研究してきたこの事は、我々の社会のあるいは文明の四つの基盤とかかわっています。

我々は、宗教的基盤、政治的基盤、社会的基盤、そして経済的基盤という四つの基盤の上に立っています。真実が明らかになると、その四つのすべてが影響を受けます。それは人類のすべてに影響を与えることになります。

宗教界も宇宙の真実を知っている

話を単純にしてみましょう。この世界で強い影響を発揮している二つの大きな宗教を考えてみて下さい。皆さんが好もうと好むまいと、それらは、なおも強力なパワーを保持しています。ローマカトリック教会と英国国教会です。

彼ら宗教関係者はいま他の惑星の自然環境や住民に関する真実を、彼らの教義と矛盾しない形で説明するための方法を発見しようとして日夜努力を続けています。そして彼らは、もしそれを発見したならば、それをすみやかに発表することになるでしょう。説教を通じて、すべての祭司や牧師がそれを語るでしょう。そうなれば、いかなる国の政府も真実を隠さねばならない大きな理由の一つを失うことになります。

現在、特にアメリカの政治家たちは、強い影響力を持つ宗教組織の主張と矛盾するような信念は決して口外しません。それが即、落選を意味するからです！　彼らが宇宙の真実を口にしないことの大きな理由の一つがそこにあります。

彼らは、この世界に生きているんです。この世界で生計を立てねばならないんです。もし彼らが何かを話し、それを誰かが気に入らなかったとしたら、そして、その誰かが彼らよりも影響力が強いとしたら、彼らは間違いなく職を失うでしょう！

それは、この世界の不幸な部分ではあります。でも、この世界はいま、そのような仕組みになっているんです。人々が仕事を確保するためには、真実を隠さねばならないという仕組みです。

いま私は、二つの宗教しか紹介しませんでしたが、同じように人々に影響を与えている宗教が他にもたくさんあります。そしてそれらもまた同様の問題を引き起こしているわけです。しかしいまや、宗教と宇宙の真実の二つを融合させようとする努力が意欲的に続けられているということも明らかな事実です。

米政府は真相を知って努力している

この問題に関連して、もう一つお話ししておきたいことがあります。このことも皆さんは正しく理解しておく必要があります。諸悪の根源は政府にあると主張している人々がいますが、それは、赤ん坊が何も悪いことをしていないのに、そうだと勘違いしてお尻

をたたくことと何ら変わりのない誤った不公正なことです。

もし皆さんが事実を知ったなら、決してそんなことは言えないはずです。私は家に政府関係者からのたくさんの書簡を保管しています。それは「政府は、宇宙空間を飛来する異星人や、この太陽系、あるいは他の太陽系の住民たちに関する、より本格的な研究活動を開始すべきだ」といった内容の書簡です。

政府は確かに、この本（注＝『さらば空飛ぶ円盤』と思われる）の一頁程度の大きさの紙きれ一枚に、百万ドルものお金を費やしたりしてきました。しかしそれは大昔からのことであり、それには、地球の起源ほどの歴史があるんです。

とはいえ、彼らは、いまこの問題に関しては、かなり掘り下げた研究を行なっています。私がワシントンのあるトップ科学者から手にした書簡の最後には、「宇宙の真実が明らかになったとき、地球人類は、自分自身が永遠に存在するものであることを、はじめて知ることになるでしょう」と書かれていました。

この国の政府は、精神的な角度からのアプローチを全く行なっていない、などとは間違っても言わないことです。政府は皆さんが眠っている間にもこの分野（異星文明）の研究を意欲的に続けています。私は、ワシントンで書かれて送られてきた、それを証明する明白な証拠を数多く手にしています。

結局、アメリカ政府は、すでに素晴らしい仕事を行なってきているんです。ただ、あまりにも急速に成長した木は、決してしっかりと立つことができません。嵐がやって来たりすると、たちどころに折れてしまうでしょう。しかし自然の法則に従って、ゆっくりと着実に成長した木は、どんな嵐の中でも見事に生き残ります。ですから、我々も忍耐強く待とうではありませんか。

土星について

Q 土星についてお聞かせ下さい。

A 土星という惑星は、長いあいだ、審判を司る惑星、あるいは正義の惑星として知られています。天秤が象徴として用いられているのは、そのためです。あの惑星の人々はいかなる隠し事もしません。

世界講演旅行中に私をあれこれと導いてくれた女性は土星人でした。彼女は他のスペース・ピープル同様、未来に私にどんな物事が起こるかを予知していて、それをいつも私に教えてくれました。そのようにして、実に効果的なアドバイスを与え続けてくれたんです。とても美しくて、素晴らしく均整の取れた体型で、身長は一八〇センチ近くありました。そして年齢はどう見ても二四歳から二八歳ほどにしか見えませんでしたが、実際にはおそらく四〇〇歳くらいでしょう。

皆さんの中にも、オーストラリアの人々と交流をお持ちの方が、おそらくいるでしょう。そして、フレッド・ストーンという名の男をご存じかもしれません。彼は、アデレードという町で、あるグループを組織しています。

オーストラリアに行ったとき、彼女はホテル・オーストラリアに泊まり、私はホテル・ビルトモアに泊まっていたんですが、土星人女性の部屋で簡単なパーティーが二度ほど開かれまして、それにはフレッドも招待されました。彼は、すでに結婚していて、彼の子供たちも結婚していたんですが、そのときの彼の土星人女性に対するやさしさといったら、もうありませんでした（笑い）。

彼は、他の殿方同様に、そうすることで、彼女も自分に同じようにしてくれるだろうと考えたわけです。実際、彼女はフレッドに相当やさしくしていました。彼女は、スペース・ピープルのことや、太陽系のこと、さらには宇宙の法則のことなどについて、彼とあれこれと語り合っていました。

しかし彼女は、誰に対してもそうなんですが、「これ以上話すと素性がばれるかもしれない。少し深入りしすぎたかな」と感じた時点で、次のように言って話題を転じました。

「でも、フレッド、こんなばかな話、まさか信じないわよね？　そうでしょう？」

それは賢明な策でした。彼女が異星人であることを感づかれたりしたら、おかしな状況を招きかねません。

彼女はこの世界の人々の扱い方をしっかりと心得ていました。地球人のほとんどは単なる『珍しいもの好き』です。彼らは単に『珍しいもの』を追い求めるのみで、『真実』を決して追い求めないんです。

続いて我々は南オーストラリアのスワンリバー沿いの町に行きました。そこで講演をするためにです。しかし私はそこで病気になりました。すると彼女は、すぐに医者を呼んでくれた上に、一晩中私につきそい、看病してくれました。そして次の日、私は無事に講演を行なうことができました。もし彼女がいなければ、私は数カ月も寝ていなくてはならなかったはずです。

そして、彼女が異星人ではないかという噂が記者連中の耳に伝わったのは、ちょうどその頃のことでした。

彼女は、皆さんがこのサンフランシスコ周辺でよく出会う（ニセの）異星人たちとは、全く異なった種類の異星人です。私はニセ宇宙人をよく知っています！　皆さんもおそらく、その種の異星人たちの話を一度ならず聞いていることでしょう。

彼らは家族をデトロイトに残してきているんです！　私がデトロイトに残してき

演したとき、彼らは皆さんや私と何ら変わらない普通の市民でした。彼らは私の話を聞き、あれこれと情報を仕入れては遊びにでかけて行きました。彼らはそのようにして、ただ大衆を混乱させているだけです。

それはともかく、噂を聞きつけた記者たちが、彼女を追いかけ始めました。誰かが彼らに通報したようです。ただし、講演のあと私は飛行機で一〇〇〇キロほど離れたアデレードに飛んだんですが、彼女はその飛行機に乗りませんでした。私と一緒に乗ればまずいことになるという印象を受けた彼女は、結局乗る飛行機を一便遅らせることで、見事に彼らとの遭遇を避けたんです。

土星人たちは、とにかく素晴らしい人々です。とても公正な人々です。そして、背が高くて、とても美しい外見をしています。ただもちろん、彼らのすべてが背が高いというわけではありません。中には背の低い人たちもいます。この地球でもそうですが、どの惑星にもさまざまな体格の人々がいるわけです。

それから、彼ら土星人たちが地球にやって来るときの乗物は、彼ら自身の宇宙船よりも、金星や火星の宇宙船に乗ることが多いようです。そして地球にやって来ているのは、ほとんどが科学者たちです。彼らはまた素晴らしく高度な道徳的規範を持っています。それはおそらく他のどの惑星のそれよりも高いでしょう。

地球のそれぞれの国家が独自の規則や関心事を持っているように、この太陽系の他の惑星群も、それぞれが独自の規則や関心事を持っています。しかし他の惑星の人々同士は、互いにとても密接な関係にあります。惑星間の争いなどは、もちろん決して起こりません。

この太陽系の惑星と言えば、ここにそれに関するある記事があります。この本（『さらば空飛ぶ円盤』（注＝中央アート出版社発行、新アダムスキー全集第6巻『ＵＦＯの謎』の第1部）にも書いたように、私が「この太陽系には惑星が全部で一二個ある」と言ったとき、人々はこぞって私をばかにしました。ところが、二、三年前に、実は冥王星の外側にある一〇個目の惑星が発見されているんです。

この記事は、その新しい惑星が発見された経緯とともに、冥王星が発見された経緯についても触れています。ただ、その新しい惑星はまだ命名されていません。というのも、新しく発見された惑星は、以後、少なくとも五年から一〇年間は監視され続けねばならない、というのが天文学者たちの一致した見解だからです。そのようにして彼らは、それがずっと太陽系軌道上に存在し続けるものか否かを確かめるわけです。彼らが正式にその発見を発表し、命名するのは、その作業を終えてからのことなんです。

しかし、彼らが実質的に一〇個目の惑星を発見したのは確かなことです。この記事にはその日時まで明確に記されています。

宇宙飛行に必要なパワー

Q 宇宙空間を飛行するときに彼らはどんな種類のパワーを用いているんでしょうか？

A もちろん電磁気です。ただし地球のいわゆる伝統的なパワーによっても、我々が他の惑星に行くことは可能です。つまるところ、電気と言っていいと思いますが、それが供給されればよいわけです。我々が金星に行って戻ってくるために必要とする燃料は、我々がいま人工衛星に用いているものよりもずっと少量ですむはずです。

我々にいま必要なのは、我々が別な惑星と地球を往復するために必要なパワーを供給する発電機――ほんの少しの燃料で機能する小さな装置――を宇宙船に積み込むことだけです。それによって、我々はいますぐにでも他の惑星に行くことができるんです。

事実、一九五四年の時点で我々はすでに他の惑星に行けたんです。我々は、すでにその時点でソ連に先駆けて、それが可能な状態にまで進んでいたんです。

宇宙船は開発されたが

というのも、当時私は、サンディエゴ海軍基地のある将官の依頼で、ある艦船に乗り、宇宙船の試作品作りを手伝っているんです。それは長さが一メートル八〇センチほどのものでしたが、あとで彼らがそれに手を加えたのは、ある壁と壁との間隔を、私が指摘した一〇センチから一五センチに変えた点だけでした。少しして彼らはそれが見事に成功したと報告してきました。

ですから、その宇宙船を用いさえすれば、当時、我々は他の惑星に行けたんです。でも彼らはそうしませんでした。完成してほぼ三カ月後に、その宇宙船の試作品は廃棄されてしまったんです。

当時はまだ、アリス・ウェルズ夫人がパロマー山にレストランを持っていました。あのレストランの所有者は私だったという人が多いんですが、私はあれとは何の関係もありません。彼女がオーナーだったんです。

（注＝アリス・ウェルズ女史はアダムスキーの助手として最後まで仕えた人）

まあ、それはともかく、ある日、そのレストランに、サンディエゴ郡の保安官と一緒に、ある別の海軍将官がやって来ました。私は彼に、なぜあの試作品は実用化されなかったのかとたず

ねました。すると彼は、あとで大きな問題が発生したんだと答えました。

大問題が発生した？　私は考えました。設計上の問題は克服されたはずだし、材料の調達も全く問題がないはずだ。だとしたら、その問題とは燃料にからんだことに違いない。

そこで私は、「石油？」とたずねてみました。彼は何も言いませんでしたが、私に向けてきた彼の微笑から、それが正解であることは明らかでした。

結局、問題は石油だったんです。なぜならば、我々のジェットエンジンは、普通の自家用車が一年間に消費する量のガソリンを、わずか数分間で消費してしまうんです。

それが問題になったわけです。ただし、だからといって、彼らを責めるわけにはいきません。というのも、地球の経済に対してテーブルを突然ひっくり返すようなことは、到底できないからです。そんなことをすれば、あらゆる地球人の生活が脅かされることになります。変化は段階的になされねばならないんです。

（注＝化石燃料を必要としない宇宙船を開発すれば世界の燃料産業界にパニックが発生するので開発を中止したの意）

ただし、次に申しあげることは、皆さんに、特に現在科学者として活躍されている方々には、参考になるかもしれません。

先程の件は大きな問題にはばまれてしまったわけですが、視点を他に向ければ、まだいろいろできることがあるはずです。

人工衛星開発法をアダムスキーが指導

たとえば、やはり一九五四年のことですが、ある優れた科学者が私を訪ねてきました。彼は私の良き友人で、当時、アリゾナ州のある航空機製造会社で、宇宙開発関係の研究を指揮していました。

彼はある問題を抱えて私に会いにきました。当時はまだ今のように人工衛星が飛んでいなくて、アメリカはまさに最初の人工衛星を打ち上げようとしていたんです。皆さんも新聞などで読んで知っておられる、あの二一インチ（五二・五センチ）の黄金の球体です。

その球体の内部に、科学者たちは、ホフマンとモトローラ社製のちいさな装置群を埋め込みました。ご存じのように、それ一つで百万ドルもかかる代物でした。それがロケットの頭に乗って宇宙間に出て行き、やがてそこから情報を送ってくることになっていたわけです。

さて、彼らはその球体を製造したあとで、当然その試運転を行ないました。しかしそのテストを行なうたびに、内部に設置した装置群があっというまに爆発してしまう、あるいは焼け焦げてしまうという事態に直面したんです。

何度テストをくり返しても同じことでした。内部でショートのような現象が発生しているということはわかるものの、その解決策は全く見つからず、彼らは途方にくれました。テストのたびに国民の税金である一〇〇万ドルがふいになるわけですから、その意味からも大問題です。

そこで、先の友人の科学者が私に相談に来たというわけです。

私は彼に言いました。

「構造を正確に教えてくれないか。それがわかれば、良いアドバイスができるかもしれない」

でも彼は言いました。

「いやー、それはかんべんしてくれよ。なにぶんこれは最高機密なんだから」

そこで私は言いました。

「それじゃ、しょうがないね。残念だけど私には何もできない」

そう言われて彼は渋々ながら、その球体の構造を正確に描写しました。

それでわかったから私は言いました。

「いいかい、君たちに必要なのは常識だけだよ。物事をむずかしく考えすぎないことだ。実際は単純なことなのに、それを複雑に考えすぎると、我々は不必要なアイデアに気をとられてしまい、本質的なものを見失ってしまうんだ」

私は続けました。

「君たちは、この球体が宇宙空間の粒子群と衝突して傷つくのを防ぐために、周囲に負の電磁場を張り巡らすことにしたわけだね？　その負の電磁場があるために、やはり負に帯電している宇宙空間のあらゆる粒子群が、はじかれることになるわけだ」

「ああ、そのとおりだ」

「負の電磁場ができるということは、それと同時に、どこかに正の電磁場が発生するということになるよね？」

「まあ、そうだろうね」

「それはどこに発生すると思うかね？　この球体の内側だ。いろんな装置が入っている、この場所にだよ。それが装置群を爆発させてしまったということだ」

「なるほど。で、どうしたらそれを防げると思う？」

私はこう説明しました。

「君たちはただ、もう一つ球体を作りさえすればいいんだ。これよりも一回り小さい球体をね。それをこの中に入れて、お互いが触れ合わないように固定するんだ。それから、ショートを起こさないように、それをしっかりと絶縁する。そうすれば負の電磁場が外側にできたとき、正の電磁場は、この球体と球体の間の空間だけに発生し、装置群が入っているこの内側はニュートラルの状態に保たれるという仕組みだ」

彼らの問題はそれで見事に解決しました。他の惑星の宇宙船も基本的には同じような仕組みになっているんです。それは実に単純なことなんです。

▲1952年7月20日の夜、米ワシントン市の国会議事堂の上空を多数のUFOが飛んで、多くの目撃者により大騒ぎになった。これはそのときの写真。ある政府職員が撮影したもの。

そして、あらゆる物事が実はとても単純なんです。でも地球ではその単純なことをわざわざ複雑に考えて困難に陥っていることがとても多いんです。

Q ソ連はこの国の経済にとって恐るべき存在でしょうか？

A いや、私はそう思いません。ソ連がこの国の経済をおびやかしているなどということは決してないと思います。

ロシアの経済システムも、アメリカのそれと全く一緒だと言っていいでしょう。あるいは、誤ったシステムの上に、この世界全体の経済がなりたっていると言ったほうがいいかもしれません。どの国の財政も何らかの形で他の国々の援助を得ています。他の国々と関係しないかぎり、たちどころに破綻してしまうはずです。

そもそも、どの国がどの国よりも勝っているなどという考え方が、間違いです。スペース・ピープルは、決してそんなふうには考えません。

バカげた宇宙戦争の噂

そして例の宇宙戦争の噂もバカげています。ソ連も、もちろんアメリカも、他のいかなる国も、そんなバカなことは決してしません。ちなみに、宇宙に出て行こうとしている国は、いまのところ全部で七つあります。皆さんの耳にはアメリカとソ連の二つしか入っていないかもしれません。しかしイギリスはどうなんです？　フランスは？　イタリアは？　ドイツは？　彼らも同じように宇宙を目指しているんです。

そうなんです。結局、現時点では七か国が宇宙に出て行こうとしているわけです。そこで、いま皆さんが用いるべきものは神が与えてくれた常識だけです。

戦争は、月に行って行なうことさえ不可能なことです。我々が作る最初の宇宙船に、たとえば一〇〇人の人間を乗せることができると仮定してみましょう。それで我々にいったい何ができるでしょうか？

第一、一〇〇人の人間を乗せて行くには、その一〇〇人が何日にもわたって消費する食糧も積み込まねばなりません。そこに住んでいる人々と戦うための兵器も、大量に必要になります。彼らが使う何日分もの弾丸も必要になります。彼らが宇宙船から出るときには、マシンガンその他のさまざまな援護用兵器も必要でしょう。

もし月に人々が住んでいるとしたら――実際住んでいるんですが――その人々は、当然自分たちを守ろうとします。それでいったい我々にどれだけの勝つチャンスがあるというのでしょう？　地球のどの国がでかけて行こうと、そんな戦争をしかけて勝てるわけがありません。そのチャンスは皆無です！

ましてや、そこが他の惑星であった

ならなおさらです。他のどの惑星に行って戦争を起こすにも、我々は少なくとも五万人の兵士と、彼らが必要とする兵器その他のさまざまな物資を輸送できる宇宙船を必要とするでしょう。そんなアイデアはナンセンス以外の何物でもありません！

月、あるいは他の惑星にでかけて行って、そこで戦争を起こしたり、そこから地球に攻撃をしかけてきたりするなどというバカげたことを考えている国は、一つとして存在しません。だというのに、そんなことがまことしやかに語られているのですから、本当にあきれてしまいます。

また、いま地球は大戦争の危機（注＝キューバ危機）に瀕していると言われています。その状況は今後どう展開するのでしょう？　私にはそれがよくわかります。皆さんも、この月の一九日までには、それがはっきりとわかることになるはずです。

双方の側がそれぞれの言い分を持っています。そしてどちらの言い分も、それぞれの側からすれば正義なわけです。

結局、フルシチョフはすでに、彼が行けるぎりぎりのところまで行ってしまいました。そこから先は、もう一歩たりとも進めません。一方、ケネディーもまた、彼が行けるぎりぎりのところまで行ってしまいました。彼もそこから一歩たりとも先には進めません。

そして、どちらの側も後戻りしたのでは対面を保てません。そうでしょう？　では、この問題を解決するにはどうしたらいいのでしょう？

常識を働かせればすぐにわかります。問題を国連に委ねればいいんです。国連が答を出してくれます。今月の一九日までに国連が開かれることになっています。彼らはそこに出席するでしょう。実に単純なプログラムです。ですから、私は今回の（キューバ）問題は決して戦争には発展しないと考えています。

ただし、頭の狂った誰かが、突然、誤ったボタンを押してしまえば話は別です。この世界には知性にあふれた人々がたくさん住んでいますが、その知性をほんの少しの知恵とともに用いることのできる人々は、いたとしても極めて少数です。自分の感情を完璧にコントロールできる人間もほとんどいません。

ですから、誰かが誤ったボタンを押してしまう可能性がないわけでは、もちろんありません。しかしながら、ここまでの情勢を見たかぎりでは、その兆候はないようです。

この種の問題は、今後も頻繁に発生すると思います。しかし、それが頻繁に発生すればするほど、このプログラムの存在に、より多くの人々が満足することになります。もしこの種の問題が発生しなければ、兵器産業を存続させる大義名分がなくなってしまいます。もしそうなったら、いまその産業に従事している人々は職場を失うことになってしまうんです！

実にさまざまな物事が、まるでジグソー・パズルのように密接にからみ合っています。冷静になることです。冷静に分析すれば全体の姿がとてもはっきりと見えてくるはずです。とにかく感情的にならないことです。人間は感情的になると目がかすんでしまい、自分が見るべき姿を見れなくなってしまいます。さて、次にいきましょう。

異星人は名称を用いない

Q　名前に関してお聞きしたいのですが。たとえば、土星人たちは自分たちを土星人と呼ぶのでしょうか？

A　いい質問です。土星人たちに限らず、金星、火星、その他のどの惑星の人々も、決して自分たちをそのようには呼びません。

第一、彼らの惑星自体が名前を持たないんです。彼らの惑星に名前をつけたのは地球人なんです。それぞれの惑星を区別するために、それらを発見した人々が、そのつど名前をつけてきたわけです。

スペース・ピープルの間では、各惑星を何かで表現するさいには、数が用いられています。たとえば水星であれば軌道No.1、金星はNo.2、地球はNo.3、そして火星は軌道No.4といった具合にです。

ただ、我々は、たとえば4という数をこういう「4」という数字を描いて現すわけですが、彼らの場合は別の表わしかたをするかもしれません。しかしいずれにせよ、彼らはとにかく各惑星を数を用いて表現していたわけです。

各惑星に名前をつけたのは地球人なのです。我々はとにかくあらゆる物に名前をつけます。あらゆる物にです。でも、この世に名前と一緒に出現してきたものは何一つありません。我々はただ、それを他と区別するための手段として、すべての物に名前をつけているにすぎないんです。しかし彼ら異星人は、いかなる名前も用いていません。

アシュターとは何か

この話が出たところで、アシュターについて少しお話ししておきましょう。彼はこの混乱した分野の中で、近年特に目立った存在となっています。

実はアシュターは二人いまして、チューリッヒで互いに敵対し合っています。それぞれが別のアシュターです。

（注＝アシュターというのは宇宙人の司令官といわれた心霊的な仮空の存在）

ところで、我々はなぜいまトラブルにはまっているのでしょうか？　それ

は、この世界には常に特定の人々の集団の上に立つ大ボスが存在しているからです。

たとえば、ここに一人のボスあるいはキャプテンがいるとします。彼は人々の集団を従えています。いわば独裁者としてです。人々は彼の言うままに動きます。彼は他の誰をも敬いません。しかし人々は皆、彼を崇めたてます。続いて人々は別の誰かをも崇めます。そうやって、少数の人々の精神的な奴隷となります。

私のところに届いている情報によると、アシュターは『NASA』という船のキャプテンとして、多くの人々を支配しているということです。

この太陽系の他の惑星群から来ている人々は、彼ら自身を皆さんや私の上に置いたりするようなことは決してしません。さらに皆さんが彼らを自分たちよりも上に置いて崇めたりすることも決して望んでいません。

彼らは、皆さんの一人ひとりを、神聖なる創造主の『現われ』として見ています。つまり、神聖なる創造主は、それ自身を万物を通じて表現しているという認識を持っているんです。その万物が何をしようと、全く関係なくです！

もしその万物が悪いレッスンを体験しなくてはならないとしたら、それを体験するでしょう。そしてまた、いずれ良いレッスンをも体験することになります。いずれにせよ、その万物を通じて機能しているものは、常に神聖なパワーなんです。

したがって、人間のあいだには、いかなる相違も存在しません。地球人は、社会的地位その他の実にさまざまな尺度を用いて、その相違を無理やり発生させていますが、実際には、そんな相違は全く存在しないんです。

だというのに、どこかの惑星からやって来た宇宙人が、我々の上位に立ち、我々の運命を好転させようとすることなど、どうしてできるでしょう！ 彼の精神的進歩レベルは、我々のそれよりも低いとさえ言えるというのにです。

そんな罠には絶対にはまらないことです。彼は我々に強引に迫るかもしれません。しかし最善の策はかかわりを持たないことです。敏感であることです。混乱に巻き込まれないことです。

霊媒に注意せよ

私は世界中のとても多くの霊媒たちから手紙を受け取ってきました。その中で彼らは「自分はオーソンとコンタクトして、彼から自分へのいろいろな指令を含む類のメッセージを受け取った」と書いています。

私は自分がコンタクトした金星人の一人にオーソンという名をつけました。あれは私がつけた便宜上の名前であって、本人の本名ではありません（注＝異星人には名前がないという）。私はそのことを本の中で書きました。他のスペース・ピープルの名前も同様です。したがって、オーソンに相当する本人が、みずから「自分はオーソンだ」と名乗るはずはありません。

ところが、彼とテレパシーでコンタクトしたと称する人々は、私が彼につけた名前しか言っていないんです。こんなコンタクトはニセモノです。

誰かが、テレパシーその他の何らかの精神的手段によって、オーソンと本当にコンタクトしたとしたら、その人物はそのとき、コンタクトした相手がオーソンであることを示す明確なシンボルが与えられるはずです。それを受け取らない人間はニセ者です。

（注＝真実のコンタクティーは、相手の異星人から必ず何かの証拠物件を与えられるか、相手の正体を確認するための仕草、または合い言葉を知らされるの意。ゆえに一般では心霊的なコンタクトがずいぶん多いと思われる）

人間の転生は永遠に続く

ただ、一つだけ、「皆さんはいくら死にたくても、決して死ねない」ということだけは申し上げておきます。これは宗教的な信念でもなければ、霊的な信念でもありません。これは純粋に科学的な事実です。（注＝完全な消滅はできないの意）。

皆さんは永遠に転生を続けるので、いくら死にたくても決して死ねません！ 自分自身からいくら逃げようとしても決して逃げることができないのと同じようにです。生命は永遠なんです！ そしてそれは極めて現実的です！

皆さんは、これからも生まれかわりによって果てしなく生き続けるんです。これからの、その果てしない年月に思いを馳せてみて下さい。今の段階で学習を積むことが次の段階を確実に良いものにすることになります。そのことにじっくりと思いを馳せて下さい。各段階における学習が常に次の段階をより良いものにします。そのようにして皆さんは、自分たちの未来をどんどん良いものにしていけるんです。

いま結婚なさっているご婦人の皆さん。あなたがたはこれからも無数の多くの夫と結婚することになるのです！ あなたがたは今後も、転生するたびに次々と、さまざまな夫と生活を楽しむことになるんです。

そして、紳士の皆さん方。あなたがたも同様です。そうなんです！ 皆さんもまた（転生のたびに）ご苦労はいつになっても絶えることがないでしょう。本当です！ 私はウソなんかついていません！ 真実を言っているだけです！

皆さんに、神の大いなるご加護があらんことを！（この項、完。以下次号）

久保田先生と語ろう会〈第二回〉

昨年一一月一九日、日本GAP会員の黎明会による「第二回・久保田先生と語ろう会」を都内世田谷区北沢タウンホールで開催した。今回は第一部のスライド映写に始まり、続いて第二部から第三部の質疑応答へとアッというまの三時間であった。

その後の夕食会も余興、歓談と大いに盛り上がり、より深い交流と親睦を図ることができた。また質疑応答で先生は渾身の力をこめて答えておられた。

ちなみにスライド映写中の午後二時五〇分頃、北の方向に、かなり大きな光体が出現した。確認のため、黎明会代表の津田篤孝氏を呼び、消えたあたりを探していると、突然、同じ空間に白金色の光体が出現し、二人を驚かせた。この光体は一カ所に滞空しており、後方にも一機確認できた。

この企画にご参加頂いた多数の方々と久保田会長に心から感謝致します。

黎明会幹事　加藤純一

今回も本誌に予告しなかったにもかかわらず、多数の方が出席されて感謝に堪えない。二〇歳代の若い人達の集まりだが、低次元な雑談的な集まりではなく、全員がスーツ・ネクタイ姿に身を固めた、きわめて真摯な雰囲気で、重要な知識情報を把握しようという熱意に溢れていた。津田代表、加藤幹事その他の方々に深甚の謝意を表したい。

久保田八郎

▼会終了後の楽しい夕食会

久保田八郎先生広島講演会1994

久保田先生のお話を直接に聞く機会のない中国地方の会員の方々のために、何かできないだろうかという「思いつき」からとんとん拍子に準備が進み、今回の講演会が実現しました。ご多忙にもかかわらず快くご承知下さった先生の熱意にとても感謝しています。

一一月二二日の夕方広島に着かれた先生と助手の加藤さんを見守るかのようにオレンジ色の光体が市内に出現し、翌二三日の講演会も五五名の方々が集い、熱心な雰囲気に包まれた会となりました。講演では、万物は一体となって大宇宙力に生かされていることを確認することと、人間のマインドは恐怖心のかたまりであるが、万人を「善」とみて感謝の気持を持つことで恐怖心をなくして幸せになれるという内容にとても打たれました。

私達のカチナ会は「スペース・プログラムに協力できることを楽しく気楽にやってゆこう」をモットーにしています。今後もいろいろと企画しますので、その節はよろしくお願い致します。

カチナ会代表　佐々木朋子、ほか一同

広島での講演は初めてだが、すごく真剣な雰囲気に包まれているのに驚く。皆さんが私をVIP扱いされるので、恐縮して文字どおり身が縮んだ。郷里の旧友・増野一郎氏が奥さん同伴で益田から見えたのには驚喜。

愉快な夕食会のあとで三村真弓さんのハープ演奏による「庭の千草」その他の曲に大感動する。また安田女子大学講師で声楽家の升田裕子さんのソプラノ独唱も素晴らしい。二人とも高度なプロ演奏家である。ハープ独特の清純高貴な音色が今も脳裏から離れない。秋山眞人氏によれば金星の音楽はハープ型の楽器が主体だという。人類の楽器の源流はハープなのだろうか。

翌日はカチナ会のご案内で、加藤純一君と交替して来広した津田篤孝君と宮島を訪問。雲一つない碧空に朱塗りの鳥居や回廊が映える美しさに息をのむ。カチナ会友の四淑女（佐々木朋子、升田裕子、三浦公子、三村真弓）と出席された皆さん方に衷心より感謝致したい。

久保田八郎

▼三村真弓さんのハープ演奏と升田裕子さんの熱唱。

撮影／佐々木朋子

A Great Success! '94 GAP-Japan General Assembly

★大盛況！ 一九九四年度 日本GAP総会

さる一〇月九日、UFOと宇宙哲学の研究団体である日本GAPの定例の年次総会が東京港区の機械振興会館地下大ホールにおいて開催された。

今回は、久保田会長が一九六一年、UFO問題の世界的先駆者であるジョージ・アダムスキー氏の要請により日本GAPを創設し、一九六九年にその目的である「知らせる運動」を日本全国に展開する一環として、その活動の本拠を東京に移してから、昨年八月で輝かしくも月例セミナー通算三〇〇回を達成し、総会としても二五回目を数える記念すべき年になった。

今総会の主題は「アダムスキー・永遠の真実と栄光」と銘打ったもので、海外におけるアダムスキー研究では第一人者であるダニエル・ロス氏とフランス人ミシェル・ジルガー氏を迎えて、日本全国から参会者約二三〇名を数える大変盛況な会となった。

定刻通りに会は幕を開け、久保田会長の力のこもった挨拶の後、最初の講演者「UFO－宇宙からの完全な証拠」の著者ダニエル・ロス氏が登壇した。氏はアメリカGAPを主宰し、日本GAPにとって海外における最大の理解者の一人であり、大変気さくな方である。

講演の第一声は日本語で挨拶。英語に転じて、坂本氏の通訳と共に、最近のアメリカの宇宙科学とUFO研究会に参加した際の報告から始まり、「アダムスキー・永遠の真実と栄光」を主テーマに展開した。全集などでも扱っている話題をも包含したが、ロス氏の解釈、理解を付加してアダムスキー哲学を講説頂いた。

「水滴のたとえ」ではエゴに包まれた泥ダンゴの状態の自分が、「水滴＝真の自己」を知ること、即ち、因の知覚の重要性を力説され、あらためてアダムスキー哲学の達見した心理の真髄を再認識させられた。また「農場主と農薬のたとえ」で、人間と自然との関係に触れられ、「スペースピープルは自然とは絶対闘わない」という一言は、真に金言であった。

氏は今講演の為に、アダムスキー氏の二〇年以上前の講演録（テープ類）を周到に聞き返し、改めてアダムスキー哲学の深遠さを達観したそうだが、アダムスキー氏は「二〇年後に読んだとしても変わらぬ価値があるでしょう（生命の科学）」とその不変の価値をいみじくも語っており、また「夜中に露営火に木を積み重ねるほど明かるさは増すけれども、周囲の暗闇も深くなる（宇宙哲学）」のヒンドゥー教の諺通り、氏の哲学が理解力の向上とあいまって、その深遠さを増す奥行きの深さを、改めて痛感させられた。

休憩で一息ついた後、東京月例セミナーで毎月行なっているテレパシー練習を総会サイズに拡大して実施。会場の雰囲気はリラックスそのもので、大勢の方々による真摯な態度での練習はなかなか壮観な眺めであった。

続いて講演の二番手、ミシェル・ジルガー氏が登場した。氏は昨年フランスから久保田会長の手伝いをしたいとの熱意で来日された方で、氏は「わが母の驚異のUFO目撃」と題する講演を力強く流暢な英語で力演され、参会者の心に響くよう熱弁された。

氏は日本で現在仕事に就かれているが、日本に来られてからは「水を得た魚」（新事実、フランスの水より日本の水は甘い！）の如く活動をされている。今後は日本に骨を埋める覚悟とのこと。

最後に、ロス氏に対する質疑とその応答で、総てのプログラムを滞りなく終了し、多数の参会者に万感の思いを与え、万雷の暖かい拍手を浴びてその幕を閉じることができた。

総会終了後は、大夕食会を同じ会館の6Fに会場を移して開催した。会場には多数の方々が参会し、一二〇名を数えることが出来、ロス氏ご夫妻、ジルガー氏と共に愉快なひとときを過ごすことが出来た。

さらに、会場を新橋に転じ、その余韻を引き継ぎ二次会を開催、担当者の予想を上回る多数の方々にお集まり頂き、その日の夜は大変盛り上がった次第である。

さらにさらに、（恒例の？）東京タワー付近を飛ぶUFOを講演者のジルガー氏、本部役員の篠氏等数名が大夕食会終了後に目撃し、また二次会終了後も、新橋上空に出現した巨大な母船らしきものを多くの会員が目撃したとの嬉しい報告がなされた。

翌日は前日の余韻を残しつつ、都内観光を実施し、参加者の親睦を大いに深めることが出来た。解散時には恒例になりつつある都内名物のおやつ（今回は浅草名物の人形焼き）を参加者に召し上がって頂き、観光をその甘さで締め括ることができた。

今総会を通じて特に感じたことは、例年に比べて暖かいアットホームな総会になったと思うことである。またロス氏、ジルガー氏に接する機会を得て、改めて久保田会長の周りに不思議と援助の人が集まることを痛感させられ、会長個人の人徳と、そのカルマを感じないわけにはいかなかった。このことは日本GAPの将来にとって益々頼もしい限りである。今後も精一杯の努力を傾注したい。

日本GAP本部役員幹事　田中　淳

▲上より久保田会長の挨拶、ロス氏の質疑応答、
ジルガー氏の講演、橋本健理学博士の挨拶。

▲上より大夕食における久保田会長の挨拶、
高梨十光氏の乾杯音頭、パーティ風景、総会
翌日の観光（皇居二重橋前）。 撮影はすべて松村芳之

Letters ユーコン広場

投稿歓迎 字数を問わず。匿名発表可なるも住所氏名明記のこと。

素晴らしかった総会

静岡県　高梨十光

先日の九四年度日本GAP総会の大成功、誠におめでとうございます。

久保田先生のいつもながらの緻密な計画と大胆な実行力、そして威厳ある統率力による御盛会ぶり、本当に素晴らしい総会でした。

今回のダニエル・ロス氏の御講演は、小生がこれまで抱いていたイメージと違って、アダムスキー哲学を前面に打ち出してきたように感じられて頼もしく思いました。

質疑応答では驚くべき新情報を得ることができて、ロス氏のアメリカでの活動が予想以上に活発であることがわりました。

ミシェル・ジルガー氏は、現代の日本人が忘れてしまった、ある種の情熱が溢れていました。遙かな異国から単身で来訪され、日本GAP本部で研修している真摯でひたむきな態度に敬服致しました。

坂本貢一氏の通訳は、誠実で礼儀正しく、国際的な有効に貢献されていました。

大夕食会では乾杯の音頭の御指名を頂きましてありがとうございました。とても光栄です。御芳情に深く感謝致します。多士済々の豪華なる祝宴は、和やかで、知的な雰囲気に満ちていました。

二次会はこれまた猛烈に楽しくて、外国からのゲストと同席させて頂き、新たなる友情が芽生えました。

日本GAP総会はいつも新鮮なフィーリングを提供してくれます。今回もまた小生が知らなかった世界を見ることができて深く感動致しました。

総会はパワーの源

千葉県　林　寛子

先日は素晴らしい総会をどうもありがとうございます。

ダニエル・ロス氏の御講演「アダムスキー・永遠の真実と栄光」には深い感銘を受けました。アダムスキーは永遠に真実は不滅であり、また、アダムスキーの伝えた宇宙の法則を日々生かすことが重要だと、改めて実感致しました。

ミシェル・ジルガー氏の御講演もたいへん素晴らしく、ジルガー氏から強い意志と信念、そのようなものを感じました。

この総会では、両氏の素晴らしい御講演に加えて、多くの会員の方々との接触もあり、自分の生活につながる原動力になったような気が致します。このような貴重な機会を与えて下さった久保田先生に改めて御礼申し上げます。

当日終了後にUFOが、東京タワー近辺に出現し、新橋での二次会終了後にも光体が出現しました。

十分に受け取り十分に与えよ

千葉県　林　慎子

この度の総会の御成功おめでとうございます。

ダニエル・ロス氏及びミシェル・ジルガー氏の講演は良かったですね。特にロス氏の講演の中で、スペースピープルの生き方について触れている箇所がありましたが、非常に印象深いものがありました。氏の「十分に受け取り、十分に与えよ」という言葉ですが、ブラザーズのオープンマインドな生き方がこの一言に集約されていると思います。更にロス氏は「ブラザーズの生き方にほんの少し近づくだけでも、我々の知的レベルは飛躍的に進歩していく」と言っていましたが、まさにそのとおりです。この講演からロス氏のアダムスキー哲学への深い理解力が伺えました。

感動と感謝の総会

広島県　棗田雅則

日本GAP総会の大成功、おめでとうございます。

今年も総会に参加させて頂き、新たな知識と多くの知人を得たことは、自分自身たいへん有意義な二日間でした。毎年、感動と感謝の沸き起こる素晴らしい総会を開催して頂きまして、本当にありがとうございます。これは一重に、久保田先生を始めとする東京本部役員の方々の努力と心温まる御世話の賜であると思います。

本年度の総会は国際色豊かでした。アメリカからはダニエル・ロス氏を御招きして「アダムスキー・永遠の真実と栄光」という演題の御講演を、フランスから来日しているミシェル・ジルガー氏には「我が母の驚異のUFO目撃」という演題の御講演をして頂きました。

ロス氏はアメリカで開催された宇宙科学シンポジウムの内容や、アダムスキーの講演テープから素晴らしい内容の講話を紹介していました。アダムスキー氏の講話の引用で「私達の進歩すべき方向は、自分自身の真の姿を知ること、すなわち宇宙の意識と一体化することである。そうすることによってエゴが無くなり、知覚力が向上し、無限のパワーが得られる」というのがありましたが、氏はこれを水滴と大海のたとえ話で解説しました。我々にとって大きな指針になると思います。

ジルガー氏は「母の目撃体験により、自分自身が影響を受けて来日してGAP活動をするようになった」という、氏のカルマを感じさせるような内容で、興味深く聞かせて頂きました。

御二人の御講演はGAP活動の重要性が益々感じられる素晴らしい内容でした。また講演中は会場が水を打ったように静かで、GAP会員の真摯な態度がダイレクトに伝わりました。

他人にも分けてあげよう

和歌山県　高木伴幸

今回のGAP総会が久保田先生を始めたくさんの人達の努力によって盛大に行なわれたことに、深く感謝します。

僕は初めて総会に出席したのですが、一番感じたことは、日本中でたくさんの人達が日々宇宙哲学を実践しようと努力していることを肌で感じられた、ということです。自分も益々努力して宇宙哲学を実践して自身を高めていこうと思います。今回初めて参加したにもかかわらず、暖かく迎えてくれた東京GAPの方々、各支部の方々に二日間有意義に過ごせたことを感謝します。自分に与えてもらったものを、今度は他人に分けてあげようと思います。

GAPの会員のほんの一部が集まっただけで、あれほど心強く感じられたことは、今後の活動を行なっていくにあたってたいへんプラスとなるものです。自分一人は小さな存在ですが、全体を意識しながら各々のできる役割をこなしていくことは、たいへん意味のあることだと思います。そして自分が、スペースプログラムの末端ながらも、こうして活動できることをありがたく思います。今は自分のことで精一杯ですが、早く他の人々にも自分が教えてもらったものを分けてあげられるように活動しようと思います。

世界に羽ばたく日本GAP

神奈川県　岡田　茂

久保田先生こんにちは。総会の大成功を心から御喜び申し上げます。

国際色豊かな雰囲気に包まれた中で、世界に羽ばたいておられる久保田先生やGAP-JAPANのパワーを感じました。

また東京月例セミナー三〇〇回達成おめでとうございます。先生の超人的な力が可能にした快挙であると思います。私はその超人のもとで学ばさせて頂いている一人として、感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございます。

地に足をつけてやっていこう

神奈川県　穴原美智子

先日の総会の御成功を心より御喜び申し上げます。

独特な真剣で澄んだ空気の満ちた会に参加して、楽しく充実した時を過ごさせて頂きました。誠にありがとうございました。

新しい会員の方々に御会いすることは、初心の大切さに気づかされますし、古くからの会員の方々との再会は、言葉では申し上げなくても「がんばっていますよ、これからもしっかり地に足をつけてやっていきましょう！」という気持ちが伝わってくるようで、うれしいことです。

早いもので私が入会させて頂いてから一七、八年は過ぎたと思います。長年御世話になり、いつも感謝の気持ちを忘れたことはありません。

子供にプラスの影響を

神奈川県　西條美保子

GAP総会に出席させて頂きましてありがとうございました。

ダニエル・ロス氏のアダムスキー関係の御話を聞くことができてとても嬉しく思っております。

ミシェル・ジルガー氏が、お母様から何度も聞かされたUFOの話が今では自分の体験のようになったとおっしゃっていましたが、改めて母親の子供への影響力の大きさを知らされた思いが致します。

世の中の母親達も、たとえUFO目撃が無くても、アダムスキー哲学の本を読んで子供達に「自分一人で生きているのではないのよ。皆で協力して生きているのよ」と教え聞かせていれば、昨今のようなひどいいじめも無くなるのではないでしょうか。人が人を蹴落として生きていく今の世の中では、子供は大人のエゴの影響を受けてしまいます。いけないことです。私も友人達に少しずつでも宇宙の意識に通じたアダムスキー哲学を薦めてゆきたいと思います。

総会の賞品贈呈では、先生のユーモラスな御話に思わず笑ってしまいました。嫌なこともフッと忘れてしまいました。やはりまわりの人々に笑みをもたらすことは大事ですね。私もユーモアのセンスを磨きたいと思います。

前世について

東京　浜田敏博

人間は過去に戻ることができるかとか、人間に前世はあるかということを考えると、これらは時間の流れの問題になると思います。

「覆水盆に返らず」の言葉で表わされるように、時間が過去から未来へと一方向に流れて行くことは、私たちの経験的な法則として感じられます。

このことは物理では「エントロピー増大の法則」と呼ばれていますが、この法則の根底となる統計力学や量子力学の波動方程式には、時間の方向性は現われてきません。

この原因を法則の要素性質の違いによるものと考えると、昨日の覆水も今日の覆水も同様に盆に帰ることはなく、物理的再現性が現われることになるのですが、これは時間に束縛されているという意味で、三次元の法則といえると思います。

ところが波動方程式では時間の方向性が現われないことから、いわば四次元時空を表わす法則と考えることができます。従って、時間に束縛される三次元の法則で考えると時間に方向性があることになりますが、一方、時間に束縛されない意味での四次元法則で考えてみますと時間の方向性はなくなって、人間の前世も存在することになると思います。

感動の広島講演会

広島県　加藤　知行

久しぶりにお便り致します。私を覚えておいでですか。独身時代の二〇年前はよくお便りをしていたのですが、久しくご無沙汰しまして申しわけございません。

先日の一一月二三日には広島講演会にご出席頂き、まことにありがとうございました。私は最前列の席で聞かせて頂きました。司会の升田さんもおっしゃっておられましたが、先生がこの広島の地へ来られて、目の前でご講演をされるとは全く夢のようなことです。私の生きている間にこのような素晴らしいことが起こるとは夢にも思っておりませんでした。先生のお話は私の予期していた以上の内容であり、そのすべてにただただ感動致しました。本当にありがとうございました。今後は「生命の科学」を一万回以上読む決意でおります。

日本GAPはスペース・ピープルから注目されている。

神奈川県　加藤　純一

一一月（昨年）一九日の「久保田先生と語ろう会」と、二三日の「広島講演会」の大成功、まことにおめでとうございます。お疲れのところ、ユーコン誌の編集などで休むヒマもないとは思いますが、永遠の二四歳の先生"ですから、超人的なパワーで頑張ってください。

広島行きでは、いろいろとお世話さまにあいなりまして、有難うございました。

今回の二回続いた大会ではUFOの出現が多く、「語ろう会」では私と津田さんの目撃の他、佐々木八郎氏も会場へ来る途中、円盤を見たとおっしゃっていました。これは一一月二五日の電話での話です。

一方、広島では前日の二二日のホテルチューリッヒの窓から大きなオレンジ色の円形物体を目撃して嬉しく思っております。広島からの帰りにも、自宅前にてジグザグに飛行するUFOを見ましたし、二四日に先生が広島から帰っていらっしゃる夕方にも自宅付近に円盤が出現しましたので、久保田先生と日本GAPはスペース・ピープルから注目されていると、つくづく感じました。

私はこれからも先生のもとで明るく誠実に、宇宙の意識のもとでGAP活動を続けてまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。

▲1994年11月19日、東京世田谷区の北沢タウンホールで第２回「久保田先生と語ろう会」が開催されたときの出席者の一部分。

UFO contacteeバックナンバー主要記事

★下記の他に101号と105号以降最近号まであります。代金後払い可。ハガキでご注文の場合は号数・住所・氏名・電話番号を明記して下さい。バックナンバーに限り送料は当方でサービスします。ご注文は日本GAPへ気軽にどうぞ。

No.127　平成6年10月25日発行　¥900

UFO出現の国ーメキシコ——久保田八郎
ロズウェル事件とMJ12文書——坂本貢一
UFO目撃と不思議体験の旅——4名執筆
私もアダムスキー型円盤を見た！——田口邦雄
UFOとオーラと想念——山崎和子
奇跡的に難病を治す方法——久保田八郎
異星人とUFOの真相(2)——G・アダムスキー

No.126　平成6年7月25日発行　¥900

驚異の瞬間移動とUFOの超低空降下——久保田八郎
UFOを頻繁に見る私のカルマ(2)——溜池みゆき
GAP活動と共にUFO出現頻発——林　寛子
東北自動車道に母船が出現——林　慎子
私も母船を見た！——津田篤孝
ムー大陸から見た原日本人——澤入達男
昔のUFO目撃の思い出——橋本恵一
異星人とUFOの真相(1)——G・アダムスキー

No.125　平成6年4月25日発行　¥900

UFO、デザートセンター上空を飛ぶ——久保田八郎
私はアダムスキー型円盤を至近距離で見た——大野義和
UFOを頻繁に見る私のカルマ——溜池みゆき
不思議な予知透視——米川宣雄
突然出現した不思議な人間——千葉敏江
生命と物質と超能力——伊藤睦史
異星人はなぜ地球へ来るのか——G・アダムスキー

No.124　平成6年1月25日発行　¥900

信念の力、希望の力、絶対に諦めない力を起こす方法——久保田八郎
今世紀末、大変動発生なし！——秋山眞人
私を助けてくれる異星人達——上原則子
アダムスキー型円盤、長時間出現——石井佳子
浅草上空に出現したUFO——堀江健一
UFO・宇宙・人間——G・アダムスキー

No.123　平成5年10月25日発行　¥900

凄い超能力者のUFO目撃と遠隔透視——編集部
私を助けてくれる異星人(1)——上原則子
山梨県に出現した巨大UFO——編集部
エゼキエルはUFOを見た？——久保田八郎
私はアダムスキー型円盤を見た——海瀬宏子
UFOと異星人の実態——G・アダムスキー
謎の古代マヤ遺跡とUFO——久保田八郎

No.122　平成5年7月25日発行　¥900

金星文字を解読してUFOの推進原理を解明！——バシル・パン・デン・パーグ
星々への切符——遠藤昭則
オメ教授が発見した金星？文字——久保田八郎
不思議な体験連続の人生——千葉福造
オーラで異星人を見分ける——紙屋光孝
私だけが見るUFO——須山有美子/宮本浩子
万物は人間の想念に感応する——塩谷信男
四感・生命の息・転生——G・アダムスキー

No.121　平成5年1月25日発行　¥900

パロマー山にUFO出現——久保田八郎
宇宙ボタルはUFO——
アダムスキー型円盤、超低空で東京をかすめる！——
江戸川堤防の怪光体——鈴木　武
不思議な筒状の雲——沼倉孝彦
人間・イメージ・波動——佐々木八郎
驚異の超小型円盤と宇宙の永遠の活動——G・アダムスキー

No.120　平成5年1月25日発行　¥900

宇宙的な信念と勇気を起こす方法——久保田八郎
二人の異星人からの忠告——辻　俊昭
テレパシーで植物を動かす方法——遠藤昭則
人間は生来テレパシー能力を持つ——堀江健一
夜空の不思議な"映像"——田辺優子
重力と宇宙の自然のパワー——G.アダムスキー
モアイとUFOの島へ——伊東芳和

No.119　平成4年10月25日発行　¥900

夜空に不思議な「U」の文字が出現——久保田八郎
私の超能力開発体験と異星人女性との出会い——佐々木八郎
瀕死の妻が宇宙哲学で奇跡的に全快——口ノ町一男
ミコミラクルワールドとイメージ法で腰痛が急速に治る——穴原美智子
神室山上空のUFO——沼倉　孝彦
UFO・異星人・地球人——G.アダムスキー

No.118　平成4年7月25日発行　¥900

イエスの実像と転生の法則——久保田八郎
計り知れぬ影響力をもつアダムスキー——中村省三
宇宙の意識とともに願望を実現させる方法——高梨十光
私のUFO目撃と不思議な体験——川野晶子
音楽は生命エネルギーを運ぶ——鷲見　弘
UFO・異星人・地球人(1)——G.アダムスキー
天地万物との一体化で長寿——塩屋信男

No.117　平成4年4月25日発行　¥900

巨大宇宙船、デザートセンター上空に出現！
地球救済活動を続ける異星人(2)——秋山眞人
飛行機を助けた謎のUFO
奇跡を起こす反復思念とイメージ法——久保田八郎
善だけを探し求めてテレパシーが発現——小川隆志
ひとりで物品が動く現象——大嶋順子
思いどおりに出現するUFO——中島直仁
ジョージ・アダムスキーと異星人(完)——アリス・ボマロイ

No.116　平成4年1月25日発行　¥900

地球救済活動を続ける異星人——秋山眞人
南フランスの不思議なコンタクト事件——中村省三
奇跡的に願望を実現させる方法——テッド・オーウェン
病気治療の宇宙哲学的応用——高梨十光
ミラクル・ワードとミラクル・イメージ——久保田八郎
江東区上空のUFO——森田久恵
南九州支部からの声——曽我部勇人
ブラザーズに助けられた？——藤沢清則
ジョージ・アダムスキーと異星人——アリス・ボマロイ

日本GAP東京月例セミナー300回達成記念行事開催のお知らせ

日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生は、偉大なコンタクティー、ジョージ・アダムスキー氏と1953年（昭和28年）より交流を始め、1961年（昭和36年）９月より、アダムスキー氏の要請により郷里島根県益田市にて「日本ＧＡＰ」を設立されました。今年は創立34年目になります。その間1969年（昭和44年）７月に東京へ進出し、ただちに第１回「東京月例セミナー」を開催して以来、満25年間、ＵＦＯと宇宙哲学の指導啓蒙活動に多大な貢献をされましたが、昨年８月をもって「東京月例セミナー」は連続300回に達しました。その間、先生は病気と海外出張のために３回ほど欠席されただけで、あとは全部出席しておられます。この偉業は深遠な宇宙哲学を学ぶ私達にとりましても大変な名誉であります。それで久保田先生のこの輝かしい業績を記念して『300回達成記念東京特別月例セミナー』と『祝賀パーティー』を本部役員団が主催致すことになりました。この機会に皆様とご一緒に久保田先生と喜びを分かち合えれば幸いに存じます。万障お繰り合わせの上多数の方々のご参加を役員一同心からお待ち申し上げております。

日本ＧＡＰ本部役員団（幹事・田中淳）

■特別月例セミナー

日　時　３月５日（日）１：00～５：00
会　費　￥2,500（従来の受講料と同額）
会　場　機械振興会館６階66号室。

（平素の第２研修室を臨時変更します）
東京都港区芝公園、東京タワー前。日曜日は正面玄関が閉鎖されていますので、右側面の入口から入って、エレベーターで６階へ行き、長い廊下のつき当たりの右側。
＊このセミナーは予約なしで任意に入場できます。

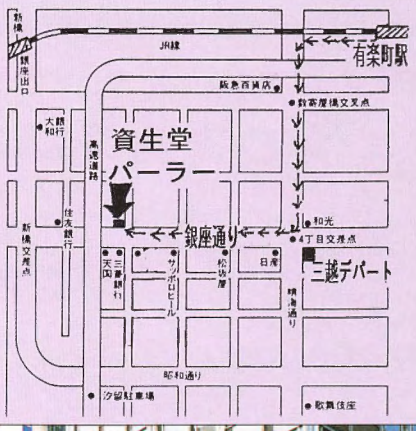
―プログラム―

１：00　「回想の月例セミナー」　遠藤昭則、篠　芳史
２：00　特別講演「日本GAPの歩みと私の人生」
会長　久保田八郎
３：30　休　憩
３：40　スライド映写（秘蔵写真公開）
４：30　テレパシー練習（最高得点者に賞品贈呈）
５：00　閉　会
＊閉会後、銀座８丁目の資生堂パーラーへ移動。記念パーティー開催。

■記念祝賀パーティー

日　時　３月５日（日）６：00～８：00
会　費　￥12,000
申　込　会場の都合でパーティーは完全予約制です。参加希望者は２月20日までに郵便振替で日本ＧＡＰの郵便振替口座（00140－2－35912）へ２月20日までに「300回パーティーに参加希望」と書いてご送金下さい。送金後に参加を中止された場合には後日返金します。昼間のセミナーに出席しないで夜のパーティーだけの出席も可能です。２月の東京月例セミナー会場でも予約できます。
定　員　100名様
会　場　資生堂パーラー４階宴会場
パーティーは立食形式で行ないます。
東京都中央区銀座８丁目８番３号
ＪＲ有楽町駅または新橋駅より徒歩約10分。銀座中央通りの「ヤマハ」の斜め前。
記念品　パーティー出席者全員に①久保田先生直筆の色紙と②300回達成記念特製マグカップを贈呈します（マグカップはＧＡＰ会員で陶芸家の坂本茂子女史による手作りの作品。優雅な気品に満ちています）。

※パーティー終了後、新橋駅寄りのギンザナイン１号館地下の「天狗」で２次会を開催。会費￥3,000前後。



◀資生堂パーラー

George Adamski
新アダムスキー全集

ジョージ・アダムスキー＝著／久保田八郎＝訳
全面改訂・改訳／全10巻／各 四六判

超絶した文明を持つ、太陽系の他の惑星群の人々とコンタクトしたアダムスキーを米政府機関は密かにマークしていた！ＵＦＯや惑星群の驚異的実態と深遠な宇宙思想を伝える本全集は、地球人類に宇宙的覚醒の必要性と真の生き方を示す永遠の古典。ＵＦＯと宇宙哲学の研究者にとって必読の名著。旧全集を全面改訂した最新決定版。世界に類書なき金字塔！

① 第２惑星からの地球訪問者 ●352頁●定価＝1.980円

ＵＦＯ研究家として世界的に著名なジョージ・アダムスキーの、1952年11月20日、米カリフォルニア州の砂漠に着陸した円盤から出てきた金星人との会見から始まる驚異的なコンタクト実録。著者自ら円盤や母船に乗り込み、他の惑星の超絶的大文明の実態を明かにする、本全集の中心の書。写真多数収録。

② 超能力開発法（テレパシー、遠隔透視その他） ●192頁●定価＝1.300円

世間に氾濫する通俗的な超能力開発法とは根本から異なる宇宙的能力の発現法を説いたもの。目、耳、鼻、口、の四官をコントロールして、肉体内部の宇宙の意識から来るメッセージを感受し、真の意味でのテレパシー、遠隔透視その他の超能力を身につける方法を具体的に詳述。類書皆無の重要文献。

③ 21世紀／生命の科学 ●208頁●定価＝1.300円

アダムスキーが他界する前年に出した12冊分の講座を一冊にまとめたもの。アダムスキー宇宙哲学の総括的な一大金字塔。特に人体細胞の実態と真実のテレパシー、及び霊界通信の誤り等を科学的に解説した超能力開発指導書。心霊現象への接近を警告する画期的な理論を明快に説く、第５巻の続編として必読のテキスト。

④ ＵＦＯ問答100 ●216頁●定価＝1.300円

1958年にアダムスキーは、世界中から来る質問の洪水を分類して質疑応答集を出した。全部で100問のＵＦＯ関係の質問に懇切な回答を与えている。現在の混迷した世界のＵＦＯ研究界に的確な示唆と回答を示すものとして、内容は今も驚くほど新鮮で有用である。ＵＦＯ研究者の素晴しいガイドブック。

⑤ 金星・土星探訪記 ●380頁●定価＝2.400円

アダムスキーが大母船に乗せられて、想像を絶する進歩をとげた金星と木星を訪れた体験記。特に金星人の少女として生まれかわった亡き妻メリーとの劇的な対面が圧巻。第２部には1958年以来、日本におけるアダムスキーの代理人として啓蒙活動に専念している久保田八郎宛の多数の書簡を収録。

⑥ ＵＦＯの謎 ●262頁●定価＝1.980円

ＵＦＯの推進原理をはじめ、聖書とＵＦＯとの関連などを詳述して様々なミステリーを解明した重要な文献。第２部はアダムスキーの世界講演旅行記で、各国ＧＡＰ網の活動状況が克明に描写されていて1960年代のＵＦＯ研究界の実情と一般人の宇宙観がよく理解できる。第１巻の続編。

⑦ 21世紀の宇宙哲学 ●148頁●定価＝1.030円

地球人が真に宇宙的な成長をとげるための基本的思想として、マインド（心）と肉体内部に宿る宇宙の意識との一体化を説いた書。既成のあらゆる宗教や哲学では理解し得なかった人間の意識と万物との関係を説いて21世紀の思想を先取りした。第５巻、６巻と合わせてアダムスキー哲学の三部作をなす。

⑧ ＵＦＯ・人間・宇宙 ●370頁●定価＝2.400円

アダムスキー支持活動団体として世界のトップクラスをゆく日本ＧＡＰの機関誌に掲載された、アダムスキーのＵＦＯと宇宙哲学関係の論文、講演録等を編集。他界する直前の最後の講演が圧巻。第２部には訳者・久保田八郎が再三渡米してアダムスキーの今は亡き高弟たちと接したインタビュー記事を収録。

⑨ ＵＦＯの真相 ●320頁●定価＝1.980円

アダムスキーの薫陶を受けた人達の論説・講演録等を収録。宇宙的実像と人間味豊かな庶民性をあわせもつ偉人の素顔を多角的に描写。アダムスキー氏の高弟アリス・ボマロイ、キース・フリットクロフト、ハンス・ピーターセン、金星文字を解読して画期的な永久モーターを開発したバジル・バン・デン・バーグらの証言が白眉。「サンビエトロ大寺院の異星人」と題する久保田八郎の体験記も興味深い。

⑩ 超人ジョージ・アダムスキー ●232頁●定価＝1.300円

厖大な新アダムスキー全集の最後をしめくくる完結篇。アダムスキーの宇宙的な活動と深遠な哲学を集約して伝えるとともに、彼の伝記をも加えてこの巨人の人間像を克明に描写。これ一冊でアダムスキー問題の何たるかが理解できる全集のコンパクト版。豊富な写真入り。国際的なアダムスキー研究家・久保田八郎が書き下ろし執筆。

別巻 UFO－宇宙からの完全な証拠 ●480頁●定価＝2.800円

ダニエル・ロス＝著／久保田八郎＝訳

アメリカの気鋭ＵＦＯ研究家ダニエル・ロス氏が全力で展開したＵＦＯ問題の真相。月・惑星探査結果に関するＮＡＳＡ（米航空宇宙局）の隠蔽工作を暴露し、アダムスキーの体験の真実性を科学的に実証した画期的な内容の本書は、ＵＦＯの研究者のみならず、宇宙科学に関心ある人にきわめて有益な知識情報の源泉となる。写真多数掲載。

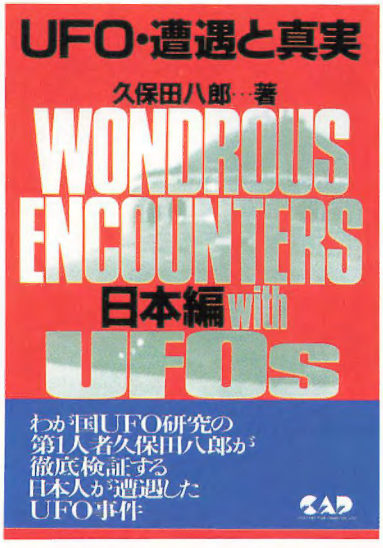
中央アート出版社
〒104 東京都中央区京橋3-7-13
TEL＝03-3561-7017／郵便振替＝00180-5-66324

＊新アダムスキー全集全巻をまとめてご注文頂きますと定価の10%引き十送料がサービスとなります。
＊定価は、全て税込みです。

UFO・遭遇と真実 －日本編－

★久保田八郎著　　￥1500　送料￥310　四六判・246頁　美麗カヴァー付

日本で発生した驚異的なＵＦＯ事件を８件選び、わが国ＵＦＯ研究界の第一人者・久保田八郎が新たに書き下ろして読みやすく編纂した本書は、類書がないほどに不可思議な事件に満ちています。実証主義をつらぬく著者が各事件現場を検証、体験者や証人達に直接会って徹底的に調査した結果、真実そのものであると確認した事件のみを流麗な筆致で活写。豊富な写真・イラストとあいまって読者を大気圏外の世界へ誘う稀有の保存資料です。



■書店で品切れの節は下記へ郵便振替か現金書留でご注文下さい。
中央アート出版社　〒104　東京都中央区京橋3-7-13
振替・東京8-66324
※上記の書籍は日本ＧＡＰでも取扱います。著者の署名捺印入り。
ハガキでご注文下されば代金後払いで直送します。

〈内容〉
①関東大震災中に横浜で人々を救出した円盤
②東京タワーから少年が円盤と塔乗員を目撃
③高松市に超低空で降下した円盤と手を振る少年
④旭川市郊外の夜空に展開した物凄い光景
⑤ＵＦＯに乗せられてエジプトまで飛んだ少年
⑥熱烈な願いに応えて出現したＵＦＯを撮影
⑦尾道市に出現したアダムスキー型円盤と母船
⑧円盤や母船に乗って別な惑星に行ってきた秋山眞人氏

英文版「UFO contactee」No.10　発行　日本GAP

Ｂ５版／12頁／コート紙使用／￥500　送料￥190／5冊まで￥270／6冊以上￥390　(NO. 1～3は品切れ)

日本GRP発行英文版ユーコン誌は理想主義的なＵＦＯ専門誌として、世界各国のＵＦＯ研究団体や個人研究家から絶賛をあびています。多くのＵＦＯ研究誌はオバケ宇宙人、誘拐事件、その他恐怖心を煽るような記事に終始しているなか、日本ＧＡＰは日本語版・英語版とも地球の未来に大いなる希望を持ち、人間の無限大の可能性を引き出すための指針に満ちた記事を満載しています。英文版第１０号には昨年度総会におけるダニエル・ロス氏の講演全文を掲載。他にも新アダムスキー全集第４巻掲載の質疑応答の原文、日本ＧＡＰの活動状況を伝えた記事等が流麗な英文で掲載されています。もとの日本語記事と対照して読めば英語学習用にも最適です。

編集後記　★★★

●昨年一〇月の東京総会は大盛況でした。ご参加戴いた方々に厚く御礼を申し上げます。年四回発行のため遅れましたが、ダニエル・ロス氏の素晴らしい講演を冒頭に掲載しました。きわめて有益な内容です。いっしょに講演したミシェル・ジルガー氏の情報にも深く考えさせられるものがあります。あの総会の日には、あちこちでＵＦＯが出現したようでして、一種のＵＦＯデイでした。

●前回掲載不可能だった遠藤昭則氏のオーラ透視法に関する記事は白眉です。練習しだいで誰にでもオーラは見えると強調しています。おおいに超能力を身につけて下さい。

●またもアダムスキーの凄い内容を伝える記事が皆様方を驚かせたと思います。ひそかに地球で行なわれている異星人の活動を一般人が全く気づかないとは！　そんなものかもしれませんですね、この世界は。

●次号にはサイコメトリー（物品や書物に手をかざして、その物の特質や書かれた書物の内容の真偽などを波動で感知する方法）の達人の体験記が出ます。すごく有益な興味深い内容ですからご期待下さい。

●ＵＦＯ目撃報告、ＵＦＯ写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究実践体験、宇宙科学等の原稿や資料を募集しています。原稿書きの苦手な方には面談して取材します。ふるってご応募下さい。掲載分には薄謝を呈します。

●本誌は多数のボランティアーにより全国の主要書店に卸されております。この活動に参加希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。　(K)

日本ＧＡＰ専門誌・季刊　春季号
UFO contactee　128号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本ＧＡＰ
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-3651-0958
振替　00140-2-35912
一九九五年一月二五日発行
定価九二七円（本体九〇〇円）・送料240円

※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断引用転載を禁じます。

1995年度
日本GAP全国月例セミナー案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	プログラム・テキスト
東京本部	毎月第１日曜日　午後1:00→5:00 ※３月のみ会場は６階66号室で特別セミナーを開催。詳細は本号49頁。 ※５月のみ第２日曜日の14日に変更。会場も第１研修室に変更。	港区芝公園3丁目5-8「機械振興会館」地下３Ｆ第２研修室。 ☎03-3434-8216。JR浜松町駅下車。東京タワーの正面前。浜松町駅から東京タワー行きバスで約８分。 連絡先＝日本ＧＡＰ本部　☎03-3651-0958 ※日曜日は正面玄関が閉じられているので、右へ回って建物の右側面の入口から入る。	会場費 ¥1000 セミナー 受講料 ¥1500 計¥2500	1:00→1:30　会員による講演。 1:30→3:00　久保田会長による講義。 ※平成６年１月よりテスキトを新アス全集２巻「超能力開発法」に変更。 3:10→5:00　超能力開発練習／近況報告／質疑応答。
大阪支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。JRまたは阪急電車吹田駅下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥500	東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。 テキストその他＝東京本部に同じ。
新潟支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00	新潟市東万代町９「新潟市青年の家」(万代市民会館と同じ建物) ☎025-246-7711。JR新潟駅より徒歩5分。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	同　上
名古屋支部	毎月第２日曜日　午後1:00→4:30 ※４月のみ第１日曜日の２日に変更。会場と時間は不変。	名古屋市中区金山１丁目５番１号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141㈹。 JR東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩５分。 連絡先＝林　国宣　☎0586-45-6468	¥300	同　上
仙台支部	毎月第３日曜日　午後1:10→4:20 ※当分の間、セミナーは中止。	仙台市青葉区米ケ袋1-1-35「仙台市片平市民センター」会議室。 ☎022-227-5333。仙台駅からお鐙屋橋経由動物公園方面バスで約７～10分。東北大正門前下車、真向かいの建物。 連絡先＝笠原弘可　☎022-284-2910	¥300	同　上
山形支部	毎月第１日曜日　午後1:00→5:00 ※日時は変更があるため、毎月事前に柴田宛電話で問い合わせること。	山形県天童市老野森１丁目1-1「天童市中央公民館」 ☎0236-54-1511。天童駅から徒歩10分、タクシー４分。天童市役所の裏側。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥300	同　上
札幌支部	毎月第１日曜日　午後1:00→4:30 ※日時・会場は不定につき、事前に高野宛問い合わせること。	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821。 連絡先＝高野省志　☎011-783-6393	¥500	同　上
旭川支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00	旭川市五条４丁目「旭川ときわ市民ホール」３Ｆ 302研修室 ☎0166-23-5577 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	同　上
沖縄支部	毎月第４日曜日　午後1:00→4:30	具市川市栄野比1213-1「具志川市野外レクセンター」会議室。 ☎09897-2-7722 連絡先＝里　孝人　☎098-869-9964	¥500	同　上
秋田支部	毎月第２日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥500	同　上
横浜支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」 ☎045-681-6511。JR関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩３分。 連絡先＝清水　正　☎03-5951-3518	¥500	同　上
茨城支部	毎月第４日曜日　午後1:20→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	同　上
長野支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00	塩尻市大門７番町「塩尻総合文化センター」第１会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	同　上
紀南会	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00 ※日時と会場については小川宛事前に問い合わせること。１月より会場を右記へ変更。	和歌山県新宮市春日１番35号 「新宮地域職業訓練センター」工業コーナー　☎0735-23-0005' JR新宮駅下車、徒歩５分、新宮市役所隣。 連絡先＝(副代表)小川隆志　☎0735-32-2834	¥300	同　上
栃木支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市市役所裏「御殿山会館」１Ｆ小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km、市内行きのバスに乗り天神町下車。徒歩５分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	同　上
南九州支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00 ※10月より会場と連絡先を右に変更。	鹿児島市与次郎2-3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先＝曽我部勇人　☎0992-53-2315	¥500	同　上
高松支部	毎月第３日曜日　午後１：30－４：30	香川県坂出市寿町１－３－５「坂出勤労福祉センター」 ☎0877－46－2463　JR坂出駅より徒歩10分。 連絡先＝関 高明　☎0875-72-2698	¥500	同　上
伊豆支部	毎月第１日曜日　午後1:00→4:30 ※日時は変更があるため事前に高梨宛電話。	静岡県三島市一番町20-5「三島市民文化会館」第３会議室。 ☎0559-76-4455。三島駅より徒歩３分。 連絡先＝高梨十光　☎0558-72-7832	¥500	同　上

オーソン肖像写真

1952年11月20日、アダムスキーが米カリフォルニア州のデザートセンターで会見した金星人を、目撃者の一人アリス・ウエルズ女史が双眼鏡で観察しながら描いたスケッチをもとにして女流画家ゲイ・ベッツが油絵に仕上げた絵画の写真。10.5cm×17cm（不許複製転載）

¥1,000　送料¥130

金星のシンボルマーク

中央の眼は万物を見透す宇宙の意識、つまり人体を生かす生命パワーと叡知をあらわし、周囲の4層の放射状ゾーンは人間のマインド（心）の発達状態をあらわしています。人間のマインド（心）は眼・耳・鼻・口の四つから形成されるので4層になっているのです。

¥500　送料¥80

ＥＳＰカード〈超能力開発用〉

テレパシー、遠隔透視等の能力開発用としてアメリカのデューク大学で開発されたカード。5種類の図形カードが各5枚ずつあり、計25枚のセット。堅牢な厚紙製。重さ40ｇ、5.7cm×8.9cm。携帯に便利なポケット用。どこでも気軽に練習できます。使用説明書付き。

¥900　送料¥130　（2～5個）¥190

テレフォンカード

日本GAP特製テレフォンカードの第7弾。1951年3月15日、午前10時30分、アダムスキーがパロマー山で6インチ反射望遠鏡を使用して連続4枚撮影した金星の母船の4枚目です。母船から6機のスカウトシップ（円盤）が発射されているのが見えます。

¥1,500　送料10枚まで¥80

ＧＡＰキーホルダー

日本GAPがデザインして製作したオリジナル・キーホルダー。シンボルマークの周囲を「WITH COSMIC CONSCIOUSNESS（宇宙の意識とともに」の金文字が取り巻く優雅なデザイン。円形部分は直径3.2cm。鎖とも全長9 cm。非常に堅牢に出来ています。

¥1,900　送料130

会員バッジ

金星のシンボルマークが金色に輝く優雅なデザイン。表面の透明樹脂がキズを防ぎ、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏の留め金が心棒ネジ留め式。女性用は安全ピン式。ご注文の際は、いずれかを明記して下さい。実物の直径は1.7cm。

¥2,000　送料4個まで130

ブックカヴァー

主として新アダムスキー全集用に作られたカヴァーですが、同じ大きさの四六判の書籍ならどれにも使用できます。表側の中央にシンボルマークと「宇宙の意識とともに」を意味する英文が金色で箔押しされた濃紺色の優美なデザインです。人造皮革製。

¥1,200　送料¥190　5枚まで¥270

ＧＡＰシール

シンボルマークを「宇宙の意識とともに」の英文が取り巻く優雅なデザインのシールです。カバンその他の持ち物に最適。

1枚に大小5個1組　**¥200**　送料10枚まで¥80

新アダムスキー全集　訳・著者　久保田八郎の署名捺印入り

中央アート出版社刊「新アダムスキー全集」を日本GAPでも取り扱っています。各巻とも扉に久保田八郎の署名と捺印を入れてお届けします。詳細については本誌の広告を参照して下さい。全巻注文の際の定価割引はありません。送料は1冊310、7冊まで¥660、10冊まで¥900。ハガキでご注文下されば代金後払いでお届け致します。

申込先　上記各商品のご注文の際は住所・氏名・品名・個数・電話番号をご記入の上、郵便振替か現金書留でご注文下さい。代金後払いも承ります。その場合はハガキに上記のとおりにご記入の上お送り下さい。商品の中に郵便振替用紙を同封しておきますから、現品当着後、最寄り郵便局からご送金下さい。消費税は無関係です。

〒133　東京都江戸川区本一色1-12-1-511
日本ＧＡＰ　振替　00140-2-35912
☎03-3651-0958

日本ＧＡＰ能力開発カセットテープ

★日本ＧＡＰ東京本部月例セミナー

毎月開催される日本GAP東京本部月例セミナーから、久保田会長の「超能力開発法」解説講義と質疑応答その他を録音したテープ。これを聴けば絶大な信念と勇気がわきおこり、あらゆる障害を超えて成功に到達できます。

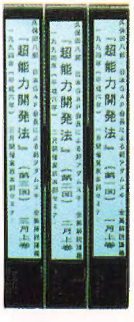
●テープ①　¥1500
〈内容〉久保田会長による新アダムスキー全集第2巻「超能力開発法」の講義。近況報告。

●テープ②　¥1200
〈内容〉会員による講演、超能力開発練習、質疑応答。

●1993年度日本ＧＡＰ総会　2巻セット　¥2700
〈内容〉久保田会長講演「信念と希望と絶対に諦めない力を引き出す方法と成功の秘訣」質疑応答。各総会テープのバックナンバーあり、往復ハガキでお問い合わせください。送料＝テープ1本　¥190、2～3本¥270、4～6本¥390

申込先　品名、〇年〇月分、個数、氏名、住所、電話番号をご明記の上、郵便振替でご注文下さい。（テープの代金後払いは不可）
〒133　東京都江戸川区本一色1-24-3-202
松村芳之　振替　00100-2-162644

日本ＧＡＰビデオ



臨場感溢れる画像があなたを会場に引き込み、宇宙的な一体感を起こします。全巻VHS。

●東京本部月例セミナー　全1巻　¥3000
〈内容〉久保田会長の解説講義、他、約120分。

●日本ＧＡＰ総会　全2巻各¥3000
〈内容〉毎年開催される日本GAP総会を完全収録。（1989年度分から在庫あり）。

●日本ＧＡＰ海外研修旅行　全1巻　¥3000
〈内容〉旅行のハイライトをまとめた楽しいビデオ。（1989年度分から在庫あり）

●1992年度デザートセンター調査行　全1巻　¥3000
〈内容〉1952年11月20日、アダムスキーが金星人とコンタクトした地点その他を調査した記録。送料はビデオ1本¥390。2本以上3本まで¥700。4本以上7本までは距離に応じて変わります。

申込先　ご注文の際は品名、〇年〇月分、上下巻の区別、個数、郵便振替でお申し込み下さい。（ビデオの代金後払いは不可）
〒162　東京都新宿区富久町36-18　富久マンション103
伊東芳和　振替　00140-8-13811　☎03-3351-9526

UFO contactee 128号
一九九五年一月二五日発行
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
振替00140-2-35912
定価九二七円(本体九〇〇円) 送料一四〇円